づ普通なりとす。遼陽に於ける風俗中特徴とも視るべきものは婦女子の頭髪を高燈亮兒と稱する梳法に曲せしめて結へるもの多きにあり。其形狀我が稚兒輪を更らに擴大にして後方に扁せるが如きものなり。」とある。

序でに遼陽の教育のことを左に抄錄しやう。

「遼陽に於ける教育制度の不完全なることは支那内地のそれよりも更らに甚しきものありしなり。然るに一昨年(三十七年)我軍の占領に歸して以來我政府は此地に諸般の設備を施すと同時に、清國官吏に對して主として教育制度の興起を促し、準備着々進渉して遂に昨年(三十八年)八月官立師範學堂の開校を見るに至れり其他巡警總局内に警務學堂の設置あるも素より公開的のものにあらず、又私立文思學堂設立の計畫あるも其規摸設備共に到底完全を期し難かるべし。只日清語研究の爲めに客年を以て創設したる日清語學校は目下入學生百餘名の多きに達し、前途頗さ有望なり。

官立師範學堂

遼陽唯一の教育機關たる官立師範學堂は東二道街の東端城壁の下にあり、構内に附屬高等小學堂及び師範傳習所を併置する等總ての設備は畧完全に庶幾と謂つ

可し(沿革は遼陽兵站監發行の「遼陽案内」中に詳なり。——K.T.生日、遼陽案内中に見えたのを拔抄すると次の如くである。明の嘉靖年間に御史胡文舉なるもの文廟の傍に遼左學院を建設し、別に社學六ヶ處を設けし後皆廢せられ只處々に私塾の存するあるのみ今の知州に至つて新に師範學堂なるものを設立し本邦より教師二名を聘し生徒一百名を募集せり、去十月二十三日(三十八年)學生の入學試驗を行ひしが、應試者三百四五十名ありしといふ。而して同學堂の科程は本邦の尋常師範學校の科程に準じ外に速成科を設くる筈なりと云ふ是より先き遼陽前知州沈金鑑氏は學堂創設の志あり、偶日本官衙の熱心なる勸誘ありしかば、沈氏は奮つて其經營の任に當るを決心し、三十八年七月曾て書院たりし地をトして學堂建設の工を起したり、越えて八月中邦人犬伺大助氏は同學堂教務長として招聘せられ、直ちに來任して工を督し、十月末日に至り畧竣成を告ぐるに至りぬ。偶沈知州は新民府に榮轉の命を受け十一月赴任の筈なるを以て其以前に學堂開辦の事に決し、則ち十月三十日を以て開校式を擧行したりき。本學堂の經費は總額壹萬餘圓、書籍購入費五千圓而して此等の經費は商店に課したる罰欵より籌辨したりと云ふ學堂生徒の第一回入學試驗を施行したし時、考に應せし者無慮五百餘名の多きに達せしを

見れば以て如何に清國人が新教育に對し留意するに至りしかを窺知するに足るべし。中に三十六を採りて師範生とし三十を高等小學生とし三十五を傳習生となせり斯くして滿洲に於ける模範的學堂は設立されしなり。今當學堂の職員氏名及び職掌を擧ぐれば次の如し。

監督　遼陽前知州

教務長　教務一切を主管し教習を兼ぬ　犬飼大助

教習　學科を分擔教授す　開田盛次　劉維藩　錢堃

外に漢文教習一名缺員

監學　學生の操行を管す　（現時缺員）

庶務宮　一切の庶務を掌る　齊際昌

文案　孫鶴田

會計　張維綱

師範學堂は學年を三年とし十三名を官費生二十三名を自費生とし共に寄宿舍に居住せしむ。漢學の素養充分なりと認めたる者を選拔して入學せしめ、卒業の後は遼陽管内の小學正教員たらしむを目的とす、授くる所の學科は日本内地の師範學

校と大差なく、之に日本語を正課として加ふ。入學年齡は二十歲より三十一歲迄とす

高等小學堂は學年を四年とし普通學を授くるを以て目的とし十六名を官費生十四名を自費生とせり。然るに其後考試に合格せずして入學を請ふもの陸續絶えず且教室に多少の餘裕ありしを以て傍聽生制度を採り附課生として二十八名に進學を許し共に一年級にあり。其年齡は十五才より二十五才迄とす。

傳習所は特に學年を定めず、專て遼陽州内にあり村塾を開き教鞭を執り居たる村夫子を集め來り、新教育の體式教授法の大體を知得せしむるを目的とす、現在日々教室に上り聽講しつゝある者は陰曆の十二月に至りて業を畢へしむる豫定なり而して學生の成績は一般に良好なり。

日清語學校

日清語學校は在留邦人をして清語を、清人をして我日本語を研究せしめんがために設立したるものにして、授業者多數の便宜を圖り夜間を以て教授することゝし目下の生徒は百余名に過ぎざるも、漸次增加して將來の隆盛期して俟つべきものありといふ。其役員及び規則は左の如し

監督　遼陽兵站司令官　何知州
理事長　玉木副官　丁巡警總局長
理事兼會計　諸石交涉委員　外一名（缺員）
教習　今川通譯　福崎通譯　諸石交涉委員　富尾章
舘門　犬飼教務長　德城守尉　收野少佐　關口通譯官

日清語學校設立之趣意書

日露既に干戈を修め茲に平和克復を告げたり、是より日本人の滿洲に移住營業を爲すもの清國人の出でゝ商業を營むもの一層多きを加ふ可し從つて日清兩國人の交際貿易最も頻繁にして隆盛を見る可きは自然の趨勢なりとす、是に於て彼我人民の言辭通せざれば交際の禮を缺き、貿易上の意志疎通せず誠に兩國民の遺憾とする所なり、故に我等大に鑑みる所あり、一の語學校を設立して日清語學を授け以て兩國民の言辭意志の疎通を圖り、國交をして益々親密ならしめ通商貿易をして益隆盛ならしめんと欲す、願くば有志諸士奮つて入學せられんことを。

日清語學校規定

第一條　日清語學校は日清兩國の國語國文を授く。

第二條　學校は日清語學校と稱し遼陽兵站司令官並に遼陽知州監督の下に當分の警務總局内に講堂を設置す。

第三條　本校に左の役員を置く

理事長二名、理事兼會計二名、教員若干名

第四條　本校に於て教育す可き課目は別に定む

第五條　本校の諸職員は當分の内遼陽兵站司令官及び遼陽知州合議の上囑托す

第六條　本校の學生たらんとするものは本校の規定に從ひ其手續をなすべし

第七條　本校の學生は諸雜費として毎月三日迄に銀五拾錢を納付すべし

但一旦納付したる銀は返付せず

第八條　本校教育の景況及び會計は毎日理事より理事長に、理事長は六ヶ月毎に兵站司令官及び知州に報告す。

これで大體遼陽の風俗は分る右の文の中に高粱の話が出たから一寸此事について記すと、高粱は唯滿洲に於ける貧民のみに使用され、主として家畜の飼料燒酎の

原料としてゐる。高粱の幹莖は高さ人を沒し、燃料として又支那家屋の天井其他種々の器物に用ひられ、根では蓆を編むとの事だ。

扨、首山堡からの歸りに遼陽城に這入つて、町をうろ〳〵行つて居る間に道には迷ふ、腹は空く、暑さは暑し、困頓頗る甚しうなつた時、やつと白塔を目當に停車場まで歸つた。

遼陽城の目標になるものは廣祐寺の白塔である。汽車に乘つて野末から見る人も首山あたりで見る人も、白塔あつて即ち遼陽あることを知るのである。廣祐寺は塔の爲めに白塔寺とも云つて西門外停車場から三町ばかりの處にある。漢時代の建築で一度唐の尉遲恭が修理を加へ、二度清朝太宗の天聰八年に修理を加へたと云はれる。清の聖祖が此寺に詣でゝ詠んだ詩が傳はつてゐる。即ち

禪宮多歲月　瑞塔積風烟　翡翠苔碑暗　珠璣寶相傳　馴鴦來紫鴿　湧池出青蓮　微雨輕埃洗　茲晨興獨偏

野に聳えて雨にうたれ風にさらされ恰も移りゆく世の樣を冷に見てゐる樣な白塔は十三階三十間、屹然として天を摩し眞夏の烈しい日光に白く照り榮えてゐる。下には樹木が茂つて露國人時代には公園になつてゐたさうだ。

此塔の屋蓋の上には更に雲に聳ゆる小塔を立て半腹以下八角の各面には佛像を彫り、屋蓋の右端に小鐘を垂下してある。

疲れ切つた足を引ずつて蒲クロパトキン官舍前の宿舍に歸つたのは、未だ日の高い六時頃であつた。

夕食後兵營に行つて一風呂浴びて來るや否や、明日の朝も亦早いから南京虫に對する用意なども怠らずして床に就いた。

七月廿九日　晴。營口行

數日來の疲勞で前後不覺に眠つてゐると。

「オイ起きろ〳〵」で敲き起された。時は廿九日午前二時二十分、草木も眠る丑三時である！

滿洲旅行をした學生の健康は不良であつたと頃日都下の新聞紙は報じたが、其原因の一は實に睡眠不足にあるのだ。殊に遼陽に於て然りである。遼陽に着ついたのが眞夜中、去るのがまた眞夜中で、碌々夢を結ぶことも出來ぬ始末だ

大陸の朝寒に胴震しながら口を漱ぎに出ると星は降る樣に出てゐる。また今日も暑いことだらう。そこ〳〵に用意をすませて闇暗の道を辿つて停車場に行つた。氣

車の出たのは三時過。

互に風邪を引かぬやうにと戒め合つて馬貨車の中に寐る。夜風が冷々と這入つて來る。一睡の後不圖目がさめて見ると夜は白々と明けかけてゐる。東の空は紅を溶したやうに燒て、光を帶んだ薄紫の雲、櫨の雲、眞紅の雲などが目も遙な野末に浮んで、今しも頭を出しかけた日を抱かうとしてゐる。野には一刷毛刷いたやうに薄青い霧が懸つて、高粱畑には露が煌めき初めた。

涼しい朝風が流れるやうに戸の隙間から這入つて來る。

八時頃に大石橋について其處から營口線で西に向ふ。(遼陽大石橋間五十八哩、大石橋營口間十四哩)

營口の停車場についたのが九時十分。日のカン〳〵と照り付つけ出した頃である。停車場こそ營口の名を負うてゐるが實は此處は牛家屯で實の營口市街は此所から遼河に沿うて一里程下流にある。

停車場に下りて先づ目についたのは其邊の亞鉛葺の屋根の下に、山の如く積み上げてある貨物で、戰時の俤を偲ばせてゐる。宿舍は矢張り停車場前の倉庫の一部で廣大な建物である。荷物を下して汗を拭つてゐると、兵站部や靑年會の方で色々と

歡迎の方法を掲示された散髮も出來る限りの人數を無賃でしてやる。襯衣も一人一枚だけは洗濯してやる。と云ふやうな此旅行には破天荒の優待である。しかのみならず娯樂室あり新聞雜誌の類を讀み手風琴オルガン、グロックなどを弄ぶことが出來る。コートありテニスが出來る。殊に中々の御馳走があつて吾々をして營口なる哉と叫ばしめたのである。何日振か知らぬが久振で身體中寬ぐやうな氣がする。

數行前に宿舍は廣大な建物だとは云つたのが立派な建物とは云はなかつた。廣いことは中々廣いが亞鉛葺でアンペラ敷である。それだから日中の蒸しあつい事は實に夥しい。焦熱地獄から來るやうな風が吹く。

散髮して貰つて見物に出かけるのには少し暇があるから、窓から覗いて見ると、高粱の穗並の上に支那流の帆柱や薄黑い帆が見える。これは直ぐ前の遼河を往來するヂャンクである。

遼河は源を直隸省の東北隅(直隸省と內蒙古との境)の高峻なる山地に發し、其境に沿うて東に流れ盛京省を灌漑して營口から海に注ぐのである。滿洲通志には、

遼河は三稜州を有せず、甚だ廣く且つ深き河底に依つて遼東灣に注ぐ、而して灣の

北岸地方は甚だ緩慢に隆起せる結果、此河の下流をして漸次伸長せしむるの傾向あり、昔時遼河の河口に牛莊市なるもの設立せられしが河口は更らに著しく降下して田庄臺に至り一八三六年には進んで寂莫たる一漁村の營口に遷れり而して營口には時勢の轉移により今日の如き繁榮なる都邑となるに至りしが此都邑も現今は海より十五露里以上に引退するに及べり。

とある。ジャンクの往來は通江子以下八百清里の間盛である。鐵嶺の條下に記した馬蜂溝は此上流であるのだ。

暫時して營口見物に出てゆく。裏の高粱畑を突切れば直ぐ遼河の岸で、滔々たる濁流が眼前に表はれる。營口までは輕便鐵道とジャンクの便があるがジャンクに乘るのも一興だと云ふので、大抵は此方を取つた。本三英語の川崎君が通譯の勞を取られた。

吾々が舟着場に出かけると、好き客ござんなれと四方から「好々的々々々」と喚きながら輕舟を寄せて來る。一舟凡そ十人を載せ終つて舫を解けば快哉！輕舟は「快々的」に大河を走り下る。

見渡す所川幅は七八町にも余らう。宛然內地の大水の如く濁りに濁つた河水は平

野の間を流れてゐる。右は大房深あたりで左は營口街道だ。

「ニイやヤン〳〵デイ、ボコベンナア」などと囃し立てるので、舟夫は櫓漕を始める。行く〳〵河端で水泳をしてゐる支那人をも見た。船唄を唱ひながら悠然に下る大ヂャンクをも見た。大阪商船會社支店の前に繫つてゐる千五百噸か二千噸ばかりの氣船をも見た。下流に林立してゐる帆檣をも見た。

やがて公園に上陸して樹蔭で休憩した。何でも兵站部で茶菓の饗應があるといふ話であつたが、何かの行違で到頭不得要領に終つたから、解散して自由行動をとることになつた或者は油房見物に行つたが僕は三四人の友と一所に市街を見物した。開港場であるだけに一體か奉天あたりの町とはずつと綺麗で清潔であるが、地理は不案內なり方角は立たず、折角見るべき者を見なかつたのは遺憾であつた只道路を平すに用ふ機關車引のローラル（これは東京にも未だない、何時か青柳先生に敎はつたものだ）とか有名な敵設水雷の引上げたのとか、名は知らないけれど某々領事館某兵站部某聯隊などだらうと思はれる看板のない大きな建物を素通りに見たのみである。滿洲通志に

營口は滿洲唯一の貿易港なり、市街は支那街と外國居留地の二區に分れ、前者は

普通の支那街と同じく不潔なり、支那街の北方にありて其區域廣からず、又美觀ならざるも稅關の如きは宏大なり。

とある。此港は十一月中旬結氷し三月初旬に解氷するから純粹に貿易の出來るのは八ヶ月間で、かやうな點から將來の運命をトすると何うも大連の方が有望である。殊に南滿鐵道を十分利用することが出來るやうになれば遼東の野の豐富な物產も大半は鐵道で南下するやうになるだらう殊に大連の港と營口の港とは運輸上非常の懸隔があるから何れが榮え何れが衰へるか火を見るよりも明らかである因云營口の軍政署が支配する人口は十萬に余るさうだ。

書籍店や繪葉書店を素見した位で歸途についた。中にはまた舟に乘つた人もあるが非常に時間が要るだらうと思つててく〳〵河に沿うてあるき出した。今日は實に暑い、室外の溫度は百度に近からう。疲れた足を引ずり〳〵宿舍へ歸つて見ると入口には「學生宿舍」と記した板をかけ、丸太で鳥居形の門を作つてそれを綺麗に白布でまき、アンペラで額を作つて赤くwelcomeと記してある。室內に入ると屋根裏に萬國旗を飾つてある。尙敷蒲團、毛布、蚊帳の類まで貸してある。こんな厚遇は初めてなので一同喜びあつた。

露兵が營口を襲擊した時の名殘は此近邊にある多くの墳墓に止つてゐる。此襲擊戰の講話が四時頃からあつた筈だが何分宿舍に歸つたのが五時過ぎてゐたから聞くを得なかつた。大方地歷の諸君が書かれるだらう。

今夜は舊の九日か十日だらう。涼しい月が空に懸つてゐる。折柄何の用もないのでジャンクを河の中流に浮べた人もある。日中の苦熱に引きかへて夜は淸涼秋の如くである。川面に薄霧がたなびいて何處からか哀しげに船唄が聞える。

八時半から牛家屯在住キリスト靑年會の說敎があつて某少佐の談話があつたとのことだ。

七月十三日　晴、　金州行

五時過起床、六時三十五分滿車で出發した。向ふ所は金州である。大石橋についた時一人の日本兵が一人の支那人の辮髮をとつて引ずつてゐる。支那人は行くまいとする、兵士は力任に引張る、終には可哀さうにも足蹴にしたので支那人は到頭大聲を發して泣き出した。

大石橋から本線で南下する、熊岳城、得利寺、普蘭店などの名ある所につくと、熱苦しい馬貨車の中に呻吟してゐるものが「どれどれ」と首をさしのべて寫生などするの

もをかしい

三十里堡では一昨日三十ばかりの馬賊があらはれたさうだ。

一體馬賊といふのは何か、自分もよくは知らないが二通りばかりあるやうだ、即ち一は數人で黨を作つて支那人に向つて强盜を働くもの、一は隊を作つて日本の軍隊を脅すものである。

此月の二十三日、北上の途中、大石橋についた時にも驛夫のものが話してゐたのにはつい先達も夜滊車の中で支那の旅人が馬賊のために十二人許りも殺されたさうだ。何の停車場でも支那人が大きな荷物を背負つて、乘つたり降りたりするのをよく見るが是れは苦力の旅行者で彼等は甲地から乙地に移る時には、一囊の中に一財產を纏めて行くからして比酸的に金を多く持つてゐる。これが彼等の馬賊に襲はるゝ所以である。それに滿洲の夜滊車には燈火を點じてないので、夜中に慘劇の演せらるゝことが多い。旅客も馬賊も何れも臆病な支那人の事であるから、金を出せば命だけは助けると云ふやうなこともなく、强盜即ち殺人を意味する實に氣味の惡い奴である。後者の隊を作つて日本軍隊に抗する方は、先頃盛んに遼東半島の東海岸を騷がせたものである。龜子窩で大に暴れて巡査などが苦戰したのは諸

君も既に御承知のことであらう。三十里堡に表はれたと云ふのも此類で、彼等は機關砲位のものは持つてゐるさうだ。この馬賊については後にも記すことがあるだらう。概して馬賊は山東省あたりから流れ込んで來た苦力の職を失つた奴がなるとのことだ。

夕日の赤々と照榮えてゐる頃に金州へ着いた。宿舍は停車場の構內である。金州では大に學生諸君を歡迎するつもりであつたが馬賊討伐の爲めに守備隊が大分出て行つて人手がないから、思ふやうにもならぬが其所は諒せられたいと、指揮官から丁寧な挨拶があつた。

今日ももう何をする暇もない、夕飯を食つて一休みすれば早や夜だ。

此頃の高粱が繁てゐるのを機として、馬賊が跳梁するから夜の外出はあまりしないやうにとの注意があつたので、友達と共に酒保に行つたばかりである。

酒保は野中に立つた兵營の附近にある。

郊外にビールを持出して栓をぬく。沫はコップの中々に白い。どぎすましたやうな月が中空に懸つて野に罩めた薄霧の上に凉しい光を投げてゐる。十二三町南に一沫夢の如き線を引いてゐるのは有名な南山で、吾等が今屢をかけてゐる此石此草

も或は我勇士の血潮を灑がれた者かも知れない。乃木大將が寂しい夕陽に馬を立てゝ山川草木轉荒涼、十里風腥新戰場征馬不前人不語金州城外立斜陽と詠じたのも此邊であらうと思ふと寒い月の光も、露のきらめく野原も一として感興を起さぬものはない。松蟲か蟋蟀か、蟲の音は雨の如くあたりの草原に流れる。

酒保の前には步哨の交代兵が五六人休んで雜談してゐる。彼等は此明月に對して何を語るのであらう、我等の旅は極く短いものであるが、それでも金州まで歸ると一日も早く大連を出帆して山水明媚の鄕里に歸りたいと心組くも思ふのである。女々しいやうではあるが、月を仰ぐと何うも然う思はずには居られない。それを此先一年なり二年なり樂と云つては何もない這麼異鄕の空に、長い月日を過すかと思へば懷鄕の念も一層甚しいだらう。

折柄近くで步哨交代の喇叭がなつた。朗々として響きわたる莊重な音が寂しい野山を渡つて餘韻空しく消え終つた時、吾足許の葉末の露はほろ〳〵と零れたそして友の眼にも我眼にも月にきらめく露があつた。

七月三十一日　晴　柳樹屯行

日本晴、南山を見物に出かける。

南山々頂に至る坦道は學生旅行の擧ゝることを聞いて金州駐屯旅團長伊崎(良熙)少將が人夫を督して新に開かれたものだとの事。

南山は宿舍から十二町位のものだ。時間にして僅か十七分の道程。

山頂に登つて見れば金州の地形は歷々として眼前に開ける。東は大連灣、西は金州灣で茲に僅か一里半の地頸をなし我南山は其喉佛にあたるのである。北を望めば金州城は指顧の中にある。西は龍王廟の岬より深く入つて金州灣をなし、東は大和尙山大連灣南は旅順街道からかけて大房身遠くは大連の煤煙までが一々見える。

山頂には既に伊崎少將が小谷副官を從へて登られてゐる。先づ鎭魂碑前で小谷副官(中尉、米吉)の地點說明があつて、それに次いで伊崎少將は親切に南山戰爭の講話をせられた。

三十七年五月三日我海軍は更らに十六艘の船を以て旅順港口を閉塞し敵も亦水雷を布設して軍艦の出動を止めて了つた。時に敵は九連城に先づ敗北して今將に遼陽にむけ退却中である。これより先き第一師團(長は伏見宮殿下)第三師團(長は大島義昌)第四師團(長は小川又二)其外砲兵一旅團(內山少將統率)で編制された第二軍は運送船にのつて、或地點に集合し、徐に時機の至るを待つてゐたが、時は好しと五

月五日、片岡海軍中將掩護の下に、是地(南山)を去る十六里の龜子窩に上陸し、先づ敵騎三百を走らせて直ちに歩兵三十四聯隊を普蘭店に進め、(是地より十三里北又一部をして龜子窩街道を進ましめた。

五月六日午前八時、神の如き我兵は忽然として普蘭店に出で鐵道線路を破壞したから、これで遼陽旅順間の連絡は全く切れて了つた。龜子窩方面に出た部隊も任務を果した。

第一師團は東方北方を封鎖するために金州城に向けて前進し、第四師團はそれを掩助すべく、第三師團は普蘭店で敵の南下を妨げやうとする。

後續隊は續々龜子窩に來り、第五師團もやがて來た。此師團をば遼陽に向はしめ第三第四師團の一部を之に加へた。第一第三第四師團の首力は南山に向つた。右翼第四師團は、一部で廿五日夜十二時迄に金州城を占領し、其他の主力を以て南門より海岸までを師團の線として南山を包圍する如く攻擊せよとの命令である。此夜は大雷暴風咫尺を辨じない。部隊は龍王廟に集合し敵と衝突して漸く西門に迫つた。然るに砲兵がゐないので、工兵は西門を爆破せん爲めに九回まで點火したけれど風雨のために功を奏しないやがや北方の河原より打つた砲彈の爲めに二十六日

午前五時金州城を占領した。それから高家揚の方に進行し左翼は海を渡つて南山に迫つたが、散兵壕や鐵條網等のために、急進すること出來ず、空しく彈丸雨飛の下にさらされて苦戰に陷つた。恰も好し二十六日午前九時頃に我砲艦四艘水雷艇二隻が金州灣にあらはれた。

中央第一師團は金州城東南角より七里庄まで配置し前方(是山の突角と山頂(こゝ)とを宵金山の北麓なる砲兵陣地から擊つた。此軍が城門を破つて金州城に入つたのは大方第四師團と同刻であつたらう。やがて南山に迫つたのであるが麓には一連の鐵條網を繞らしてあるので、松村少將の計畫した第一突擊隊第二突擊隊は全滅し終り第三突擊隊も殆ど全滅に歸した。

左翼第三師團は午前九時揚家屯、馬家屯線まで來たが此時既に死傷は多かつた。然るに大連灣に敵の砲艦ホープルがあらはれて左翼背より砲擊し出したので第三師團左翼は非常に苦境に陷つた。此時敵は豫備隊を大房身附近に置いたやうである。

折柄悲報は續々軍司令官の許に飛んできた。曰く敵の陸戰隊來る、曰く我彈藥縱列は潰亂せり曰く野戰病院も潰亂せりと。蒼然たる暮色は既に迫つた。機は今に有る。

時に突として命令が下つた。曰く「如何なる困難あるも攻擊を前進すべし」と。全線俄に氣色立つて潮の湧くが如くに前進した。百十有余門の大砲は轟々然として山河を鳴動し、煙は咫尺も辨じない程に渦卷き立つた。此勢ひに敵假令鬼神であつても避けざるを得ない。遂に午後七時二十分歡呼のうちに南山は我軍の手に入つた。」終に臨んで少將は將來の國民殊に吾々將來の教育に與る大責任を有するものに希望すること多大なるを說き、吾々の前途を祝福して講話を結ばれた一言一句皆肺腑より出でたる此語には一同深く感動したのであつた。

櫻井教授は直ちに出でゝ學生一同に代り、覺悟と感謝の辭を述べ、終りに君が代を二唱、大日本帝國萬歲と伊崎少將萬歲とを三唱して解散した。わざ〳〵吾等の爲めに用意をされた天幕の陰で、湯茶を饗されてそれから宿舍に歸つた。

因云、敵が如何に南山に備へたかを後で調べて見たところ實に驚いた。本防禦に曰く山頂に於ける約十箇の砲臺、又は砲壘、曰く十五珊以上の榴彈砲四門九珊乃至十五珊舊式加農砲十門十二珊速射砲二門、曰く十珊五乃至八珊五の舊式砲、曰く重砲約八門、曰く二十珊砲十五珊短加農十珊半加農八珊六加農七珊六速射砲等各種の大口徑砲を通じ約七十門、速射野砲約二中隊而して副防禦には曰く鐵條網、曰く地

雷。其築造物には曰く散兵壕、曰く探照燈。而して砲壘砲臺を圍繞するには圍壕を有する塹壕數層の構築を以てした上に、大連灣頭に砲艦壹隻。

此戰に死傷したのは將校以下四二〇四名で內死者は七四九名であつた。

午後一時頃に金州見物に出かけた。停車場からは半里ばかりあつて好い道がついてゐる。市街は例の石壁で圍まれて嚴然たる城郭をなしてゐる。南門を入つて見ると奉天や遼陽より規模の狹いだけ小綺麗に出來てゐる。道も車道と人道とが分れて稍清潔だ。町はあまり繁華でないかして人の往來も左迄ではない。

金州城を見に來た重なる目的は東門外の南金書院を參觀するにあつたので、途中の關帝廟にも覗かず直ちに其方へ急いだ。東門を出て一寸曲れば直ぐ南金書院である。立派な洋式の門を這入つて合歡の木茂る庭を突切れば、石造の宏壯な建築物がある。これは露人の建てたものだ。

元來此書院は以前からあつたものであるが日清戰爭日露戰爭のために廢絕してゐたのを一昨年十一月に日本の手で復興して、上流の子弟を收容した。今は生徒數八十一名で、これを三班に分つてゐる。今其時間表を記して見ると

第一班第二班時間表

	第一時	第二時	第三時	第四時	第五時
月	修身	國作文	國作文	東語	講經體操
火	東語	算術	國作文	習字講經	習體操
水	讀詩	算術	習字講經	東語	講經體操
木	算術	東語	國作文	講經體操	習體操
金	修身	算術	國作文	東語	講經體操
土	東語	作文	國作文	習字講經	習體操

第三班時間表

月	讀詩	講經	東語	作文	體操
火	修身	講經	東語	算術	格致
水	算術	講經	東語	講文	體操
木	算術	講經	東語	歷史	地理
金	算術	格致	東語	作文	體操
土	修身	講文	東語	歷史	

卒業年限は元來は九年であるが今の所では三年に縮めてあるさうだ。教室には地

文圖、生理圖、動植物圖、人種圖等を多くかけてある。露人のゐた時には勿論露語を教へてゐたものゝ其時にも論語孟子などの課目はあつたが、これは只政策の一端に過ぎない。今は只立派な鑛物の標本が殘つてゐるばかりだ。一體此邊で文字を知るものは百人に一人の割合であるが此城内には比較的に多いと云ふことだ。

午後五時過から柳樹屯に向けて出發した。今夜はそこに宿つて明日の晩方にまた金州に歸りそれから滊車で大連に歸る豫定である。

高粱畑の間を拔け大連灣の海岸に沿ひて山一つ越えると直ぐ柳樹屯である。金州からは二里半だといふ。大房身から鐵道があるけれど此四月以來不用になつてゐる。着いたのは既に七時頃であつたらう。海が間近いから直ぐ海水浴を試みた。海は遠淺で海水浴には中々好い所である。今年は初めてゝはあるし長い間旅行をして來たのではあるし實に愉快である。二三十分間も縱横に泳ぎまはつて疲れ切つた身體を暖い砂の上に横へてゐると、前面の大連沖に白色の軍艦(米國のか)が滑るやうに入つて來る。丁度此頃は第二艦隊が碇泊してゐるので彼の軍艦から十五發の禮砲を放つと暫時して我軍艦からも十五發の答禮砲を放つた。殷々たる海上の砲聲は障るものもない平面上に音波を傳ふるためか、非常に壯重である。日本を何百

里かはなれた此地に、堂々たる我軍艦を見て胸の躍るあまりの僻耳でもあるまい。

大連の家屋や煤烟などがよく見える。

茲にも守備はあるのであるが、例の馬賊の爲めに多くは留守である。夜なども一人歩きは止してくれと云ふ達があつた。

一體此柳樹屯と云ふのは露國の租借時代には青泥窪の商港に對して、大連灣市と云ふ名の下に專ら軍事上の目的に用ひられたものである。旅順大連租借條約の「旅順口大連灣の兩處は地勢險惡なるを以て露國は自國の費用を以て砲臺營築を建造し及び一切地方を保護する爲め擧辨すべき事件は露國の酌行に由るべし」とある大連灣は所謂青泥窪を差したのではなくて柳樹屯をさしたものである。

戰時には大棧橋が五箇あつたが今は三個だけ殘つてゐる。

今晩は挽割飯で中々愛嬌があつた。食後友と酒保に出かけた。今夜も明月だ。露のきらめく高粱畑の間を通りぬけて、火光を目あてに丘の上にある酒保に行つて、月下にビールを傾けたいゝ機嫌になつて海岸に出ると、あゝ何と云ふ良い月夜だらう！水のやうな空に十三夜ばかりの月が懸つて、大連灣頭瀟灑たる萬條の金波！極く薄く海面をおほうた霧の中の南三山島の影黑く、遙か灣の彼方なる大連市の

燈光は山の麓にぽッと輝いてゐる。波打際の小石に腰を下して友と二人、默然として月光を浴びた。露けき風がもて來る高粱の葉摺の音が如何にも秋めいてさやさやと鳴つてゐる。すると突然白く見える亞鉛葺の兵舍の間からガヤ〳〵と人の聲が聞える。次第に近づいて來るのを聞いて居ると那珂先生の連中で、大方月を稱しながら海濱傳ひに將校集會所の方へ遊びに行かれるのだらう。

人の聲が微になつて遂にもとの靜寂にかへるとひた〳〵と私語するやうな波の音、さやさやと鳴る葉摺の音ばかりで月光水の如く流れるうちに天地の秋をあつめたやうである。

心づいて立上れば袂はしつとりと露にぬれてゐる。

「あゝ夜は秋だ！」友と顏を見合せて云つた。更けると愈々惜しい月夜であるが、また明日の旅もあることだからと、海の方を振返り〳〵宿舍に歸つて床に就いた。

八月一日　晴、大連行

今日も日本晴だ。奉天まで我々を苦めた雨期は既に過ぎ去つたのであらう、毎日々々快晴續きで朝から暑い日がさす。朝早く一浴び泳いできた。

皆は午前八時に出發して柳樹屯南山(又は和尙山)に行き忠魂碑や前面の清國舊砲

盗の話を聞いた。自分は疲勞してゐたから靜養のつもりで行かなかつた。地歴の諸君が書かるゝであらうから人傳の話はこゝに記さぬ）

午後は將校集會所に遊びに行つて、歸りにまた游泳をやつて、宿舍に歸ると出發の用意をする。四時半金州へ向けて出發。

七時五十八分大連に向け金州驛を發車した。暫くすると南山も見えなくなる。

「南關嶺！南關嶺！旅順線乘換!!」

月明、大連に入つた。

八月二日　晴　大連

今日から五日迄は何を爲きねばならぬと云ふこともない。つまり自由行動である。從つて記すべきこともない。只自分のしたことを記して置くに止るのだ。朝のうちには伊勢町あたりの繪葉書店をひやかしたり、此前來た時にうつして置いた寫眞をとりに行つたり、序でに民政署裏の海岸で快く游泳した。

午後もまた海水浴に出かけたところが近道をしやうとしたばかりに、海軍工廠の中に迷ひ込んで圖らずも此地の船渠を見ることを得た。船渠の中には水雷艇が這入つてゐた。番兵に叱られながらやつと迷路を出て朝行つた海岸に出ると、これは

したり！潮はずつと干て了つて游泳した處には日に乾いた白い岩石を見るのみである。折角來たものだからと思つて大分沖まで出て見たが、一面の藻葉で何うも仕方がないから斷念して歸途についた。

歸りがけに北公園に入つて見ると廣場のコートでテンスをやつてゐる。見ると本校の中川君や吉野君などがゐる。青山師範の見知つた連中もゐる。大連組合のチャンもゐる。自分も久しぶりで恐る〳〵野次つて見たが、遠近は些も分らず。コートはコンクリートでアウトラインの後には凹面があるし、球はわるし少しも面白くない。

此公園には合歡の木が多いので此頃は青々と茂つて葉蔭に寢たら夢も面白いだらうと思はれる。コートは其公園の中の廣場にあるので四周には針金の網を張つて球の飛ぶのを防いである。

夜信濃町近くの花月席で義太夫があるといふので例のすき心から聞きに行つた。大連あたりで義太夫が聞けるとは有りがたい世の中である。

行つたところが未だ始めであるのか三十人位の聽衆である。座敷は八九十疊で正面には高座をしつらへてある。語るものも三味も男で或は皆素人かも知れない。只

傳々會の好者なのだらう、寺子屋、宿屋、合邦三十三間堂三日太平記等をやつた。

聞いてゐるうちに夕立がきた、終つて外に出ると月は路邊の楊柳に白く更けて涼風はそよ〳〵と顏を拂ふのであつた。

一體此頃大連は五時半頃に夜があけて九時少し前に日が暮れるので、頗る東京とは趣を異にしてゐる。夜の二時頃が東京の十二時時分で往來の人通りは少くない。現に傳々會なども午後六時開會とあつて實際開會するのは日暮即ち九時頃であるから、夜の二時頃は賑かである。

八月三日　晴、大連

老虎潭見物に出かけた。

逢坂町を越えると急な坂でもないが山道で、老虎潭まで二里位の道程である。海岸に出て小山を越えれば波靜かなる老虎潭だ。日本の茶店が二三軒ある外は支那の漁村で、家屋としては「虎老潭築城團宿舍」の見るべきのみで極めて寂しい片田舍だ。此地は波靜かに水清く海水浴の好適地である。夏の眞晝に一灣の藍光は燦灼たる白日と相映じて目も眩むばかりである。波は暑さに疲れてかノタリ〳〵と渚をねぶつてゐる。潮の香高い海濱に立つて遙かに彼方を望めば、こは何たる壯快のことぞ！

噪々たる黑煙を吐いて壹岐、沖の島、浪速、千代田等の我第二艦隊は舳艫相銜んで沖の方蒼溟煙るが如き中を驅走してゐる。大方旅順か天津あたりへ行くのであらう。

久しぶりで茶店の壘の上で畳仮を使つてから一泳ぎやつて歸途についた。

夜花月席で帝國軍人救護會の寄附金募集會があつた。格別用もないから行つた。初めのうちは義太夫があつてそれから救護會から遣された某少佐が、老體を起して會の主旨を演說した。それが拍手のうちに終ると次は某藝妓の筑前琵琶で那須與市を語つた。清晓の音節は實に稀に見る所で到底大連のものではない。次には三人の連引で華かな元祿踊、次は越の戸語につれて三味と笛とを合せる高雅なものだ。次に新內の明烏。

未だ長唄などがある筈だつたが夜も更けたから割愛して宿舍に歸つた。

今日の夕方、時間を利用して再び旅順に出かけた連中があつた。

八月八日　晴、大連

格別變つたこともない、只有志の人が吾々旅行學生の爲めに慰勞の會を催されたので、夕食後(七時半過)大連基督教會に行つた。會の名は滿州旅行學生送別會と云ふのであつた。

門を入ると有志の人から扇子を寄贈された。其銘に云く「神は愛なり」。

民政署の吉田理學士(吾々が初めて大連に着いた時に遼東の地質について說明の勢を取られた人)が先づ立つて吾々に對する慰勞の言葉を述べ併せて松富氏の滿洲婦人救濟會を紹介された。

それから松富氏が立つて其滿洲婦人救護會を紹介された。其概略は次の如くである。

醜業婦の多くは二十歲以下殊に十六歲以下のもの(刑法にふれるもの)が三分の一に當つてゐる。鐵嶺、奉天、遼陽あたりで見る日本婦人は殆ど醜業婦である。彼等の內幕は實に悲慘なもので本會に引取つた少女には十三年二ヶ月のものさへある。十四年のものもある。其中にはかつて夜中逃亡して海中に投じ或は鐵路に橫つたものもある。又救助された後にも以前病んだ梅毒の全快せぬのを氣にして海に投じて死んだものなどは、最も悲慘な一例である。或は衰弱し果てた爲に手をつくした療養も功なく遂に異境の骨となつたのもある。

醜業婦救濟會と云ふ名に對して反感を抱く人もあるが此會は罹災者の救濟會である。救濟して見ると僅に十日か二十日位で彼等の品格が幾分か異つて來る。斯る點

から見て此會は非常に趣味ある事業である。

本會では九時から十時まで學科の敎授をする。中には電話交換局に出してゐるのもある。慈惠病院も近々設立するつもりである。

元來此事業は單純な慈善事業ではなくて由々敷い人道問題である。醜業婦は皆賣買せられて居るので自由のものは一人もない。其賣らるゝや實に殘忍なもので健なれば酷用し、弱なれば捨てゝ顧みない。新嘉坡では婦人を貨物の如く値を附け、高所で競賣を始めて印度人や支那人の間に賣拂ふ。滿洲では夫程烈しくはないが隱約の中には行はれてゐる。支那人に賣るには三百圓乃至四百圓の相場であると聞いた。近頃も營口の某支那富豪が女の家庭敎師を聘しに來たのは好いが、代價は若干かと尋ねたので、大に叱責してやつた所が彼は却つてそれを驚いてゐた。これでも日本婦人は一定の相場で支那人の間に賣買されるものだと、彼チャンコロ等が思つてゐることは察せらる云々。」

次に宣敎師のBryden氏の演說があつた。その次に某氏の演說があつて、それから那珂博士は立つて吾々一同に代つて挨拶を述べ、支那人の辮髮と纏足について一場の講話をされた。

講話終つて會から菓子やカタパンやラムネなどを澤山寄贈された。

會終つて門に出ると月は朧ろに赤らんで凄い光を放つてゐる。奇妙だと思つてよく考へて見ると驚めた！今夜は月蝕だ。滿洲で月蝕を見るなどは妙だ。

八月五日　晴、乘船

愈旅行を終へて今日は乘船歸國の途につくことゝなつたので土產やら船中の用意やら中々忙しかつた。朝から空は日本晴で暑さは頗る烈しい。朝飯をすますと早速行李を整へて一同民政署の向の小學校に行つて、紀念の撮影をした。

今日限りでまた滿洲には來られぬ此地だと思ふと名殘惜しい情がむら〳〵と起るので、一二の友を促し立てゝまたもや民政署裏の海で泳いだ。宿舍に歸つてから急いで風呂に行つたり昼食をすませたりして、重い荷をかついで汗をふきながら埠頭に行つた。

七月に我等を乘せて來てくれた琴平丸は、今また我等を迎へに來てゐる。「暴風雨の恐あり沿岸を警戒せよ」と云ふ警報が旅順あたりから發されたので、吾も人も幾分かの心配はあつたらう。風は稍強い。

一時頃乘船、三時頃に舟は徐々として進行し始めた。

甲板に立つた。風は帆柱に鳴つてゐる。回想の眼をあげて離れゆく大陸を見た。大連市街の宏大な屋宇、南方一帶の高い山、更に海をへだてゝは先日行つた柳樹屯あたりの點々たる兵舍、雲に聳えた大和尙山、何れも吾等を見送つてゐる。接する時日は短かつたが、思出の多い懷しい山河、再會期し難き遼東の地、次第に波の中に沒し去つて、只大和尙山のみが僅かに一點の黛色を水平線に泛べて、何處までもと我等を送つてゐる。

夕日は波に洗はれてゐる、赭色の壯大な入道雲が蒼黑い海面に映つてゐる。いつしか後になつて了つた圓島微に小さく、大和尙山も消々になつた。そして蒼然たる暮色は海上に迫つた。

風は恐ろしく吹き出して舟の動搖すること實に夥しい。窓から覗いて見ると陰雲密にとざした穹窿の下に、滔々として天をつかんず大濤奔波の物凄さ。どん〳〵と舷を打つ波音にすら氣の弱い人は坐ろに魂き消えるであらう。所は名たゝる黃海沖である。

電燈の光仄暗き船底に呻吟く人も大分出來た。

八月六日　雨、船中

今日は大雨に風で船の動搖は益烈しい。朝目をさますと水夫が。

「早く顏を洗つて下さあい。七時までしか水はありませんよ」と叫んで走りまはつてゐる。その聲も兎もすれば風にとられさうだ。

午後五時半朝鮮の群島に入るまへに舟は濃霧の爲めに進行を止めた。濃霧！この一語位我海軍に深い意味を與へるものはなからう。想起す三十七年六月十五日御用船常陸丸は浦鹽から出て來た露艦に果敢なくも對州沖で沈められた警報に接した上村中將の第二艦隊、すは！と云ふので露艦の後を追つたが折から凜々たる雨と霧。今度こそはと意氣込んだ我將士が無念の涙に咽んだのは、實に此濃霧の爲めではないか。

甲板に出て見ると十間先きは全く見えない。眞綿のやうな霧が閉ぢ罩めてゐるのだ。幸にも二時間ばかりで稍薄らいだから、舟は徐々として進行を始めたが危險を恐れて群島を迂廻したとの事だ。

夜に這入つてからの動搖は實に恐ろしい程であつたが、疲勞と衰弱とで終夜うつらうつらとして夢も結べず、隨分苦しかつた。

八月七日　晴、曇、晴、船中

午前二時半頃に便所に行かうとして上甲板に出ると空は何時しか奇麗に晴れて、十六夜の月は高く冴え、稍穩かになつた海は月光を浮べて清流の如くである。四望何をも見ぬさかひに小さな星が閃々と曜く。

朝五時頃に巨文島を見、午後二時頃に對島を見、久しぶりで松の生ひ茂つた大和島根を見たのである。

七時半頃に六連島の前面に碇泊することになつた。夜は門司を通過するのが極めて危險だから明朝まで茲で待つのである。琴平丸の外二三艘の滊船が碇泊してゐる。船員の云ふ所では明朝直ちに茲を出發して九時か十時頃に門司につき、九州方面に歸る人を下ろし、午後五時頃に宇品について檢疫をうけるから上陸するのは明後日になるだらうとの事だ。

朝來の陰雲は名殘なく晴れて、六連の浦に波は瀲灩として月光を碎く。黑き島影、島の燈火、燈明臺、靜かな海、何れも日本でなければ見られぬ光景である。

右に九州の山、左に山陽の山を眺めて涼しい甲板の上に「雲耶山耶……」と吟ずる聲も聞える。

早や九時半とも覺しき頃、各組長は職員室に呼ばれたが、やがて酒を携へて歸つた。

賀は船中で觀月の宴をひらく都合で酒や鑵詰や菓子などを大連から用意して來たのだが、海上が暴れた爲め、黄海沖で壯快な宴を開く機會もなかつたが今夜は最終の日でもあるし、月もよしするので遂に宴はひらかれたのだ何と云つても窮屈な船室のことであるから、一堂の下に集ることも出來ず隅々で會が始まるやがて調子づいて至る所に高談放歌が湧くが如く起る。此騒は遂に午前零時過まで續いた。

八月八日 晴。船中

門司に着いてまた碇を下ろした。九州や防長あたりの人々は皆欣々然として船を下りた。長途の旅行を終へて歸省するのであるから其快はいかばかりであらう。今から思へば大連の臭い飯も旅順の險岨も奉天の泥濘も遼陽の酷暑も馬匹貨車の旅行も湧く如き興味を土産話に添へるのであるさうかうしてゐるうちに物を賣る小舟が急潮をものともせず船の周圍に集まつて來ると見るまに船頭は長い棹の先端に籠をつけて夏密柑や林檎を船客に賣りつける。下の關ではベストがあるとかで果物などは一切買ふなとの事であつたが滿洲で渴へ切つたものばかりだからオレンヂ色の艶々しい大きな密柑を見ては買はざるを得ないだらうし從つ

て密賣買は少からず行はれる。承知せぬものは只船員のみだ。それだから船員は早くから飯や粥の殘物を彼等のために準備して置く。初めの内さそ口の先で叱りつけてゐるが中々小舟が立ち退かぬので終には强硬手段に出でゝ、例の用意された物を彼等の上に打被せるのだ。此楠木流の策に會つて寄手はぱッと開くが、また懲りずに内々寄つて〳〵る。内應する買手は舷窓から手を出す、一種の奇觀である。又甲板には許されて赤間硯や博多織などを賣りに來て居る商人がある。小舟につんで來た荷物を上からひよい〳〵引上げると直ぐ店を並べる。船が出かけさうになると迎ひの小舟が來る。例の調子で網の先きに鈎のあるものに荷物を引かけて下ろす。下では小僧がそれを受取る。さて荷物が下りて了うと甲板上の商人は網を傳つて船の舷側を猿猴の如く下りてゆくのである。

午前十一時にもなつたらう。船は進行を始めた。碇泊中外國軍艦が二艘急速力で東上した。

關門海峽の最も狹い所は幅六町程しかない。北には檜山の砲臺が聳えて大砲がにらみ〳〵出てゐる。そこを出ると瀘の浦で既に油の如き瀨戸内海である。五分にして一景十分にして一景あゝ何うしても好いのは日本の山水である。

廣島灣の入口なる風光明媚の多島海を過ぎたのは既に夕陽の時分であつた。遠き山々は薄紫に烟つてゐる。

深綠色の海は絹織物のやうに細かな紋を美しうきらめかせてゐる。船の過ぎゆく後に驚き立つ高波に入日が水平に近くさして來ると、波の裏なる水泡は金綠色の無數の總を作る。暗綠色の波の底に折柄一匹の海月の漂ふのが、波を射拔く光線に照されて恰も小さき月の如く見えたが、瞬時に分らなくなつた。

今日の入日は實に壯觀である。金に笹綠とつた片々の雲間を洩れて、燦然たる一束の白光は彼方の海面に落ち、焯灼たる反射は『光』の生れ出づる聖地かとも思はるゝばかりに照り輝いてゐる。

やがて夕陽が雲間を出で明るい山際の空に懸ると、忽ち海面には燈坐のやうな一大光柱が泛ぶのだ。西の山は紫に烟つた。來し方の山々島々は早くも夕暮の色に蓋はれてゐる。

波は相變らず靜かで、只汽船に驚く高波のみが表に金を飾り頂に紫の泡をかぶり金綠色の裾を引いて、目も彩なる落日に向つて立つのである。五分ばかりにして海に浮んだ大光柱が稍うすらぐかと見れば、日は今將に山に歿せんとして、あたりの

醜い人の顏にも、舷側にも高いマストにも國旗にも壯嚴の光を投げてゐる。かくして一秒二秒五秒十秒二十秒……日は遂に山のあなたに入つて了つた。

見よ！何たる凄愴であらう、萬象の上には寂寥の色悲哀の色が蓋ふてゐるではないか。かなたの浦に漁舟が一艘歸りを急いでゐる。

あゝ何と云ふ靜かな晩であらう。

夕日が沈んでしばらくすると宮島の近くを過ぎた。それを過ぎると似島で船は檢疫をうけるために止つた。點々たる漁火が遠近に動く。似島から小蒸汽がやつて來て檢疫官が船に上る。檢疫とは何んなに嚴重にやるものかと思つてゐると、吾々學生は一列をなして檢疫官の振翳す提灯の下を通る際に、一寸顏を差出すばかりであつた。つまり顏色で健康を讀むのである。

それが終ると直ぐ運轉を始めて九時五十分なつかしい字品についた。對岸の燈火は閃々と水面に映じてゐる。大分欠けた月が薄靄の空に上つた。

八月九日　晴、上陸

四時半には早や起床してばた〳〵するものがあつたが、上陸は七時から許された。久しぶりで日本の土を踏んだ時には何とはなしにホッと息を吐いた。これで此旅

行も終つたので此地からは自由行動である。

東京まで歸る人々は宮島見物に行くとのことであつたが、自分は直に鄉里に向けて發した。

＊　＊　＊

今度の旅行は非常に急であつたから、別に得た所はなかつた。それで專門的の事は多くは「遼陽一覽」「遼陽案內」によつて、自分の憶斷は交へなかつたつもりである。是には唯國漢部の方から見たる事實を忠實に記したに過ぎない。

（完）

英語部

this, finally, the Prince agreed, moved to another shelter." After the lecture was over our Professor Sakurai made a response to the Major-General's explanations and declared that we would surely devote ourselves to realize the object which the Minister of War must have had in his mind to lay on our shoulders when he advised the students so earnestly to make the Manchurian Inspection and gave us such a convenient opportunity to do so. Finally, at the Professor's request, all of us sang our national anthem but we were so moved that we could not sing it in a high tone. After this great roars of "Banzai!" sounded through the range of the hills.

Looking at many traces of trenches, subterranean mines, abatis, and barbed wire fences round the hill, we can not indeed help sympathizing with our brave soldiers who had experienced indescribable difficulties in this desperate battle and finally succeeded in occupying this rampart in spite of the galling fires. Of all these memorial traces, the half damaged gate of Kin-chau castle most attracted our attention. They say a shell discharged from the Japanese part happened to fall upon the roof of the gate which was instantly half destroyed by the terrible explosion. I can well imagine what a pitiful scene it was after this decisive fight was over. Indeed, I can not help recalling a stanza as follows from "Blenheim."

"They say it was a shocking sight
After the field was won.
For many thousand bodies here.
Lay rotting in the sun;
But things like that, you know, must be
After a famous victory."

IV—THE FARE WELL MEETING.

Just a day before our leaving Tairen we were invited by the Tairen Branch of the "Tokyo Young Men Christian Association" to a farewell meeting. At the entrance of the room, we were kindly given a nice fan each, bearing the motto in Japanese," God is Love." Although the room was not richly decorated yet we were exceedingly gratified to receive such a welcome in such a place. First Mr. Yoshida made an opening speech in place of the Editor of the Lyoto Shimpo who could not be present on account of illness. Next, Mr. Masutomi delivered an interesting lecture on his charitable work—a work devoted to the relief of our unfortunate women in the city and this evoked the deepest sympathies of all the audience. Then sweet refreshment were served to the guests. The third, Mr. Bryan, American Missionary stood on the platform and made a speech in English. He said that to study the Bible is the beginning of all studies; therefore, if we study science, literature etc. without having studied the Bible it is quite useless. And he concluded the address with a few examples. The earnest speaker left the platform amid great applause. Finally Dr. Naka arose as the representative of the guests to express hearty thanks for our kind reception. He said, "As we hurriedly passed by various places in such a few days we could hardly find anything added to our stock of knowledge, to say nothing of the stories which we may bring to our country as souvenirs. But to night, being accorded a hearty reception and enjoying many interesting speeches we are very glad to say that we are now able to bring some mental souvenirs to our Empire."

I feel very sorry that we failed when the meeting was adjourned to raise "*banzai*" for the honour of the Association.

—) THE END (—

high spirit. A hand-to-hand fight ensued and at daybreak our regimental flags of the Rising Sun arose high above the heap of the enemy's dead. Well, our schoolmates, I can well imagine how the brave soldiers this time forgot the strain and exertion of the furious attack in the joy of victory and in shouting the deafening 'Banzai!' Greatly moved by the officer's lectures and standing still on the traces of this memorable fortress I was quite oblivious of all else and absorbed in deep meditation.

We can not indeed help sympathizing with General Nogi, famous Commander of the Invading Army. In the attack of the so-called impregnable fortress of 203 Metre Height, the general saw thousands of his beloved officers and men killed before his eyes. He was hardly pressed to accomplish as speedily as possible what was next to impossible. Attempt after attempt to the object failed. Any other general without this Generals' indormitable courage, iron will, and stubborn devotion to duty, might have despaired and given up the task as hopeless. General Nogi, however, did not flinch and finally succeeded.

After the lecture was over, we strolled round the top and happened to find some Russian skulls scattered here and there; pieces of human bones; fragments of exploded shells; some Japanese or Russian soldiers' caps stained with blood. I noticed Mr. Morita, our school-doctor, was carrying a perfect skull, wrapped up in a '*furoshiki*.' These signs of the battle and relics of the slain, indeed, reminded me of what Kipling says in his "Song of the English."

"We have fed our sea for a thousand years,
And she calls us still unfed,
Though there's never of wave of all her waves
But marks our English dead."

The monster of War had devoured our men almost without number, and still was not satisfied.

III.—NAN-SHAN.

Leaving Niu-chuang on the 30th we arrived at Ta-shi-kiao at eight in the morning, when a train for Mukden began to pull out from this station with a whistle, every compartment (horse car) being packed with the students from Kyoto and Osaka. The deafening cries of "*Banzai!*" arose from various trains. I heard some one shout, "Mr. Horse, hurrah!" At this witty '*banzai*' all of us burst into laughter.

It was in the twilight when our train safely reached Kin-Chau where some military officers were waiting for our arrival. Warmly received by them, we put up for the night at small barracks, temporarily set up near the station. Early in the morning of the next day, all of us left for Nan-shan which was so near the station that we could easily reach the top within fifteen minutes.

First we were surprised to see the wellknown mountain was much smaller than we had thought before. Getting soon to the top we heard the geographical explanations given by a Brigade-Ajutant, and then we enjoyed listening to a most interesting lecture concerning the hard-fought battle, delivered by the Brigade-Commander Isaki. "Before I conclude this lecture" said the Major General," there is one thing not to be left unsaid. Prince Fushimi, you know, who engaged in the attack showed his presence of mind even under the heavy fires. On that day, His Highness was taking lunch with his staff; just then, a shell fired from the enemy's part went screaming up in the sky with a horrible sound and dropped down, 100 metres in front of the party and exploded sending up clouds of the sand.

Thereupon one of the staff advised His Highness to move from the place as it was dangerous to take rest any longer. "No," replied the Prince smiling and said nothing more. But the staff insisted earnestly that the martial spirit of the whole army depended upon the safety of the Prince's person, and in

of America, Great lover of Peace and Humanity. Now, our Empire enjoys a bright world-wide fame. In the vast fields of Manchuria the peaceful wind is softly blowing and that gentle wind is flapping our flags of the Rising Sun which are waving everywhere in the southern part of Liotong Peninsula.

Last July, as soon as our school broke up for the Summer Vacation, we students of the Tokyo Higher Normal School undertook an educational tour to Manchuria for inspection of the new battle fields where many of our brave soldiers had willingly given up their lives for our august Emperor's sake. The S. S. Kotohira-Maru (3724 tons) with the voluntary faculties and students of our school on board left Ujina for Tairen at 3.5 p.m. punctually on the 15th of the month.

When the steamer was off Tsushima, I was enjoying the beauty of the maritime scenery, while my class-mate Yamamoto on the poop was deep in Goethe's "Die Leiden des Jungen Werther." At this moment, Major General Semba was standing behind my friend and eagerly looking at the book as if he wanted to know what it was, the officer asked suddenly in a gentle tone, "what book are you reading? Is it German?"

"Yes, sir" replied the student surprised by the unexpected voice.

"Oh, indeed," said the officer, "I can't help tracing back with sweet memories the days of my youth when I, too was hard at work studying that language. Are you learning French now?"

"No, we learn it as a voluntary lesson when we join the third year class in our department," was the reply. "Well, my, lad, devote yourself to study for our country's sake." So saying the smiling Major-General patted him lightly on the shoulder.

II.—PORT ARTHUR.

Of all my impressions on the various battle fields, the strongest is indeed that of Port Arthur. Ah, Port Arthur! What a great number of victims Japan paid for the crushing of this

hard nut! We arrived here on the 21st and immediately entered the Japanese Naval Hospital (Former Russian Naval Club) at Taiyango (New Street) where we were appointed to put up over two nights. No sooner had we got into the splendid building than we rushed to the lavatory in order to wash ourselves. This done, all of us, guided by a certain officer and privates started for 203 Metre Height which had been the hardest nut to crush for our Invading Army. Now, a new road to the well-known fortress is opened and some Chinese carriages having accommodation for over 4 persons may be hired to the foot of the Height for about 1 *yen*.

It was such an extremely sultry day, the thermometer standing at 130° that my shirt and coat all were moistened with perspiration. While we were climbing the Eminence panting we caught a sight of a private who was going just one *cho* ahead. I ran after to keep up with him and sharing with him some pills of "*Seishintan*" I enjoyed the conversation. He kindly told me interesting anecdotes about his departed friends on this battle field, and finally he said, "one month after this rampart was captured I climbed up the Height as a messager. But even then I felt a very disagreeable odour of blood on my way."

"Ah! What a pitiful scene!" I heaved a deep sigh.

On the top where the fortress was all destroyed the young sub-lieutenant delivered an interesting and touching lecture on the attack of 203 Metre Eminence. According to the officer, the last assault began at five in the morning as planned. Taking advantage of the fast gathering darkness our soldiers pressed on the rampart; but the sword-like hills, the irresistible machine-guns, the scattered bodies of the killed and wounded were serious impediments to their progress. Now, marching, now stopping, they came always closer to the rampart. Just then strains of our national anthem arose from the left wing of our army. All cheered and encouraged, they over-threw the enemy who now appeared to give way somewhat and sprang over the rampart in

body and seemed not a bit ashamed of exposing every part of his body in broad daylight. We are told and believed that any civilized nation tries to earn money in order to spend it for a better purpose, while the Chinese are gathering money only for the sake of itself. They are working the harder to procure money, hoping that the time will come when they can please their ears by jingling golden coins in chest-bexes. Look at their way of living. They take scanty food, clothe themselves poorly, live in muddy dwellings, dreaming only of heaping gold and silver for the future.

Punctuality:—One afternoon one soldier who happened to be my companion in the suburb of Tailien, told me that the coolies employed in our military work were praiseworthy for their punctuality. For instance, if our soldiers demanded the coolies to come six oclock next morning, they would appear just at the appointed time never later, and stay as long as they were required. And he added that this was the only point that we Japanese must learn from the Chinese.

Idleness:—One of the coolies employed in one of the Japanese barracks at Tailien, was to pour water into a pipe from which we took some for washing when our bothing was over. The water-tube was large enough to hold seven or eight baskets of water; hardly was the water gone, when we asked him to being fresh water, he would pour only one basket, never more than one, and then would watch over the decreasing of the water in a very idle attitude, and never brought another basket before the first was used up, unless we threatened him with a blow or two.

When we were walking along to see country life of the Chinese, we noticed another instance of their being idleness. A farmer made his horse grind his grain in his yard all day long in the sunshine, by going round a pole fixed in the centre of the mat, and by dragging a heavy piece of wood over the grain which was spreaded on the mat; while the owner of the horse was spending his day in smoking leisurely under the roof.

Commercial genius:—In spite of their having many weak points, they are gifted an excellent tallent as a commercial nation. Speaking nothing of a few exceptions, they are, as commercial people, very honest in the prices of dealing articles. Never gave any fancy price, especially in any large store. It seems to me that they are fairly resolved to win in a long run. They are in the habit of expecting to get the smallest interest at one article at one time, by means of reducing their way of living as simple as possible. Honesty and simple life, I should say, twain brothers and the only secret in success in business-world. Referring to this point, we Japanese are very much ashamed of having in some degree this imfamous remnant of being short-sighted and dishonest habit in commerce in former days.

(G. A.)

MY IMPRESSIONS ON THE MANCHURIAN TRIP.

By K. S.

I.—OUR VOYAGE.

Our country was engaged during last two years in a struggle so bitter and gigantic as almost to have no precedent in history and this—for the sole purpose of preserving last peace in the Far East and for the sake of humanity and justice. Our arms, both naval and military were everywhere crowned with the most brilliant series of victories. Behold! Providence is ever on the side of those who are fighting for right and peace.

Last September, the terrible struggle which had raged for more than one year and half was brought finally to an end through the good offices of the president of the United States

company with that dirty Chinese, formally asked in a hopeless way us to give him a seat, and went away in a very hurried manner neglecting the earnest declaration of the Chinese. A resentful passion seemed almost to over come him and he gave a thousands of curses upon the conductor, and gave up to take this train. He was forced to wait for the train next morning. It he should be one of well-to-do merchants, he might have lost a great sum of money, on account of missing the train. "Every man is born with equal rights" I have been told in the class-room and believed to be true in every case in every country. On the contrary, the present case shows just the opposite. Though he had the right of occupying one seat in a car he could not enjoy it, only because of the averse feeling existing between these two societies. Who knows when the time will come when the aversion shall vanished like foam upon waves, and every-body be really equal.

4.—MIKADO RACE'S EXPANSION.

As Mikado race has been scattered all over his home land, it has become necessary to seek shelter in some other place, and besides, the bitter experience of the struggle for existence drives, them farther and father. So the superfluous population of the nation is expelled to come across the yellow sea and settle down there on the bank of Lianho and its plain, so that, at present, we are able to traverse to a limited extent by Japanese cars, and Japanese language is going to popularize in that region.

This wonderful speed of expansion of the Mikado-race surprised the Europeans into crying "Yellow-peril, and anticipating us to be the enemies of humanity. But, in the course of time, the Mikado-race proved themselves by their actions, that they are not the enemies of humanity, but the warm friends of it, and the prejudice gathered in hearts of other nations is going to be dissipated.

5.—THE FORMER RESIDENSE OF LATE MAJOR-GENERAL KONDRACHENSKO.

In the old city of Port Arthur, a short distance in front of the

Military Exhibition Building, there stands by the road side a brick built poorly house. A few yards from the window on the south, is what is meant to be the garden, but no flowers are found there at present, save one or two young, akashiya-trees spreading their tender branches, casting very little shadow upon the stony ground. Even wild grasses are scarcely found there. No special gate, but only two poles are standing at the ends of a newly-erected fence on the north.

On morning, August 1906 a stranger was seen to enter and humbly ask;

"Is it the house in which late Russian Major-General Kondrachensko lived, who was killed in the explosion of North-Eastern Keikwanzan fortress?"

"Whom do you mean? I cannot understand you. This is the house in which our masters such and such non-commissioned officers are living now."

"The late Russian Major-General Kondrachensko lived here; one captain, the director of the Military Exhibition assured me a moment ago."

The soldier went in in confusion and a few moments later came back with the same expression and replied;

"The Non-commissioned officer, our master does not care who lived here before." The stranger could not help pitying them for their ignorance of the fact that they were living in such a glorious residence as this, and took leave with a long sigh.

Not only this Non-commissioned officer, but many people are in this world, that are spending their lives without being conscious of present blessing and happiness.

6.—CHINESE CHARACTER.

Another Jew—When we are crossing the Lianho, by 'Shangpans' Chinese boats of smallest class, we happened to notice that one boatsman was proud of a gold watch. So far so well. But to our surprise, he had no clothes around his sunburnt, healthy

noble (awful), and the dashing snowy foam looked so charming that I was strongly tempted to plunge into the white waves. Ah ! It was beautiful !

2.—DEGENERATION OF ONE'S MORALITY WHEN IN UNCIVILIZED COUNTRIES.

"When one lives in an uncivilized country," one of the famous educationalists in Siam imformed me, "he is obliged to waste nearly all his energy in guarding himself against the bad influence of his surroundings, leaving little energy for even a little improvement of himself." Upon landing Tailien I found a many of coolies walking near the harbour. They were scanty-clad, bare-footed, dirt itself, and after a few moments' looking at us, they bursted into a fit of ignorant laughter. I cannot help feeling ridiculous at them. As I proceded into the interior, the examples of such vulgar manners as I have described above, increased. Here some standing eating cucumber, there, some walking without shoes in the streets. Most of the coolies bind their queues on the top of their heads, and taking the coast off, they hanged them upon their shoulders to prevent pain caused by carrying a load upon their shoulders. All the doors of the shops are painted in dark blue tastelessly. The road when it is raining becomes a muddy channel. An inexpressibly bad odour, coming from the entrance of every house on either side, is so displeasing to refined people that no person of any foreign nation is seen in the streets in the broad day-light when every family is in a hurry preparing dinner. On the road side, there are arranged some boards on which refreshments or sweet meats peculiar to this country are placed in order, covered with a swarm of golden flies. Hungry as was I, yet no appetite aroused by looking at the articles of food prepared by Chineses. Of those whom I met on the streets, nine out of ten were of lower class-people. On the bank of the Liaohs I found a band of coolies having no clothes, even around their waists. My surprise at finding them in such a condition was beyond measure.

A moment later, astonishment changed into ridicule, and ridicule, into pity. How pitiable to see them standing with open mouth which seemed never to close. The consciousness of being among such uncivilized people as this makes one feel no more than contemptuous and feel that the moral restraint of the society is not very strong.

Suppose a man is thrown in a society where moral laws are hardly recognized, how would he behave? No doubt he would become a beast having two feet to stand and nothing more. Even these who are staying a short time, are inclined to seek excuses for their misdeeds. That's my experience newly I got in Manchuria. Therefore, to live in a lower society is greatly harmful to one's character. "Surroundings change one's spirit," goes a Chinese saying. My experience of staying a fort night in Manchuria furnishes me with a large number of living examples of this truth. It is advisable, I think, that he who is destined to spend his life in a uncivilized country, should pay strict attention to not letting his morals degenerate through the influences of his surroundings.

3.—AVERTION TOWARDS THE CHINESE.

The first bell was ringing through the building and I was hurrying to catch the train which was going to start for Mukuden from Port Arthur station one afternoon. Hardly had I reached the car, when a middle aged Chinese of the lower class violently pulled the handle of the door. In the very bottom of our hearts, we do not like the peculiar odour of the lower class Chineses, so we heartlessly rejected his earnest request by making the excuse that this car was full already; however he, finding there was one vacant seat, tried to get into it. Just at that moment a conductor came by and was going to pass. That Chinese seized him by the sleeves and declared his right to get admitted, showing his red-ticket.

The conductor, quickly perceiving our dislike of being in

地理歷史部

SOME IMPRESSIONS IN TRAVELLING THROUGH MANCHURIA.

1.—A BEAUTIFUL SIGHT AT THE BOW.

The curtain of night was drawn alearly on every side; a few piercing streaks of stars were cast upon the deck. The hours of night rolled on. All our companions were asleep in their cabins except the watchman. No noise was heard but that of smoke flowing from the funnel. In the dead of the night, the signal-bell in the bow strikes two, which is answered by the same number of strokes from another bell in the bridge, which tells us it is one o'clock in the morning. I alone stand at the very extremity of the bow, looking down upon the white foam dashing against the bow the harder, as the ship is making her course. While I am leaning over the rails of the bow watching that white foam, its colour turns now into light blue, now snowy white; now light, now dark; its sound now becomes louder now softer; now far, now near. Every pace of changing of the colour and sound keeps time with the beating of my heart. When I raise my eye after to see the stern I find the main mast projecting against dark cloud is, moving to and fro, making 15° of angle, keeping pace with some dismal noise coming from the riggings. When the ship pursued her course so far that the faint glare of the light house at Taishu was to be seen no longer, no human light was left on the surface of the sea, except the three lamps on the ship, which indicated her in the dark. The cool air was sweeping in my face. I was lost in meditating as to why we were able to sleep peacefully in this helpless vessel on this vast ocean, without anticipating danger. Thus indulging in thought, it is strange, that even the meaning-lass sounds of, the piston struck my ear as if they were something

旅行前記

旅行前記として、旅行の目的、隊の組織、日程、準備等を概説せん。

今回の南滿洲旅行は我地理歴史部といへども、地理旅行にもあらず、又歴史旅行にもあらず、文部省及び陸軍省の斡旋により、新たに我勢力範圍となりし新戰場を見、幾多の同胞勇士の奮鬪の狀を追想し、且つ新殖民地に於ける我經營の一般を通覽せんとするにあり、滿洲は其南方の一部分及び松花江流域の小區域を除くの外は未だ全く世人の理會する所とならず、日清戰爭後漸く世界人士の注意する所となり降つて明治三十三年北清事件に乘じて事實上露國の占有する所となりでより は俄かに注意の燒點となり遂に日露戰爭を釀さしめぬ、而して是に最大の關係を有するものは清國は言はずもがな、露國と我日本となり、

然るに我國に於ける眞の滿洲研究は甚だ幼稚にして露が第十七世紀より着々其調査に從事したるに比すれば寧ろ其甚だしく緩慢なるに驚かざるを得ず、這般の消息は日露戰爭前に於て我國語にて著述されたる滿洲の說明書は唯參謀本部の支那地誌中に一冊をなせるありしのみにても知らるべし是とても露語よりの飜譯らし)

思ふに事の措置計畫は其事物の研究の詳細、正確なる丈け錯誤少なきが如し、國力發展上否國家維持上大關係を有する滿洲に關する調査はかく閑却せられ得べき者なるか、是維新以來我國家の根本確定に其多くの精力を費せしによるといへども一度は朝鮮のために清國と戰ひし者、次に來るべきは滿洲ならずして何地なるべき、而も其後十年間に未だ一の根本的研究の結果を聞くを得ざりしは誰の罪ぞや、十年の短日月に成るものにあらずといふなかれ、十年一昔の諺あり、

固より今回の旅行は南滿洲の而も鐵道に沿へる主要地の通覽に過ぎずされど此旅行に於て少なくとも前後三千五百名は滿洲の幾分を解し得べく隨つて興味を以て是に關する記事を迎ふるに至るべし、新戰場を親しく踏むは素より國民教育に多大の意味を與ふる者なれども、是よりさき、先づ是を機として眞正の滿洲研究者、着實なる殖民指導者の現はれんことを希望せざるを得ず、

我校に於ては此旅行に加はる者は職員生徒約二百名とし本科三年全部及本科二年地理歷史部博物部の全生徒は病氣其他の事故による者の外旅行を命じ他は前記以外の各學級より志望者を募り、是に小數の附屬中學生を加へて總數百十人なりき、全部を二團に分ち、第一團には那珂教授、第二團には櫻井教授是が監督となり

更に各團を數組に分てり、今地理歷史部に關係ある職員生徒の姓名を列記すれば左の如し、

職員

教授　那珂通世
講師　大日方順三
教諭　齋藤斐章
同　大關久五郎
訓導　北垣恭次郎
助手　久保澤寛

生徒

研究科　矢作德三郎　赤澤竹二郎

本科三年　池上庄治郎　井上一
井上嘉三郎　近森幸衛

大谷德馬　吉野益見
津谷松藏　中村福太郎
佐々磨瑛四　山岸貫治
福原惣三　目良德三
三國谷三四郎　森下國松
須甲理喜

本科二年

井上庄三　長崎惣一
栗原助作　若林壬一
松澤昇　近藤廉三
淺田重敎　有高巖
阿部榮之助　山崎進
酒井藤十　佐藤惠
安達懋　下田禮佐
樋口利一　鈴木克己

本科一年

池田京治　岡井秋治
吉田保　武田靜次
南部愼太郎　增田綱夫
小畑富記　小和口忍
蘆部元一郎　嶺錬二郎

日程、東京出發の前、日程を定め大連旅順より北は開原までを豫定し、其間の滯在日數などをも明示し且つ韓國旅行希望者のために別に其方面の豫定までも添えたりしが、大連に達するや、陸軍運輸部より各隊發着の日時等を示され、茲に豫定は全く用ゐる能はざるに至り、且つ大連に前後一週間の淹留を餘儀なくせられ、希望なりし蓋平、海城、新民屯、開原は全く見る能はざるの不幸を來せり、又韓國旅行者は奉天にて本隊と別れ、安奉鐵道を取らんとせしが、此命令によれば大連を出でゝ、大連に歸り來るを本憾とせるが故に、大連より再び韓國に至るの煩を避け全く此行を捨てたり、今此日誌を見る人の便を圖り、左に日程を掲ぐ、

七月十三日　東京發　汽車

七月十四日　汽車中
同　十五日　宇品着、琴平丸乘船、出帆
同　十六日　門司寄港、出帆
同　十七日　海上
同　十八日　大連着、上陸
同　十九日　大連滯在
同　二十日　同
同　廿一日　大連發汽車旅順着
同　廿二日　旅順滯在
同　廿三日　旅順發汽車
同　廿四日　奉天着
同　廿五日　奉天滯在
同　廿六日　奉天發汽車鐵嶺着
同　廿七日　鐵嶺發汽車
同　廿八日　遼陽着

同　廿九日　遼陽發汽車牛家屯(營口)着
同　三十日　牛家屯(營口)發汽車金州着
同　卅一日　金州發徒步柳樹屯着
八月一日　柳樹屯發徒步金州汽車大連着
同　二日　大連滯在
同　三日　同
同　四日　同
同　五日　琴平丸乘船大連發
同　六日　海上
同　七日　海上
同　八日　宇品着
同　九日　宇品上陸、解散

準備、人の住まるゝ所ならずなど言ふ凱旋軍人の話を聞きて、旅行中の心得などにも頗る注意したり「希望の者には健康診斷の求めに應ず」との醫局の掲示を見て六尺の大男が直ちに醫局に至り健康診斷をも求め、醫員に大丈夫ですと、笑はれしも

强ち小膽者と言ふべからず、中には止められしに知らぬ顔で加はりし豪傑もあり、旅行確定の日より出發迄は僅かに十日に足らざりしかば諸方面の準備に忙殺せらる、普通旅行としての諸種の準備の外に蚊帳、水筒等の眼慣れぬ者まで準備せり、地圖は精確なるものの出版せられたるなく博愛館の日露戰要地圖、富山房の紀念地圖等あれども旅行には何等の効なし、唯戰爭當時に出版せられたる博文館、育英舍等の戰爭實記の附圖を集むるのみ、されど是とても誤謬多く、地形などは全く現はれ居らず、市街圖としては遼東兵站監部編纂の滿洲要覽の附圖を用ゐ、地質圖には地學雜誌第二百八號の附圖を携へたり其他海圖には瀨戸內海、九州全岸、朝鮮全岸、遼東半島、旅順口等の假用海圖を求めぬ、

尙茲に一の紹介すべきは今回用ゐし背嚢なり、ルックサックと稱する歐洲にてアルプ山登りなどに用ゐるもの、山崎先生の注意により、全生徒是を用ゐて非常の便利を得たり、從來我國各學校及び軍隊等に用ゐる背嚢は、其形小なりといふ能はざる雖も四邊固定し、伸縮自在ならざるが故に、容量頗る少なかりしが今回用ゐしものはズック製の嚢なるを以て容量頗る大、毛布下衣其他の旅行用具を入れて尙餘裕あり、旅行用としては頗る便なるものなり、(卷頭寫眞參照)

驛驛家と稱する人の注意により遽避眼鏡を購ひし人ありしが旅行當時は所謂滿洲の雨期、得意然たりし眼鏡も面目を施すに由なし是も紀念の一なればとて記しぬ、

七月十三日

午前六時汽車は新橋停車場を發す、朝暾今や品海の灣頭に映じて東京灣內浪靜かなり、品川、大森の邊汽車は右に丘陵を扣へ、左は冲積平野を距てゝ東京灣を望める低地を進む、川崎附近鐵道の著しく海岸を離れたるは是即ち多摩川三角洲の發達せる爲なり、多摩川は實に關東平野の南部を貫ける者にして水量常に多し、由來東京灣は比較的水淺きがために三角洲の發達頗る早し、多摩川江戸川は其最も著しき者なり、神奈川にて横濱線と分れ、平沼程ヶ谷より藤澤に至る、此間汽車は丘陵の間を走る、此丘陵は武藏相模の境界を作る者か、

汽車は相模に入れり、藤澤以西國府津の間或は海岸に出で、或は丘陵の間を走り、或は海岸と丘陵地との境を進む、海岸には砂丘斷續せり、相模灣岸は避寒避暑地とし

て已に名高し、これ其氣温が、事實目的に副ふものなりと雖も、其東北關東平野に立てる人口二百萬の東京市あることは大に注意を要すべきことなり、東京人士が保養地として附近に有する者の内比較的近距離にあり、且つ交通至便にして、氣候靜温其風景亦愛すべきが故に、一日の閑あらば乃ち喜んで鎌倉、江の島、茅ヶ崎、大磯に向ふ者、素より故なしとせず、汽車は大磯より丘陵上を走り國府津より海岸を離れ、酒匂川の谿谷を西北に進む、山北までは兩岸僅かに開けて、所々田畑ありと雖も、山北と次驛小山との間は全く上流的性質を示し、兩岸高き絶壁をなし、毫も平地を有せず、而も水流急にして所々に蹲踞せる岩塊に衝突し、青潭白湍交々至る、汽車は數條の鐵橋によりて或は左に、或は右に、山に當りては是を開穿し所謂箱根隧道をなす、かくて汽車は巧に此山險を走り小山に至る、川は尙鐵道の右にあり、小山驛の西一里余にして酒匂川上流を距てて對岸に富士製紙會社の工場あり、我國に於ける製紙會社として最大なるもの、實に歐洲工場を見るの感ありといふ、小山が近年其進歩著しきは實に此會社あるがためなり、或人曰へり富士製紙會社をして從來通りの進歩繁榮をなさしめば此山間の僻地に於て一大工業市を作すに至るべしと、汽車は國府津より緩勾配にて上り來りし者未た頂點に達せず、酒匂川の谷を離れ

て西南下御殿場に達す、

相模國の中央に大山(一二五一米)あり、西方丹澤山(一五五〇米)塔ヶ岳(一四八七米)と共に丹澤山塊をなす。この山塊の西方に酒匂川を距てゝ箱根火山あり、維新前迄交通極て頻繁なりし東海道は江戸より相模海岸を經てこの箱根火山を横斷したれば、其東西兩麓に止宿場、休息驛として相模に小田原、伊豆に三島を發達せしめき、鐵道は箱根火山の險を横斷すべからず、よつて國府津より北に大迂回をなし、箱根火山の北麓、酒匂川の谷に沿ひて西し、更に南下して三島の北に至り東海道と合す、御殿場以南は富岳を見るに最も便なるも、此日は密雲堅く鎖して其雄姿見るに由なし、

汽車は沼津に着けり、沼津は江之浦灣に臨み、狩野川河口の沿岸にあり、一體に東海道海岸は寒暑の差の最も少なき所なるが中にも沼津は其最たる者にして一年中の最高最低の差僅かに攝氏の二十度八を現はすのみ、されば東宮殿下の御用邸を初め其他避寒避暑のための別莊多し、汽車は海岸を傳ひて西に走る右は愛鷹山(一一八七米)あり、左は駿河灣にして、是を距てゝ淡く伊豆の諸山を望むこと恰も品川附近にありて總房の山を眺むるに似たり、富士山の直南鈴川驛より富士川の平野

に入り、やがて富士川を渡る其源は甲斐にあり、甲府を中心とせる甲府盆地の水を集めて南するが故に其上流は數條よりなり、(即ち笛吹川、須玉川、荒川、釜無川等何れを本流とも分ち難し、甲斐歐澤を經て、身延山の東を流れ、駿河に入りて駿河灣に注ぐ、最上川(羽前)球磨川(肥後)と共に日本三急流と稱せらる、其川の長大なるに比して富河成平原は比較的に狹し、西行して蒲原に至れば已に丘陵性となり、而も其近く海岸に迫り來るが故に、勢ひ鐵道亦海岸を走らざるべからず、此邊は彼の清見潟と稱せらるゝ所、勝地三保松原も鐵道の左側前方に暫しの間其遠景を現はせり、既にして汽車は靜岡に着けり、

靜岡は安倍川の左岸にあり、人口五萬に近く、東京名古屋間最盛の都府なり、後ろは、低き丘陵により西は安倍川により、其平野の中心に位す、德川家康將軍職を秀忠に讓りて靜岡に退院し、德川幕府創建に就て靜かに畫策せしや、俄に靜岡は政治の中心地となりき、大阪陣作戰計畫、幕府創立の案多く此地になり、遂に家康の終焉地となれり、是實に靜岡の繁榮を來さしめし一大原因たりし也、安倍川は其流れ甚だ長大なちずと雖も、富士川のそれの如く急流ならず、是を渡る時少許の上流に東海道の橋梁を見るべし、以西藤枝に至る間、國道は丸子岡部等を經て稍海岸を遠ざかる

さかる其間に宇津ノ谷峠あり、されど鐵道は安倍川を渡りて著しく海岸に迫り、丘陵と海濱との接續點を西走す、而して其の丘陵遂に海濱に絶壁をなして終る所は小隧道を穿つ、是を過ぐれば即ち燒津驛なり、日本武尊の事を以て有名なる所(異說もあれど)、田圃遠く開けて西北方遂に丘陵に終る、國道は宇津ノ谷峠を越えて直ちに此小平野に出で藤枝驛に達す、以下殆んど國道と相伴ふ、燒津の西南には御前崎あり、汽車は是を迂回せずして、稍内地に入り、島田に至り、大井川の大鐵橋となる、

曩きに箱根火山に於て其兩麓に休息場として小田原三島の發達せるを述べたり、大井川はかの東海道に於て箱根と共に行路の大障害たりしなり、されば其東岸の島田と西岸の金谷とは彼の小田原三島と同意味に於ける發達をなせし者たるや論なし、大井川の下半は駿河遠江の境をなし(其上流は田代川と稱し、全く駿河國にあり)下流に於ては川幅頗る廣く、其鐵橋の長さ千十米に及び現時日本有數の長橋たり、されど平常は其水極めて少なく全河床に水の滿つる事なく、河中數個の洲を作りて分流す、河床と平地とは其高さ殆んど相等しければ兩岸共に、防水堤を築きて、其汎濫を防ぐ、水勢稍急なるが如し、川を渡りて汽車は緩勾配をなして昇ると一里内外にして金谷停車場に至る、金谷驛は停車場の東、鐵道の右側にあり、大井川の

平野より急に西方山地となる所にありて町は頗先上りに遂に西端停車場に終る、恰も伊香保町の如し、汽車は停車場を發すれば直ちに金谷大隧道に入る、國道は此隧道上を左右に蛇行す、俊基の東下りに有名なる菊川とかの佐夜の中山とは即ち此國道に沿ひてありといふ、

汽車は遠江の Young Plain (Old Plain に對して) に出てゝ袋井中泉を經て天龍川に至る、大井川よりも水量多し、濱松を經て濱名湖口を渡る永正七年津浪のために今切をなし、外洋と通ず、其最狹きは約百五十間、東西より迫り來る、砂洲上、東に舞坂あり、西に新居町、濱名村あり、鐵道は此最狹部の內部を通じ、小島辨天島を利用し、鐵橋の長さ約一里に及ぶ、其風景絕佳、東海道鐵道線路に沿へる地の最とすべし辨天島は海水浴場を設け、夏季特に停車場を開く、濱名湖の西岸鷲津驛を過ぐれば汽車は緩勾配に上り初めて遠江、三河の國境を越え、渥美半島の頭部とも稱すべき臺地となる、此中央に二川驛あり、此臺地は東部を天白原といひ、西部を高師原といふ、而して此臺地の西に終る所は即ち豐川の流域よりなれる豐橋平野なりとす、

豐橋は人口約二萬七千古吉田と稱せらる、豐川を下りて渥美灣へは僅かに一里、近時伊勢山田との間に汽船の航海開かれたれば、東方より來る者にして其目的單

に參宮にあるものは多く此地より汽船を取る、日清戰爭の當時佐野少佐に率ゐられ「中にも拾八聯隊は」と謳はれたる名譽なる聯隊の衞戍地たり、納豆、煙花、煙草を其名產とす、東海道は是より西北に向ひ御油、赤坂等を經て岡崎に直進すれども、鐵道は此山地を避けて豐橋より西に渥美灣の北岸を走せ、蒲郡を經、彼の丘陵の低平部を求めて北に直進し岡崎に至る、

岡崎は矢作川平野の中央にあり、家康の出生地として名あり、現時學校官衙等は豐橋よりも此地に多けれども町勢稍傾きつゝあるが如し、岡崎を中心とせる矢作川の平野は其廣袤豐橋平野に倍蓰し、三河に於ける最生產的地方なれども岡崎は豐橋よりは海陸交通の便少なく、矢作川を下つて海に出でんとせば約五里を算すべく、陸上には東海道筋の貫く外僅かに東北足助に通ずるあるのみ、豐橋が豐川を遡りて長篠に達する豐川鐵道を有し、且つ伊那街道、田原街道をも有するに比すれば頗る寂莫の感なくんばあらず、是即ち岡崎が地方的中心たり得ざる地にあるを證し、近時の頽勢亦如何ともしがたきが如し、

岡崎の次驛安城に着きし頃、日は漸く暮れんとす、暫くにして全く濃尾平野の東南端に入り、熱田を過ぎて、午後七時二十分名古屋に達し停車二十餘分、名古屋は濃尾平

野の首腦にして人口三十萬、三府に亞ぐ、新橋を距ること二百三十三哩、梅田を去る百二十哩なれば、大阪の影響を蒙ること東京の夫れよりも大なること素よりなりとす、物貨、言語等頗る大阪風なり、陸路、鐵道等集中するもの頗る多く實に四通八達の要衝にあり、特に海港としては南に熱田を扣へ近年是に築港工事を施して將に成らんとせり近傍は綿織物業、陶器業盛にして名古屋は其取引の中心たり、而して其の成立も發達も共に自立的にして、位置頗る良好なれば其將來の發達も亦頗る健全なるべく、近き將來に於て其戸口の數等も京都を凌駕すること疑を容れず、尾張名古屋は城で持つといへるは即ち昔時其伏在せる生産力の未だ全く利用せられざりし時の事に屬す、

名古屋を發してより、我國有數の平原人口密度大なる富祐地を横ぎりて岐阜に向ふ四面暗憺、見ゆる者は闇に點々たる燈火のみ、幾もなくして岐阜を過ぎ濃尾平原の兩端なる大垣に入る時に午後九時四十分、午後十一時發の豫定なれば乃ち停車場を出でて三々五々町内を散歩せしも、時既に遲ければ其概況をも知る能はず、汽車は十一時に發せり、

七月十四日朝五時うたゝ寢の夢より覺むれば微雨蕭々身は京都停車場にあり、既

にして發す、美術市京都を後にし、山城盆地の中央を西南下し山崎に至る、沿道の茶園頗る見事なり、山崎附近にては山城攝津の境をなせる丘陵左右に迫り來る右は即ち天王山にして左は茨城山脈の餘波なり國道は鐵道の左に並びて走る、以下汽車は下り勾配となり、攝河平野の北部を走り大阪に向ふ、吹田にての朝日ビール會社見ゆ、坦々たる平野を横ぎり淀川の分流神崎川、中津川を渡りて大阪市の北端梅田停車場に着す、大阪は所謂上方氣風の最もよく見らるゝ所にして古來商業を以て發達し來りしが、維新以來外國との交通貿易隆盛となるに及びて大に繁榮し、近年其接續町村を市に編入するに及びて人口百二萬となれり、我國第一の商業市、工業市と稱すべし、大阪灣に臨み安治川、木津川に跨り、淀川平野の一隅を占め地方的中心たるのみならず我が國の殆んど中央に位せり、即ち東經百三十五度の中央子午線は此市の西僅かに半度にあり、殊に近時清韓方面に我勢力の及ぶに至りては其位置上常に大阪は其經營の策源地となる、東京の日本郵船會社と相對せる大阪商船會社は其内國航路に於て彼が東北方面に據るに對して此は西南海面に據り且つ彼が濠歐に航路を有するに反して此は主として清韓方面を占むるが如しされば將來東洋方面に於て我國が大に活動する時とならば大阪は益々其榮を逞し

くするならむ。

大阪を發して西に平野の間我國有名なる釀酒地を過ぎる、武庫川附近の平地は全く御影石の崩壞せるものより成り、所々二米内外の土塊あり、武庫川の河床は左右の田地よりも高く、堅固なる堤防を有す、此土塊は武庫川氾濫せし後、土砂を取り除きて一所に堆積せし人工のものならん、西宮停車場以西は赤赭色の御影石の山脈海岸に迫り來りて僅少の海岸平地を殘すのみ、是れ即ち六甲山塊にして六甲山は西宮停車場より見らる、我國第一の輸入港なる(貿易全額は略ほ横濱に等しけれど、横濱は輸出額大に、神戸は輸入額大なり)神戸港も、かゝる地形の間にあり、神戸は今より四十年前迄は實に寂莫たる一小漁村なりき、其著しき古史は平清盛が治承四年六月に行ひし福原遷都なりとす、其經營は今の夢野(市の西北、山麓)より福原町(遊廓)を經て兵庫の海岸に及びし者鳴長明の方丈記に、

「所のあり樣を見るに、此地ほど狹くて修理をわるに足らず、北は山に傍ひて高く南は海に近くて下れり、波の音常にかまびすしくて汐風殊に烈しく云々

といへり、後京都に復し、間もなく平家亡びてよりは復元の漁村となれり、楠正成の戰死は延元元年也、後漸次發達せしは、兵庫にして、織豐の時代より德川時代には自

然開西地方海運の中心となり、今より四十餘年前神戸を開港場とするに及びて急に發達して現時に及び横濱と併稱せらるゝ良港となれり、現時尚ほ歴史的發達の名殘を留め汽船は多く神戸に、帆船は多く兵庫港に繫留す、

神戸驛にて山陽鐵道に乘り換ふ、雨全く霽れたり官設よりは遙かに乘心地よく、速力も大なり、暫くにして須磨の海岸に出づ、鐵拐岳近く海岸に逼り來りて右は直ちに山、左は黄砂(白砂にあらず)靑松の海濱となり明石海峽を距てて淡路島を望む、かゝる佳景は西舞子に及びて絶ゆ、「アレ明石城が」と云ふ間もなく西へ西へと進み去り、加古川平原に入り點々散在せる村落の間を過ぎて加古川を渡る、是より姫路との間は左右二三百米の中山性山あり、汽車は此間を流るる洗川の谷に沿ひて西北すると少許市川の流域に入る、川を渡れは即ち姫路市なり、時に午後〇時二十分。姫路に於ける停車は二時間餘なりされば一同相携へて市内を散策す、停車場を出でて北に向ひて大道を進まば白鷺城の外壕に達すべく、練兵場を距てて其天主閣を望むべし、即ち姫路市は白鷺城を中心として其周圍に發達せるもの、唯西北方面に人家少なきが如し、人口は約三萬四千、街區は比較的整然たりと雖も商況餘り活潑ならず、家屋建築亦甚だ大ならず、僅かに郵便局が一頭地を抜けるを見るのみ、さ

れど尙播磨の中心地といふべく、山陽鐵道も神戸より此地までは複線なり、尙姫路の海港ともいふべき南方飾磨より北、生野を經て和田山に終る山陽鐵道の播但線ありて交通稍便なり、

午後二時四十五分姫路を發す、山脚の海岸平地の上を西に走りて揖保川を渡る、花崗岩よりなれる中國の山、其粉末を以て河床を作り清冽なる水を流す中國の川、其景色の趣全く東海道と異なり、鐵道は甚だしく海岸を離れ、丘陵の間を縫ひ、舟坂峠(播磨備前の界)を越えて尙西走して東大川の平原に入り、尙西南下し、西大川を渡りて此等平原の中心なる岡山市に着く時に午後六時、

停車場は市の西端にあり、亦停車の時間長ければ皆降りて市內に向ふ、岡山市は西大川(旭川ともいふ)に跨れる中國に於ける屈指の都會なり、人口約八萬餘、市の大部分は旭川の西にあり、南北に長し、孤兒院、後樂園等を以て特に名あり、余等一行乃ち堤を決したる河水の如く後樂園に向ふ、停車場より師範學校縣廳を右に見て、さきに汽車にて渡りし旭川に架せる鶴見橋を越ゆ、越ゆれば直ちに後樂園なり、中に物產陳列場あれど時晩ければ入るべからず、日本三公園の一と稱せらるゝ後樂園美は即ち美なりといへども規模狹小にして變化に乏しく未だ以て天下の美と稱

するに足らず、是も亦「來て見れば」の類かと慨む者多し岡山は中國東部の中心として廣島と相對するもの、其商業活潑に、又附近の平地も比較的廣く、海陸の交通至便なり、散步中日は已に暮れぬ、

午後八時岡山を發して又西に向ふ、夜色轉た愴然たり、車中の談笑も何時しか靜まりて半覺半睡、滊車は空しく闇黑の裡、睡夢の人を載せて只西に走るのみ

七月十五日

賈子の「麥酒正宗云々」と呼ぶ聲に醒まされ見れば瓦斯燈の光も淋びしく「いとさき」と記されぬ、時に午後二時十五分、港と覺ぼしき所、赤き青き燈火の點々たるを見るのみ

午前五時海田市にて全く眠覺めぬ、幾もなくして廣島に着き直ちに宇品支線に入る、太田川の分流猿猴川を渡り、比治山の東田圃の間を南に走る、右には師範學校及び遠く高等師範見ゆ、由來廣島は岡山と其發達を競へり、今や最近の二大戰爭によりて廣島は大發達をなし、人口も十三萬に及びて遠く岡山の右に出でたりと雖も、當年岡山に醫學專門學校設立せらるゝに及び廣島は當時設置の議ありし高等師範を得んとし、或は土地を獻じ、或は激烈に運動し遂に其目的を達せし者即ち是な

り汽車は右に水溜を見左に丹那村との間海水を扣へ、堤防上を走り午前六時十分宇品停車場に着す(宇品及其附近の記事は凡て海上の部にあり)。

七月十五日　晴

宇品出港門司に向ふ

午前六時十分宇品停車場に到着し、一旅店について朝食をすませ、暫時休息の後、八時三十分宇品碇泊場司令部前に集合して、その指揮に從ひて乘船をはじむ、埠頭には軍用棧橋の設あれどその規模大ならず、たゞ僅に小蒸汽を着くべきのみ、本船は皆埠頭を去る彼方に投錨し、昇降は一に小蒸汽、艀舟による、我等一行も亦、棧橋東方の埠頭より艀舟に分乘し、小蒸汽に曳かれて乘船琴平丸に向ひ、行くこと約三分にして船側に達し乘り移る、

琴平丸は總噸數三千七百二十三、長さ六十一間四尺、巾七間三尺、屹水十呎六吋、速力十四哩あり、千八百八十七年英國グラスゴーに於て建造せられ、ロンドンマルセイユ間の定期航海に用ひられたりしが、後我國にて買入れたるものなりと云ふ、日露戰役の初めには兵士の輸送に使用せられ後病院船となり、今は陸軍の御用船とし

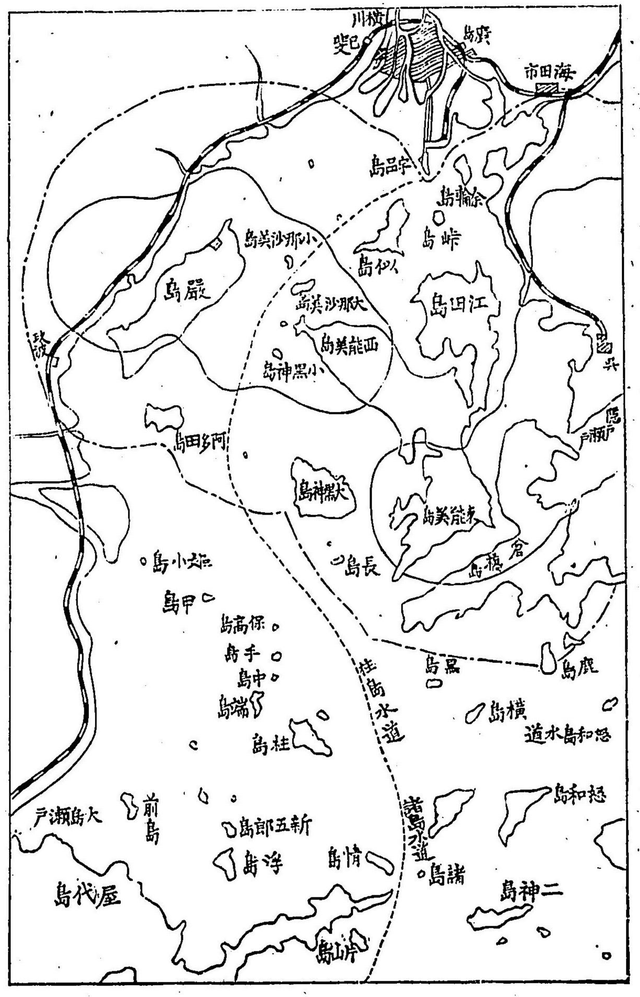
て、專ら宇品大連間の航海に用ゐらる、船に上りて先づ船室に入り、携帶物を整理し終るや直ちに甲板に出づ、

近く西に在りて老松全島に茂り、綠滴らんばかりなるは、三百年前石川丈山が「風月無邊塵外境晚來江上喚舟還」と吟じたりし宇品島にして、屏風の如く立てり、之と相對して東南やゝ隔たり、花崗岩の山骨處々露出して、白く日光に輝けるは即金輪島なり、宇品港の碇泊所は實にこの兩島の相挾める海峽を以てす、

宇品島の脊後より、港内を窺はんとするが如くにその頂をあらはせるは、檢疫所ある似島なり、それより左方に峠島といへる小島あり、その背後稍遠く、一帶に相連りて見ゆるは、兵學校所在地たる江田島なり、

東方は海水深く灣入して海田灣をなし、その奥に海田市あり、金輪島の背後は、即安藝郡の地にして一小半島西に出で、金輪島と相迫りて一海峽をなす、これ即海田灣の南に開くところなり、

北は即宇品市街にして、棧橋あり、築堤あり、萬般の設備こゝに存す、その後は平地直ちに廣島市に連り、更にそのうしろには、遠く中國地方の特色を示せる中山性の花崗岩山の起伏せるを望む、



抑宇品港は今日に於ては廣島の海口として、頗る重要なる地位を占め、廣島繁榮の最大要素たれども、これ日清戰役以後のことにして、その以前に在りては、殆ど世人の注意に上ることなく、廣島市民すら未だその價値をみとめざりき、然るに日清戰役に於て、軍事活動の發動點となりてより、俄に發達して一大要地となり、後北清事件及び日露戰役に當り、益その價値を發揮し、今日に至れり、而してかくの如く日清戰役より、俄に重要の地となり、廣島をして一大發達をなさしめし所以のものは、實に當時既に築港の完成したりしが爲めなり、明治二十二年に成り、故に吾人は茲に築港の始末を一言せざるべからず、

抑築港未成らざりし時に於ては、この邊一帶は太田川下流生砂の堆積せる地にして、海邊白砂數里、蘆萩の繁茂せし地なりき、當時太田川は廣島水運の生命なりしが、年々流送し來れる土砂の爲めに、河床は愈淺くなりて、舟行頗る難く、大船は宇品島につなぎ、解舟を以て僅に市中に通ずるにすぎず、其不便甚しく、人は漸くその下流に築港するの必要を感せしも事もとより容易ならざれば、何人も手を下すものなかりき、然るに明治十三年、千田貞曉氏來りてこの地に縣令たるや、遂に築港の議を決し、廣島南方の陸地より、堤防を築きて宇品島に接續し、以て太田川の流送する土

砂を防ぎ、宇品金輪兩島の間を以て碇泊所となし、築堤の東、二保島村との間を埋め立てゝ、市街地を開き、又築堤に沿ふて大道を廣島市街に通じ、以て海陸の交通を接續せんとする案を立て、其筋の許可を得て、明治十七年九月五日八萬餘圓の豫算を以て工事に着手せしが、功未成らずして、災厄しきりに至り、堤防は屢々破壞せられて、潮水の汎濫するところとなり、事豫期と違ひ經費しきりに嵩みて、三十餘萬に至り、非難の聲交起これり然れども千田氏は之に屈せず、勇を鼓して之に當り、遂に二十二年十一月に至りて全く落成し、安全なる碇泊地と共に、四萬五千坪の市街地と、五十餘萬坪の開墾畑地とを得、こゝに宇品の築港は成り、廣島は完全なる海口を有するに至れり、

されどこの後に於ても猶災厄屢至り、ことに三十三年八月、北清事件の際に於ける大海嘯の如きは、その大なるものにして、市街地の堤防は破られ、國泰寺新開堤防も亦破壞せられ、新開地は一面の海となり、廣島宇品間の交通は全く遮斷され、鐵道は水底に沒し、陸軍用地は孤島の觀をなし、困難を極めたり、されどこの事ありてより、更に海を埋め、地盤を高くし、大に設備の完全を計りしかば、宇品は更に一新面目を呈するに至れり

かくの如くして成れる宇品町の地は、恰長方形の小半島の如く廣島の南に突出し、北を除く外、西は、太田川の一分派なる京橋川口の左岸より宇品島に至る一大築堤により、東は、即大河通の築堤により、又南は宇品港の埠頭により、三面直ちに海に接す、市街は兩端埠頭に沿ひて發達し、海岸通北通の二大街東西に通ず、共に一丁目より五丁目至る、五丁目以東は陸軍用地にして、殆埠頭全長の半を占め、種々の倉庫官署あり、廣島より來る鐵路は、東方大河通に沿ひて來り、陸軍用地の西端に至る、北通及び陸軍用地の北に東西に長き一池あり、埋立以前の光景をしのばしむ、廣島に通する大道は大築堤の東約二町を隔てゝ北に走る、之を御幸通と云ひ、一丁目より十七丁目に至り、それより京橋川を渡りて廣島に入る、三丁目以下左右は新開田畑なれども、道路に沿ひては人家櫛比せり、

想ふに、廣島が僅かに十數年間に、著しき發達をなせし原因は、主として過去の三大戰にあたりて、軍事行動の發動點たりしに在り、而してこの好地位を占有するを得たるは、實に宇品港ありしが爲めなり、もし宇品港にして存するなかりせば、たとへ地形は小大坂の觀ある形勝の地に在り、且數百年の歷史を有すとは云へ、廣島の今日は到底得べからざりしなり、而して將來に於ても我國是の海上發展、清韓經營に

存する以上、宇品と廣島と相待て、益その價値を發揮し、愈榮ゆべし、或は、大坂築港完成の日は即この地衰微の時なり、故に宜しく工業を興し、商業を盛にし、以て之を救はざるべからずと云ふものあり、されど軍事行動の如き秘密を要すること多きものは、大坂の如き地を以て、發動點となす能はざる理由なきにあらず、さればこの點に於ても、その價値を減ずることなかるべし、たゞこの地永久の大計としては、論者の如く、經濟的に發達せしめんとするは、もとより至當のことにして、又この地の位置形勢より考ふれば不可能の事にあらざるべし、

諸般の準備を成りて、眠れる大蛇の睡めさたるが如く、船の徐々として動き出せるは、午後四時、點鐘正に八を聞く時なりき、船中に在りては時を報ずるに點鐘を以てすこれ殆萬國を通じて行はるゝところなりと云ふ、その法次の如し、

零時半　一點鐘　　五時　二　九時半　三
一時　二　　半　三　十時　四
半　三　　六時　四　半　五
二時　四　　半　一　十一時　六
半　五　　七時　二　半　七

三時　六　　半　三　十二時　八
半　七　　八時　四　
四時　八　　半　一　
半　一　　九時　二　

乘り出す海は名にし負ふ瀬戸の內海、風光の美なる言をまたず、天は藍碧に澄みて風は凉しく、波なき海面は鏡の如くして、白波を起こして進めども、身に微動だも感せず、快きこと譬ふるにものなし、人皆甲板に上り、或は海圖の研究に耽り、或は他くなきの眺めを恣にす、

船は漸く速力を加へて見る〳〵宇品島をあとにし、西南の針路を取り、峠島、似島を左舷に見つゝすゝむ、似島は檢疫所のあるところにして、宇品に入る船舶は皆こゝに於て檢疫をうけざるべからず、されど我等はその煩なく、檢疫所をながめつゝカクマ島附近に至れば、前面に樹木蓊鬱たる一大島を見る、これ名高き嚴島なり、船は小那沙美島と、大那沙美島との間をすぎ嚴島を右舷に見つゝ進む、日本三景の一として名あるところなれども、船上より見得べきは全く背面のみなれば、その如何に美なるかはもとより知るべからず、たゞ嚴島の殆ど全部、及び遠く左舷に見ゆる西

能美島の大部分、大那沙美、小那沙美、小黒神の諸島は、共に呉要塞地帶(附圖實線内)に在れば、或は山頂を平げ、或は中腹を穿ち或は海面に接して砲臺堡壘を築き、其他種々の設備をなせる有樣は、明かに見るを得べし殊に、嚴島の中部に於ては、砲座に据る付けたる大砲の砲身さへ、明かに見るを得たりき、

嚴島と大那沙美島との間を出でゝより、針路は漸く南に轉じて、遂に殆正南にすゝむ、左舷には、近く小黒神島あり、稍はなれて西能美の大島あり、その最高點は五百二十米に過ぎざれど頗高く見ゆ、右舷には、嚴島漸く遠ざからんとして、阿多田島近づき來り、その南遙かにへだたりて甲島あり、名の如き形を呈す、その南方に數百の漁船群をなせるを見る、

阿多田島を後にしてより眼界大に開け、峽谷を出でゝ平野に移れる思あり、左舷は猶西能美及び、大黒神島等の諸島岬角相迫りて眼界を遮れども、右舷一帶は、前に小なる甲島、姫小島の存するのみにして、眼界はるかに周防の山々に及ぶ、甲島の南方に軍艦一隻來り、數發の砲彈を發射して去れり、水夫曰はく大砲の試射なりと、この邊は呉要塞地帶に近くして(附圖點線内)撮影は禁ぜらる、又阿多田島と新五郎島との間は、海軍艦船の速力試驗所として用ひらる、

甲島と大黒神島との間に入らむとする時、夕食せんとて船室に降り、暫時にして再び甲板に出づれば、船は既に方向を變じて東南に走れり、日は漸く西に傾きて斜の光をなぐれば、鏡の如き水面に、そよ吹く風のおこせるさゞ波、これをうけて金色にかゞやき、その間にうかぶ數知れぬ漁舟の帆は一樣に白く、東なる島々は、近きはあざやかに、遠きは藍もてぼかせる如くなれど、共に綠の色濃やかなる間に、夕日に輝きて一きは白き白壁の立てるなど、多島海上の夕の景色まことに譬ふるに物なし、

右に保高島、牛島、端島、柱島、左に東能美、錫、黒横等の島々をながめつゝ、柱島水道を過ぐれば、左舷遠く開けて雲霧の中に四國の山々をのぞむ、日漸く暮れむとして船は諸島水道に入る、諸島は恰も大なる球を半截して、水上に浮べたるが如く、情島と津和地島との間に立ちて、小海峽を更に二分す、船は情島と諸島との間をすぐ、その間頗る狹く三百米にすぎざるが如く思はれたり、

宇品よりこゝに至る間は、所謂廣島灣にして、海上要するところ約三時間なり、その間見るところの島々は手島、端島、柱島等の片麻岩より成れるを除くの外は、殆全く花崗岩よりなる、いづれも浸蝕をうくること多くして高峻なる山形をなさゞれども、もとこれらの島々は陷落地帶の中に、ひとりのこりてその頂を水上にあらはせ

るものなれば、平地少きはもとよりそのところ、殊に小なる島々に於て然りとす、されどこれらの島々も山骨露出せる殺風景のものなくして多くは植物よく茂りて綠色濃きなつかしの眺を呈す、而して大なる江田、能美、倉橋、諸島は云ふに及ばず、吾人の目に入れる近き島々も、そのやゝ大なるものは、緩傾斜をなして海に終る處、人家部落をなして點在し、白壁所々に立てるを見る、これらの住民はもとより他の平地多き地方に見るが如く、純粹に農耕にのみ從事する能はず、多くは漁業をなす、吾人が船上より眺めたる幾多の漁船は皆これらの島人にして、一船即一家族なるもの多く、夫妻共に舟に上り、親子相助けて櫓をこげるもの多きを見る、かくの如き自然、かくの如き生活の中に在りては、海事思想の發達するは當然の事と云ふべく、古に在りては海賊の根據地となり、今日に於ては、海外渡航者海上生活者の輩出地たるは、自然の數と云ふべし、

抑廣島灣は一の陷落地帶にして、かの瀨戸内陷落地帶の一部をなし、北方深く安藝に灣入し、前面一帶は屋代、情、津和地、鹿、倉橋の諸島によりて全く包括せらる、而して灣の東北部は、今最活動せる處にして、我國に於て最重要なる地方の一たり、即北隅には宇品、廣島あり、東部沿岸には吳の軍港ありこれと一葦帶水をへだてたる江田

島には海軍兵學校あり、共に我國に於て、缺くべからざる地たり、西部は東部に比すればその價値頗る劣れども猶西北には有名なる嚴島の勝地あり、かくの如く有要なる處なれば灣内往來の船舶甚多く交通頗る頻繁なり、灣内より外に出づる水道の主なるもの四あり、周防の熊毛郡と屋代島即有名なる大島郡との間に在る大畠瀨戸、情島と津和地島との間なる諸島水道、怒和島と倉橋島との間なる怒和水道、及び安藝加茂郡と倉橋との間なる隠戸瀨戸これなり、而して主として大船舶に用ゐらるゝものは、中央の二水道なりと云ふ、

諸島水道を出づれば、即伊豫灘にして眼界頗る開け、東南遥に、四國の山々の蒼然たる暮色の中にたゝずめるを見る、おぼろげながら、四國富士の姿も見るを得たりき、されど夜の色漸く濃くして殘り惜しき内海の眺もはや見るべからず、片山島を右舷にしたる頃は、闇の幕全く垂れぬ、島の姿も、水の樣も消えて、だゞ闇をつらぬきて走るのみ、

この夕、友と甲板に立つて島を語り海を談ず、興湧きて夜の更くるをも知らざりしが、夏の夜ながら、冷氣身にしむるを覺えて、我に復り、乃船室に入りて眠に就きぬ、

七月十六日　晴

門司着港更に玄界洋に浮ぶ

午前二時半、行き交ふ人の足音に目をさませば、今部崎に着けるなりと云ふ、一睡の間に伊豫灘より周防灘をすぎて、下ノ關海峽の東口に來れるなり、急ぎ甲板に上る、二十六夜の月あるべき頃なれど雲とざして見えず、たゞ部崎燈臺の光によりて、僅かに附近を見るべきのみ、船はばや錨を下して靜かにとゞまれり、この海峽は、幅狹く流急にして、通過頗る困難なるが上に、航海の衝にあたり、往來の船舶頗る多く、時に衝突座礁の危險あるが故に、今は夜間通過を禁じて、出入共にこれを許さず、故に夜に入りて來るものは、東はこの部崎に、西は六連島に假泊し、天明を待ちて海峽に入る、

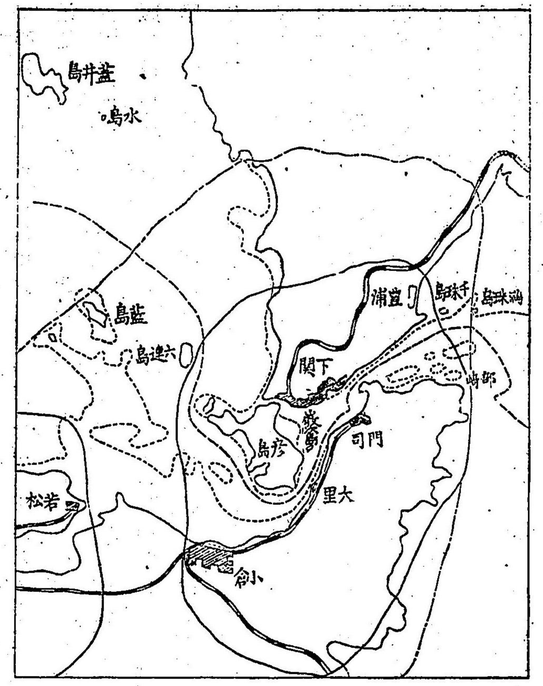
夜は猶明けず見るべきものもあらざれば再び船室に入りて眠る、暁むれば五時四十分、船は將に部崎を出でんとす、急ぎ甲板に出づれば、水夫は今や、錨をあぐるに忙しきを見る、

船は部崎を出で西北に向ひ、滿珠島を右舷にして西に轉じ、更に西南に向ひ、右に干珠島、串崎、左に田の浦の碇泊地を見つゝすゝめば愈々海峽の最狹部に入る、これ即早鞆の瀨戸にして長門豐浦郡の地と、豐前企救郡の地と南北より相迫まりて、その

幅僅に六町にすぎず、手を出さば觸れんかと思はる、兩岸共に、山脚直ちに海に迫りて平地なく、右岸には中國街道の海に沿うて走れるを見る、この北岸は即有名なる壇浦にして七百年前、平氏の一族が、花々しき最後を遂げたる處なり、この邊一帶は內海の關門たる要地なれば、所謂要塞地帶として防備頗嚴なり、或は山頂に或は中腹に、或は水面に接して、砲臺を築けり、中には明かに、その砲門を見るべきものあり、早鞆の瀨戸を出づれば兩岸稍開けて、帆檣林立の港を見る、北なるは下關にして、南なるは門司なり、部崎を出でゝより約三十分にして門司港に入り投錨す、船は石炭を積込まんが爲に、午後三四時頃まで、こゝにあらざるべからず、故に上陸して、趣味ある海峽の風物を見んとせしも許されず、されど甲板に立てば下關、門司皆一眸の中に在り、北には赤間宮春帆樓引接寺など手に取るばかり、南には海岸一里に亙る石炭の黑堤、淺野セメント會社の煙突より城山の嚴たる等、一として見飽くを知らず行き交ふ船や、石炭の積入れや、目に新なるもの多く、半日の碇泊もさまで倦怠の念を起さゝりき、

抑この海峽は、瀨戸內海の西に盡きて外海に通せんとする關門にして、かのジブラルタルにも比すべき形勝の地に在り、而して一度早鞆瀨戸に相迫れる陸岸の漸く

西に開けんとするにあたり、更に彦島の横はるありて水道は二分せらる、南なるは大瀬戸にして、北なるは小瀬戸なり、小瀬戸はその幅狹きところは五十間に過ぎず、且頗る淺ければ航行に適せず、船舶は皆大瀬戸を交通す、大瀬戸はその幅凡十町ありかくて下關海峽と總稱する海峽は、更にこの三海峽に分たれ、その間に三つの瀬戸を頂角としたたる殆正三角形の小內海をつくる、



かくの如く內外兩海は狹き水道によりて相通ずるを以て、自然の理として、潮汐の干滿內外相伴ふ能はず、急激に出入せんとし、一種の潮流を起して相互に交流す、爲めに流速頗る大、かの賴山陽が「長街如帶醮波光、面々青山護萬樹、莫怪潮頭駛於箭、關門一出是玄洋」と吟じたりしが如く、門司港內碇泊の船上より見れば、容易に海水の大なる速度を以て流るゝを見るべく、船は爲めに錨を投ずるも猶その位置頗る動き、この間を通過する船舶は大に危險を感ずと云ふ、その流速は早鞆に在りては大潮時には一時間七海里八分の一あり阿波の鳴門に次ぎて、我國に於ける最速なるものなり、

下の關と門司とは、實にこの海峽なる小內海の南北に立てる港なり、その形勝の地たるは云ふを待たず、而してこの邊一帶は、山直ちに海に迫るを以て、市街はその麓の海に終る所に在りて、漸次後方に發達し、階段狀をなして山腹に及べり、下關門司共にかくの如く、海上より望めば、その狀況頗る明かに、山腹丘崗至る處、家屋の綠樹と點綴するを見る、

下關は北岸にあり昔より有名なる海港たり、もと豐浦郡の一町村なりしが、今は市制を布く人口四萬五千あり、市街は東西に長くして約一里、東は壇浦より西は小瀬

戸に至る、下關の名は周防の上關中關に對するものにして、近古の稱なり、古はおもに赤間關と云へり、その起源については諸說あれど、もとより確かならず、又馬關と稱するは、赤間を赤馬に作りて轉じたるもの、元祿以後の詩人の發意なりと云ふ、

下關の港界は、彦島の弟子待鼻より岩流島の東南に至る一線をひき、更に延長して北東微北に向ひて引きたる一線と、彦島海士浦鼻より、北東に引きたる一線との間に在り、港內に於ても潮流の速力頗大にして、大潮には七乃至八海里小潮には三乃至四海里あり、船舶の投錨には大に注意するを要すと云ふ、

門司は南岸に在り、もと豐前企救郡の一小村落なりしが、近年一大發展をなし人口四萬四千余を有する一大開港場となり、市制を布けり、後に山を負ひ、前は直ちに海峽に臨み、近く下關と相對す、港界は門司市の北西なる白木崎の北西四鏈の點より、市の北なる門司崎に引ける一線と、同點より正南に引ける一線との間にして、廣さは東西九町南北二十町あり、碇泊所の水深、干潮にも三十三呎ありと云ふ、

かくて兩市は相對して、內海の咽喉を扼すると共に、一は本州の西南端一は九州の東北端に在るが故に、海には內外を連ね、陸には本土と九州とを結ぶ、從て海陸の交通機關は皆此處に集中す、海に於ては日本郵船、大坂商船兩社船は云ふも更なり、山

陽鐵道の下ノ關釜山間連絡滊船內國の諸滊船より、外國の諸滊船に至るまで、苟くも東洋航路たる以上は、この地を經ざるなく、殊に門司は石炭の積込に最便利なるが故に、通過する船舶は皆寄港碇泊す陸に於ては、日本の幹線たる山陽及び九州の兩鐵道は、此地に於て相接し、兩市の間は二隻の專用船ありて、之が連絡を計り、又三十余隻の小蒸滊は兩市間及び若松小倉等の間を往來して連絡を計れり、

この邊一帶は又我國西邊の關門として、帝國の一大鎖鑰たれば、たゞに交通商業上大切なるのみならず、國防上苟くもすべからざるところなり、故に附近一帶の地を下關要塞地帶として、多くの堡壘を築き、要塞司令部を下關に置きて之を守れり、門司下關兩市を初めとして、東は豐浦西は小倉等皆な要塞地帶の第一區線內に在り、かくの如く相接し、一にして二ならざるが如き兩市もその狀況は稍異なり下關は、その歷史古く既に德川時代以前より、繁榮を極めし所なり、維新以來も大に發達し將來も益繁盛を加ふべしとは云へ、現今に於ては、その水稍淺きと、石炭積込の便少きとにより、大船は下ノ關に寄港するものなく、來り舶するは概ね小船のみ、かくの如き狀況なるに加ふるに、歷史の勢力を以てするが爲めにや、門司の進取活動の氣に滿ち、從て秩序なきに反し、この地は靜穩にして保守の風あり、秩序まことに整正

たり、之好個の對照と云ふべし、

下關の歴史を考ふるにまことに古きものあり、上古外國との關係生ずるや、早くもこの地に臨海館を置きて、外蕃接待の門戸となせり、日本書記欽明天皇の條を按ずるに、當時既に臨海館は、難波の鴻臚館と比すべき驛舍なりしが如し以て當時既に頗る重要なる地にして驛亭連り立ちしを見るべし、されば律にも錄して、長門爲關國と云へり、臨海館跡は今考ふべからざれども、かの藤原信西の遊長門臨海館詩あれば、當時は猶存せしなるへし、

源平爭奪時代に於ては、云ふまでもなく兩氏の運命に關せし重大なる關係ありし地なり、鎌倉時代に入りては、長門警固所を置き、探題を命じてこの關門を守れり、足利氏の中世以後、海事思想發達すると共に漸く榮え、殊にかの大内氏は居を山口に搆へ、この地を其關門として海上の鎖鑰を握り、以て四方に雄飛せり、足利氏の末に至りて愈重要の地となり、殊に德川氏に入るや、一方には毛利氏の關門となり、一方には九州諸侯の大里より來りて上陸する驛站となり、市街の繁華益々加はれり、元祿以後詩人の吟咏、皆其繁榮を證する材料たらざるはなし、幕末外邦との交渉起るや、地位優勝なると、毛利氏の勢力と相待ちて、下關は一時世人注意の集中點となれ

り、かの英艦砲擊事件は、今猶世人の記憶に新たなるところなり、

北岸の下關の、かく古き發達の歴史を有し、久しく一大海港たりしに反し、南岸の門司の、全く近年に至りて發達したるものなるは、まことに一奇とするに足る、

もとより門司の地の、文字關又は門司關の名を以て知られたるは、既に久し、されど古に多く知られ、近代に至りてはかべりて人の知るところとならざりき、ことに德川時代には大里より下關に渡りしが故に、ます〳〵見るに足るものなく明治に入りても亦久しく人の知るなく、今日の發達は何人も想ひ及ばざるところなりき、明治二十二年、新町村制施行の頃に於ては、文字ヶ關村と稱し、各所に散居せる住民は僅に戸數六百、人口三千百にすぎず、住民は多く農業漁業に從ひ、沿岸には少許の鹽田あり、寂寞たる一孤村、茅屋林中に隱見し、沿岸蘆荻の茂るところ、漁舟三五まことに太古の一區域なりき、然るに今や即如何、四萬四千の人口を有し、陸上には鐵路走り海には大船巨舶輻輳し、我國内のみならず、東洋を通じて有名なる一大開港場となれり、我國に於て急激なる發達をなせること、かくの如きは他に見ざるところなり、

抑門司のかくの如く繁榮を極むるに至れるは、もとより天然の要地たるが爲めな

りと雖もその今日あらしめたる直接原因は、九州鐵道の敷設と、築港の竣成とにあり、九州鐵道は明治十九年創立計畫をなし、二十一年許可を得て工事に着手し、翌年博多久留米間成り、二十四年四月に更に門司高瀬間成り、漸次その歩をすゝめ、以て今日に至れり、かくて門司は九州鐵道の起點となりしと共に、一方には築港の計畫を立て、明治二十五年門司築港株式會社起こり、翌年より工事に着手し、山を崩し海を埋め、鋭意事業をすゝめ、二十九年に至りては十一萬餘坪の工事悉く成り、舊時の鹽田と蘆荻繁茂せる淺渚とは、一面の市街設計地となり、人口日々に增加し、市況愈盛に、その發展の速かなる人目を驚かせり、これに應じて明治二十二年特別輸出港となり、三十二年に至りては更に開港場となり、益その繁榮を加へたり、この年又市制を布き、三十四年に至りては、第二市區設計の工事を起して、更に六萬餘坪の市街地を加へ、以てその發展に應せり、今この地發達の狀況を見んが爲めに、二十二年以來人口增加の狀況を記さむ、

明治廿二年	六六一戸	三、一三〇人
明治三十年	三、四八五	二三、五九八
明治卅八年	一一、八八六	四四、一一三

即ち二十二年より三十八年に至る十六年間に、戸數は十八倍、人口は十四倍强の增加をなし平均して戸數は一ヶ年に七百一、一ヶ月、五十八、人口は一ヶ年二千五百六十一ヶ月二百十三、の增加にあたる、殊に三十二年の如きは最著しく、一日平均七戸十一人强の割合を以て增加したりと云ふ、

陸上の戸口かくの如く增加すると共に、海上には出入の船舶亦年を逐ひて增加せり、三十四年以前は、正確なる統計なきを以て明かにする能はざれども初めて正確なる統計を見たる三十四年に於ては出入船舶の總計は、

	入港船數	同噸數	出港船數	同噸數
汽船	一二、二〇八	四、六七四、七九二	一、二一六一	四、六七六、八七七
帆船	五三八	四四、六九三	五五三	三五、五八四
合計	一二、七四六	四、七五九、四八五	一、二一四	四、七一二、四六一

にしてこれを三百年來の歷史を有する長崎港と比較するに、同年度に於ける長崎出入の船舶總計は、

	入港船數	同噸數	出港船數	同噸數
汽船	二、四七四	二、七九七、三二八	二、四六二	二、七九一、三四六

帆船	一〇七	三九三〇二	九五
合計	二、五八一	二、八三六、六三〇	二、五五六

三五、五〇七	二、八二六、八五三

なれば、約一、七倍にあたる、その進歩の速なる想見するに足る、而してこの勢は今猶止まず、門司港の設備の整ふと共に、長崎の商權は漸く門司に移らむとする形勢あり、外國貿易に從事する船舶の門司に出入するもののみにても、日露戰爭の前年、即三十六年に於ては、入港せしもの、汽船二千餘隻三百五十七萬餘噸、帆船五隻千噸、出港せしもの、汽船二千餘隻三百五十六萬餘噸あり、同年の横濱に比して僅かに四十萬噸少きのみ、三十七年及び三十八年は戰爭の爲めに、多少の打擊を蒙りしとは云へ、猶出入共に千五百餘隻二百七十餘萬噸ありき、

かくの如く、出入船舶の增加すると共に、貿易高も亦頗る增加せり、今明治廿三年、特別輸出港となりたる以來の概況を見るに、廿三年には、輸出僅に三十四萬なりしが、廿八年には、百三十八萬圓となり、三十二年、即開港場となりたる年には、輸出六百十五萬、輸入六十四萬、合計六百七十九萬圓となり、三十七年には、戰爭の影響を蒙りたるにもかゝはらず、輸出千二百九十萬、輸入は戰時の爲めに非常に增加して千十一萬、合計二千三百二萬餘圓となれり、即十五年間に、全貿易額に於て六十七倍强の增

加を呈せるなり、今これを以て長崎に比するに、貿易の猶常調にありたりと云ふを得べき三十六年を以てせん、同年度に於ける門司は、輸出千五百五十一萬餘圓、輸入八百三十六萬餘圓、合計二千三百八十八萬餘圓にして、長崎は輸出四百九十五萬餘圓、輸入千二百八十六萬餘圓、合計千七百八十二萬餘圓なれば、總貿易高に於て門司の多きこと五百萬圓なり、

而して門司貿易の特色は常に大なる輸出超過に在り、三十六年度に於ける輸出超過は、實に七百十四萬圓にして、長崎の輸入超過七百九十三萬に對して、好個の對照をなせり、而してその輸出超過の原因は、云ふまでもなく石炭の輸出に在り今三十六年度に於ける輸出入物品を見るに、石炭輸出高は、實に一千百二十萬餘圓に上る、これについで大なるは、綿糸の三百八十八萬圓にして、その他には、セメントの三十萬圓に上るあるのみ、他は皆十萬圓以下に在り、輸入の主なるものは棉花の三百六十四萬を主とし、次いで麥粉の百二十九萬圓ありそのの他軌條、砂糖、鐵鑛、豆餅、石油類は、各二十萬乃至五十萬の輸入あり、而して、輸入は從來、長崎港に輸入して、轉送せられたりし九州北部地方の需要品が門司より輸入せらるゝに至れるため、年々增加するの傾向ありと云ふ、

門司に於ける最大切なる輸出品たる石炭は、即九州北部の所謂筑豐炭田の所產なり、この炭田は我國第一の炭田にして、その產額頗る多く、最多の產額ある較手をはじめとし、田川嘉穗、遠賀、粕谷、企救の諸郡より出すものは、三十七年度に於ては六百餘萬噸あり、この多額の石炭は、一は鐵道により、一は水運により、若松、蘆屋、門司、宇之島等の各港に出す、而して海外輸出港としては門司の外に、若松の三十七年五月より開かれたるありと雖も、開港日猶淺く、且位置、設備、歷史等に於て、門司に比すべくもあらざれば、この多額の石炭は、主として門司に集まり、然る後、輸出せらる、その盛況を呈するは、もとより至當のことなりと云ふべし、海岸一里に亘りて、山の如く堆積せられたる黑塊は、みな石炭にして、港內を縱橫に往來する、一種奇形なる、數百の胴船は、みな石炭船なり、一萬五千の石炭仲仕は、この胴船より數十の汽船に、石炭を積込めり、門司は實に石炭の港にして、見るもの聞くもの殆皆、石炭ならざるはなし、かくしてこの港より出せる海外輸出額は、既に述べしが如く三十六年に於ては、二百萬噸、一千百萬圓の巨額に達し、石炭の輸出に於ては實に我國第一の位置を占む、以上門司の發達を概說せり、開港以來未だ二十年ならざるに、既にかくの如き著しき發達をなし、將來に於ても猶益發達せんとする勢あるは、殆ど他に見るべからざ

るところなり、抑門司の地たる背後直に大平野に接して貨物集散の中心港となるべき點に於ては、橫濱、大阪等と大に異るものあれども、しかも門司は、門司特有の地位を有す、何ぞや、曰はく日本の海上活動の中心たる瀨戸內海の關門をなすが故に、日本商業の中心たる大阪神戸と、大陸との交通は、必ず此地を經由せざるべからざること、即これなり、加之背後には、近世文明の最大要素たる石炭の一大產地を有す、この二要素は、合して門司をして益繁盛ならしめざればやまざるべし、

而して門司のかくの如き、未來を有すると共に、對岸なる下關も亦益榮ゆべし、既に云へるが如く、兩者はその市況をことにし、特色をことにするものありとは云へ、その形勝の地に在ること同じく、且兩者の間はまことに狹くむしろ相集まりて一港をなすと云ふべく、從てその行政區劃をことにするにもかゝはらず、實際は殆ど同一市の觀を呈し、稅關の如きも、長崎稅關の支署を門司に設け、その出張所を下の關に置き、輸出物も石炭以外のものは、下關よりするもの少なからず、要するに門司は新開地にして、活潑進取の氣象に富めど、秩序整正ならず、これに反し、下關は歷史的の地にして、種々の機關備はり、以て遊樂居住に適す故に兩者相待つて、一の關門港をなすと云ふべく、その盛衰の運命を共にすべきは明らかなり、

午後二時、石炭の積込みもすみて出港の準備をなす、之より先既に第七高等學校造士館の生徒職員六十名乘組みたれば、吾等の一行はこゝに全く揃へるなり、門司よりは他に猶陸軍の人々も乘込めり、

午後三時、愈出港し西南に向ひ、曾て新羅貢船の碇泊所にして、新羅崎より轉訛せしと傳ふる白木崎をあとにし、門司に別れを告げて、大瀨戸に入る、大瀨戸は彦島南端、弟子待鼻と豐前大里との間にして、最狹部はその幅約十町、水深六尋より九尋に至る潮流急に、兩岸砂洲あり、且與治兵衛岩鳴瀨の險あるを以て、航行大に警戒を要すと云ふ、

右に彦島の翠色を眺め、左に大里新町等の畫ける如き風光を賞しつゝ、彦島の東南端を廻れば、船は殆ど西に進む、大里は門司の西南一里餘にあり、昔安德帝の驛を駐められしことありしより內裏浦と云ひ、遂に大里と轉訛せるなりと傳ふ、往時は九州諸侯渡航の海驛にして、下關との往來盛に、その繁榮遙に門司の右に出でたりと云ふ、頼山陽の「踏藍肥豐萬疊山、路窮左右海波彎、眼明先作歸鄉想、粉壁煙檣是赤關」とは、この地より下關を望んで浮べたる感懷なり、

船は西すること暫にして、方向を轉じ西北に向ふ、此邊は海稍廣くなりたれど、一帶

に淺く、航路の廣さは猶大瀨戸と異ならず、然かも航路中深四尋半に過ぎざるところあり、故に船はつとめて、徐行す南方遙に、小倉を雲霧の中に望み、東に彦島の一小港福浦を眺めて、更に西北に進み、彦島の西北角邊に至れば、針路はまた轉じて北となり六連島の東端に向ふ、此間左方遙かに若松港口及び枝光製鐵所の煤烟を望む、六連島は彦島の西角約一海里半、長門本陸の西岸を去る二海里に在り、方八丁許の小島にして、人口三百餘、彦島村に屬す、島の東北端に燈臺あり、以て航路の標識とす、この島には檢疫所あり、宇品に於ける似島の如く、下關海峽に入らんとする船舶は、臨檢を受けざるべからず、且つ既に述べしが如く、夜間外海より來れる船舶は皆島の東方に假泊して、夜の明くるを待ち然る後海峽に入る、頗る大切なる地なり、

六連島の東北角を廻れば、船は方向を西北に轉じて、藍島と蓋井島との間に向ふ、門司より此處に至るまで、約一時間を要せり、船は漸く外海に出でんとして、海波立てり、宇品よりこゝに至るまでは、一水砥の如く、航海の樂むべきを見て、更に苦しむべきを知らざりしが、これより名にし負ふ玄界灘に出でゝ、激浪の弄ぶところとならんとす、船に弱きものは漸く危懼の念を抱ざせり、

蓋井島と藍島との間に來れる頃、針路は又西に轉じ、兩島を遠く背後に見るに至り

ては、陸影の目に入るもの漸く少く、たゞ遙か南遠く、霞める間より、一大陸塊の浮ぶを見る、想ふに大島ならんか、

船は略、北緯三十四度の線に沿うて西走す、波漸く高くして船體の動搖漸く身に感す、陸影は刻一刻と消え去りて、午後六時頃に至りては、四邊たゞ漫々たる水を見るのみ、こゝに至りては、初めて故山を去りて海に浮べる身の、多少の感慨なくんばあらず、況んやその影こそ見るを得ざれ、遙か北方には、常陸丸と共に國民の忘るべからざる沖島あるにあらずや、更に之に加ふるに、日本海々戰の戰はれたるは即此處にあらずや、夕日に向ひて甲板に立ち海上を眺むる時、そこに得云はれぬ思こそ湧き出づれ、

日將さに暮れんとする頃、對馬東水道に入らんとして、水色漸く暗藍色を加ふるを見る、これ對馬海流の影響なるべし、夕日は刻々水平線に近き、遂に五彩燦爛たる雲の間より全く水に沒し去れり、惜しき夕の眺をあとにして、日記書かんとして船室に入る、

九時半に至りし頃なるか、迅雷耳をつんざくばかりなるに、驚く間もあらせず、暴雨沛然として來る、風烈げしく船の動搖益加はれり、船に弱き身は眠るに如かずと、勉

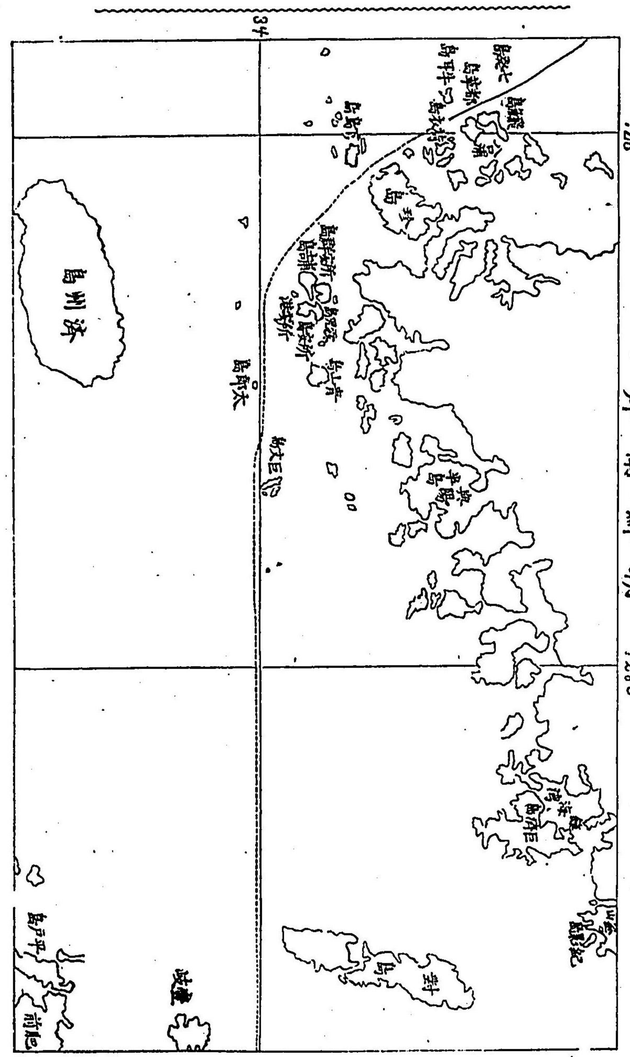
めて眠らんとすれど、降りこむしぶきと、吐き出す呼息との相和せし、厭はしき一種の臭氣は胸を壓するばかりにて、眠られず、轉輾反側して過ごせり、

十七日　朝雨後曇　午後晴

日程　海上

曙むれば既に五時半、夜は疾くにあけたり、直ちに甲板に出づ、波はやゝ靜まれるが如くなれども、なほ高く、小雨そぼ降りて雲行頗る怪し、されど海上の朝の眺めは快く、睡氣頓にさむ、船は今や、朝鮮南岸なる多島海中に在り、既に白島、尖頂島を後にして、巨文島を近く右舷に見る、巨文島は朝鮮半島南岸の中部なる興陽半島を去ること正南二十五海里、その南端は殆北緯三十四度に位し、暖流の流域内に在りと云ふ、島は東島、西島、倭島の三あり、互に相包持して一灣を抱く、灣内水深くして大船巨艦を入るゝに足る、是れハミルトン灣にして、往年英國の東洋艦隊來りて、占領せしことあり、爲めに廣く其名を知らるゝに至れり、この島は漁業の一大中心地にして、近海一帶に鯛、鰹、鮪、鰹、鰯等多く、邦人の來りて此等の漁業に從事するもの、明治三十八年の秋季、最盛時には四百四十人に上りしと云ふ、

朝食を喫し終りて、再び甲板に上れば、太郎島は既に左舷後方となり、右舷には近く


726
34
島州済
馬関海峡
馬関海峡
馬関海峡

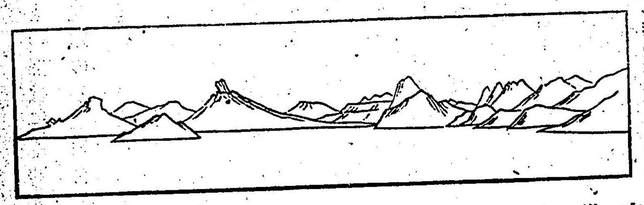
るに至らん、三十八年邦人の出漁せしもの約百人ありたりと云ふ、この邊にて我漁船の或は二三或は單獨に朝鮮沿岸の方へ漕ぎゆくを見たり。

所安群島の西南に至るや、西に進みし航路は北に轉じて、畧西北となり、珍島の西南角に向ふ、此時雨は既に歇みて跡なく、雲薄らぎて日光漸く照らさんとせり、

珍島に至るまでは即朝鮮南岸にして、見るところの島々は、我瀬戸内海の島々と、大にその地形景色をことにす、一帶に樹木の茂れるもの極めて稀に、岩骨露出して浸蝕の跡鮮に、近きものは岩石の層向手に取りて見るが如く明かにすべきもの多し

これらの島々はもと半島と一體なりしものなれど、種々の作用によりて斷絶せられ、その一部分の殘存するものなり、珍島より以北の半島西南岸の諸島もすべての點に於て、南岸の諸島と畧同一なるが如し、

南岸一帶諸島は前述の如く、漁業地として頗る良地位に在り、早くより我西北九州及び防長地方の漁夫は、この附近に至りて漁業を營みしが、近來は益々盛にして、南岸を以て滿足せず、更に西北に進みて、今や木浦、群山浦邊一帶の海岸に航して、漁業を營むもの頗る多く、明治三十八年には全羅道の沿海一帶に出漁せしもの最盛季には六千五百人に上れり、その最多き地は西岸の竹島蝟島、及び南岸の安島、國島、巨



珍島を南方より望む

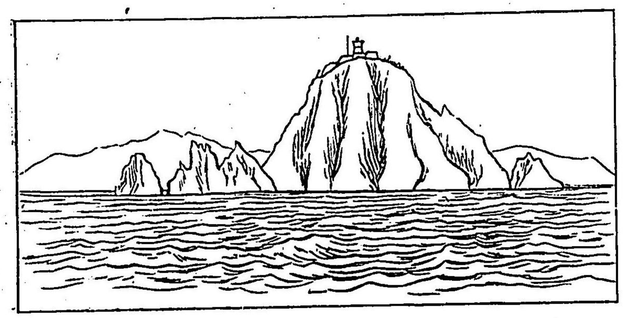
文島、青山島等にして最盛季は皆四百人以上の漁夫ありて之に從へり、主なる魚族は北韓の明太魚と比すべき石首魚、並に鯛にして、前者は西岸に多く、後者は南岸に多し、出漁者の八分はこれに從事す、その他鮃、鰹、鮪、鰤、帶刀魚等多く、他にも多くの魚族あり、出漁の季は魚族によりてその季をことにすれども、概して出漁者の最多きは四、五、六、七月にし九、十、十一月之につぐ、南岸、東部については春夏の候よりも秋季に多し、これ鯛漁の最良季なればなり、

要するにこの邊一帶の漁業は、邦人の設備技術の進むと共に、益盛となり、國家の一富源たるに至るべし、

珍島の西南角を廻れば即半島西岸なり、大小の島嶼碁布して何れを何れと辯ずべくもあらず、船は殆ど西北の針路を取りてこの間を通過す、珍島はこの邊第一の大島にして、恰かも半島の如く突出せり、進みて荷衣島を右舷にすれば、稍はなれて、前面にあたり、右舷には都草島あり、左舷には牛耳島あり、荷衣島と都草島

との間は深く灣入して、その奥に八口浦あり、良碇泊場にして日露戰役には、一時我艦隊の根據地たりしと云ふ、

これより以前に見たる島々は、大なるものもその距離遠かりし爲めにや、更に人家を見る能はざりしが、牛耳島にはやゝ大なる部落の海岸に立てるを見、且牛耳島北の一小島にも、數戸の人家の島の東南なる小窪地に存するを見たり、荷衣、都草の諸島には畑地及び人工を加へたる森林地の存するを望見せり、されど既に云へるが如く、これらの島々は概して樹木に乏しく、山骨露出するもの多く、從てその風物頗る殺風景にして、一點親しむべく愛すべき點なし、之を我瀬戸内海附近の島々の、全島綠樹を以て蔽はれ、斷崖なほ綠色濃やかに、花崗岩上直ちに翠松の立つを見るに比ぶれば、果して如何、その人心に及ぼす影響の異なるべきは云はずもがな船は益進みて飛禽島を右舷後にするや、島漸く少なく、前面にはたゞ七發島の一小嶼を見るのみ、七發島は西北、黄海に出づる航路に見るべき最後の韓國領土にして、大連まで海上三百十八海里あり、もとより海中の一小孤島なり、頂上には燈臺の設あり、近づけば白堊にて塗れる家屋及燈臺と、海岸より斷崖を傳ふて開きし登路とを、明かに見るを得べく、又地層の層向最明瞭にあらはれたるを見るべし。



七發島

午後二時、七發島を後にして黄海に入る、三時に至れば七發島亦水平線下に沒し去りて、四顧たゞ漫々たる海面、更に陸影の見るべきなし、約一晝夜はかくして送らざるべからざるなり、

昨日門司より仙波少將乘組めり、本日午後二時より食堂に於て滿洲談あり、されど我等は之を聽くを得ず頗る遺憾なりき、五時頃より又小雨來る、されど波高からず、且つ漸く慣れたれば苦痛を感ずることも多からず、或は甲板に出でゝ波濤を見て默想し、或は輪投げの遊戯に喚聲を發し、或は船室に横たはり眼を閉ぢて默想に耽る、古の聖人は小人閑居して不善を爲すと敎へ給へり、これ一面の眞理なれども、又人は無聊の時にこそ眞に我の如何なるかを思ふものにあらざるなきか、

思ひ〳〵の感慨はあれど、事なくてこの日もくれぬ、明日を思へば、祭の日來るを待つ幼童の心地して、

十八日　朝小雨　午後晴

日程　大連上陸

早く洗面せよとの聲に驚かされて目をさまし、甲板に出づれば、細雨降りしきり、雲低く垂れて、眼界大に限らる、波高く船體動搖すれど、慣れたる爲めにや苦みを感せず、只茫たる海面を吹き來る朝風は顏を撫でて、快く、唾氣頓に去る、

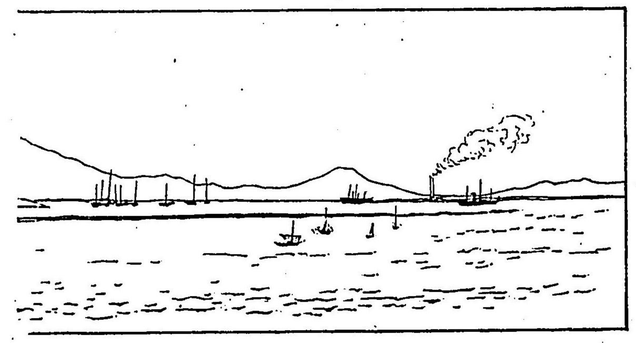
海上生活も今日を以て終らんとす、朝食後通達あり、曰はく本日午後四五時頃大連に上陸すべければ携帶品を整理し置くべし曰はく兩替をなさんとするものは申出づべし、曰はく朝鮮行をなさんとするものは本日午前中に申出づべし、其他猶上陸後の注意あり、人々今更の如く立ち騷ぐ、

午前は猶ほ一物の目に入るなき海上に在り、正午過ぐる三十分にして、前方に一小孤島を見る、これ即三十七年八月十日の海戰を以て知られたる圓島にして、南方より見ればその名の如く圓く、球を半截して水上に浮べたるが如し、北方より見ればむしろ三角形をなせり、島と云ふよりも、むしろ海中に孤立せる一岩塊と云ふべき小なるものにして、岩骨あらはなり、こゝより大連まで二十八海里あり、三時間ならずして達すべしと云ふ、

圓島を右舷に望み、やがて之を後にして進むこと約一時間前面又一島を見る、これ即大連灣口に横はれる南三山島にして、その西南角には燈臺あり、この島より遙かに西、船の左舷前方に大なる陸影あり、これ即大連半島なり、晴天の時には猶遙か西方旅順の老鐵山を見るべく、又北方には大和尙山(老虎山)の高く聳ゆるを望むべしと云ふされどこの時に西より北にかけ薄雲一面に蔽ひたれば、見えざりき

南三山島と半島との間は兩岸近くして手に取るが如く、斷崖の直ちに海に終るところ、支那厨の岩石はよくあらはる西口角より船は西に向ひて走り、刻刻大連に近づく、大連市街は漸次明かに眼底に映じ來り、その大なる煙突、壯大なる建物より港の諸設備は云ふも更なり、棧橋に在る人々も、漸く見分くるを得るに至れり、南方一帶は中山性の山岳相連り市街を隔てゝ遙か西には、美しき大連富士の頂をあらはすあり、北には和尙島砲臺より柳樹屯のあたり、明に見え、その間には數隻の軍艦、隊形をなして相連りて碇泊し雄姿堂々たり三年前は果して如何なりしやと、新らしき感慨も湧き出づ、

午後三時愈大連港に着き、一先づ防波堤外に進行を止む暫時にして、進みて防波場の西口より、第一第二棧橋の間に入る、名にし負ふ大連の棧橋、その壯大なることも



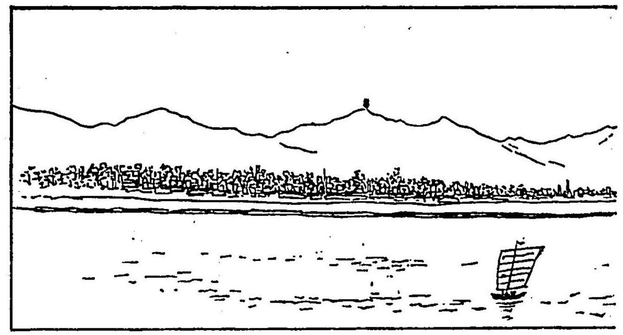
大りよ上船

とよりかの宇品と同日の談にあらず、第二即東桟橋は今大に破壊して、殆用ひられざれども、第一即西桟橋は盛に使用せられ倉庫一面に建てられ鐵路來る、福井丸其他三隻の氣船は今や之に横着して貨物の積卸をなせり

我琴平丸は兩桟橋の間に入り、桟橋と直角の方向をとり小蒸氣の助けにより横に進み、遂にその左舷側を兩桟橋の中間なる繫留所の岸に着けたり

この間に一行は、夕食を濟ませ、準備を整へ、上陸の命を待つ、四時を過ぐること三十分、愈上陸の命は下れり、我先きにと飛び出して大陸の第一歩を試む、茲に三韮夜の海上生活は終りを告げ、しばし遼東の人となりおほせたるなり、

一先づ貨物置場に集合して隊伍を整へ、千態萬



遼港を望む

狀なる苦力の歎知れず群りて立ち騷げるを見つゝ、市街に入り、寺内通、監部通を過ぎ、監部通りの西端にある兵站業務取扱所内の宿舎に入りて行季を解く、宿舎は支那流の建物にして、室の入口に一坪許の土間あり、その他は只板の間の上にアンペラ一枚を布けり、薄暗き汚れたる一室に毛布一枚の生活はやく身の大陸化したるを覺ゆ、

既に夕食を濟ませたることなれば、落ち着くや否や物珍らしさに人々みな飛び出して市街を見る、

この夜はかくして過ぎぬ明日のことは何の通知もあらざれど、明日の事を思ひ煩ふことなかれとの敎を奉じて、且は船中の疲勞に堅く冷きアンペラの上に横はりて、一夜を一睡に過ごせ

り、

大連

大連の沿革—近傍の地形—市街—人口及生業—交通路—氣候

大連の沿革

大連は清國主權確立時代青泥窪と稱し、露國時代ダルニーと改む露語「極東」の義にして千八百九十九年(明治卅二年)露國が市街の創設に着手してより日夜其經營に怠りなきもの殆んと五ヶ年間千九百四年將に成らんとして端なく日露の開戰となり遂に我軍の占領する處となれるものなり、抑も過去の歴史を尋ぬるに日清戰役の終るや北京駐紮露國公使カシニー伯は戰後清國の窮乏に苦しむに乘じて日本に對する償金を保證し歐洲に其公債を募集せしめその成功するに及んで是が報酬として滿洲鐵道の敷設及運輸の特權を要求し李鴻章を要して內諾を與へしめしが千八百九十六年(明治廿九年)露帝の戴冠式ありて李鴻章の之に參列するや當時の外相ロバノフは李鴻章を翻弄して遂に露清密約を締結せしめたり、これカシニーの提案なれば、世にカシニー密約と稱するもの、鐵道敷設權鐵道守備兵駐屯

權、鑛山採掘權東三省に於ける軍隊訓練權、旅順大連の戰時使用權膠州灣租借權等を含みたりき、

かくして露國は後來關東州占領の端緒を開きぬ、然るに千八百九十八年(明治三十年)秋に至りて山東省に暴民蜂起して獨逸の宣教師を殺害したるの故を以て獨逸が膠州灣租借を清國に迫りて成功するや露國は奇貨措くべしとなし翌年三月獨逸に許與したると同一條件を以て大連灣及旅順口の租借を清廷に要求し東清鐵道線路の一停車場より分岐して大連に至る支線敷設の權を得茲に大連は旅順と共に全く露國の占有に歸したり、蓋し大連は旅順の要港と共に早晩是を占領して東清鐵道の終點とせんと欲したる所なり唯彼は列强の反對を恐れ暫く手を下すを見合せしのみ實に獨逸の膠州灣占領は露國に求めて得ざる口實を與へたるものと云ふべし、其後彼は千八百九十九年(明治卅二年)七月卅日に至りてダルニー市創設の勅令を發し世界に對して之を自由港となす旨を宣言し鋭意之が經營に力め露國年來の宿望たる東洋經營の下に千八百萬留(一留は我一圓二錢八厘)を支出して市街の創設に着手し同年露國大藏省及東清鐵道會社をしてダルニー市街地及

左の二十五村落を買收せしめぬ、

老虎灘、傅家庄、棒棰島、轉山頭、炎兒溝、大嶺前、(以上老鐵灘郡)

北沙河口、南沙河口、三春柳、香爐礁、北甸子、臺山前、李家屯、下甸子、鄭家屯、王家屯、柳家屯、黃家屯、尙家屯、馬棚屯、馬家套、小岡子、北岡子、東家屯、(以上沙河口郡)

かく一市二郡に分ち三ヶ年間の設計着々進行して千九百二年(明治卅五年)更に北西の地に向ひ市區を百平方露里に擴張すべき計劃を以て標界を定めしも(此標界は今も尙存せり)未た成らざるに日露兩國の平和破れて干戈を以て相見るに至るや明治卅七年五月三十日全く我軍の占領する處とはなりぬ、爾來我國は兵燹破壞の後を修理して遼東守備軍司令部其他陸海軍一切の軍需品物資の大輸送地となし、別に又軍政署を設けて兒玉陸軍大將之れを統裁し、後西大將之に代り、翌三十八年二月十一日我紀元の佳節を以てダルニーを改めて大連と稱し、幾もなく神尾少將軍政委員として其行政區劃を大連金州旅順の三政區に分ち、各政區に軍政委員を置き更に金州を四管區旅順を二管區に分ち各管區に管區長を設け管區以下會長村長は特に公選の支那人を採用し土民をして其堵に安せしめ爾來秩序日に整頓すると共に同年六月廿三日軍政署を廢して新に民政署を設け金州旅順を以て

支署となし同時に臺灣總督府より石塚英藏氏を民政署長に任じて大に經營する處あらんとせり、

大連近傍の地形

滿洲の地圖を繙かば遼東半島が北滿洲より西南に延び我租借地の北界即ち甕子窩普蘭店に亘る線に至るや其幅員にはかに減じて狹隘となり尙進みて金州の近傍に至れば大連金州の二灣東西より相迫りて玆に一つの地峽を作り其最短距離は南山の最高點と大房身停車場との中間を過ぐる西北より東南に走る線にして其長さ僅かに一里、關東州中最狹の部分を作り、それより再び幅增加し以て西南西に擴がり老鐵山に終るを見ん即大連灣は關東州東岸中央部に位せる一灣にして東は大沽山半島、西は大連半島に包まれ灣內更に二個の小半島を斗出して以て三個の小灣入を作る東にある半島には支那の舊砲臺和尙島柳樹屯あり、西には固山、面白山等の丘陵及其東岸に黃山砲臺あり灣の東にありて金州地峽の最狹部を作るを紅涯套(又はHudson灣)といひ中部にあるを河套といひ、西にあるを潮水套(又はVictoria灣)といふ、此南岸に大連市あり、而して灣口の南北三山島は大沽山半島より南に幷び、大江山半島と北三山島との間に內水道、南北兩島の間に三山島水道をなす、

日本より大連に航するものは此二水道を取らずして、南三山島と大連半島との間を過ぎる思ふに灣の沿岸絶壁多くして背後は直ちに高丘に接するより察すれば、恐らく大連灣は一の陷沒よりなれるなるべく兩三山島の如きももと大沽山半島に連續せし一體の地なりしなるべし、

さて大連はこの灣の南岸にありて北は海上約三里を隔てゝ遙に柳樹屯を望み南方は樹木全くなき二百メートル内外の禿山を負へり即ち市街はこの山の北麓に建設せられしものにして其市街區域は南方禿山の裾より緩傾斜をなせる丘陵より北方海岸平地に及ぶ現今市街は北方平地上にありて、數丁を入れる丘陵上には間々苦力等の小屋を見るの外高きは一尺餘短かきは三四寸の雜草あるのみ

市の東部に至れば土地漸く南部の山丘に迫られ途に懸崖をなして海に終れども西は土地稍開闊にして小丘伏見臺を越えて小崗子の低平地に入るべく、其他又市街の小部落此等起伏の間に散在す、南方丘陵地即ち山麓に至れば到る處雨水の侵蝕を受けて天然濠をなし又雨水が低地に聚りて溜池を作れる處少からず、加ふるに土壤軟弱なれば小規模の山崩れを呈す、以上の如く大連の地は狹隘なるに加へ赭山を負ふが故に一定の水流と稱すべきものなく只市街の西部に南方の山中より出づる幅二三間の濁れる溪流ありて西公園を貫き大連市街と小崗子との界を流れて海に注ぐ、而してこの溪谷一帶の地には滿洲特有の楊柳楪の類繁茂し樹木に乏しき當地方にありては稍人目を惹くべし、又下流の低地にては河床稍廣くなり、所々に沼澤狀をなして水流の痕定かならず、

大連市街

大連の市街は元露國大藏大臣ウイッテの獻策に基き東清鐵道會社重役ケルベッチ技師の考案に成り南方の一部を除く外盡く完成して東西一里餘南北約廿五町に亘る市街の構造は頗る我内地の都邑と其趣を異にし所謂Central systemにして大廣場南廣場北廣場西廣場東廣場及吾妻橋廣場(此は名なし、今其廣場中に架せられたる橋によりて假に名づけしのみ)等の數個の圓形の廣場を設けこれより四方に街路を作ること恰も車輻の輪軸より射出せるが如くし、更に幾多の小街を以て之を連結せり、而して道路廣濶區劃整然として市街の清潔なること滿洲にては其比なく、且つ街路の兩側にはアカシヤ樹を移植せること尚東京市中の柳樹の如く人道には石或は煉瓦を畳みて往來を便にし家屋の構造は露西亞及支那の建築を折衷し或は之に加ふるに歐洲諸國の式を以てし就中鐵道以北の露西亞町と稱する

一帶の市街(即ち現今も軍用地區となせり)はもと露西亞が政廳區として其建築に最も力を用ゐたるが故に高樓巨閣各所に聳え歐米の市街を偲ばしむるものあり、されど大連が皇軍の壓迫を受け竟に露人の退却止むなきに至るや、遠近の馬賊一時に蜂起して其財產を掠奪し放火狼藉を極めたりしを以て今尙屋根拔け壁落ちたる空骸の家屋處々に散在して我軍占領當時の光景を追想せしむるものなきにあらず、さて全市街を分ちて左の三區となす

1. 軍用地區
2. 日本人居留地
3. 淸國人居留地

軍用地區は鐵道線路の北に位して軍衙の專用に屬し其他は鐵道線以南にありて商業地に充て當分日本人居留地區に淸國人の居住營業を許せり、而して軍用地區と商業地域との一劃線をなす鐵道線路上に架する一橋を日本橋と名け南廣場より盛部通及び寺內通を經て行かば大棧橋に至るべく、此の地區は商業地の中心をなす、之と相俟ちて大廣場より日本橋を經て、日本橋より海岸に直通せるを大山通となし、其他兒玉町、乃木町、東鄕通、山縣通等を初めとして美濃町、信濃町、伊勢町、飛彈

町、駿河町、越後町等我陸海軍武將の名と共に我國名を附し官民互に力を協せて其經營に全力を傾注し平和の樂土として其美果を收めんことを期せりこれより少しく詳細に渡りて記述せんに

一、波止場及船渠

廣く人口に膾炙せる大連の埠頭は商業地域の東北に沿ひ埋立と築堤とによりて實に天然を破壞したる人爲的の水劃にして、其規模の大なる何人と雖一驚を喫せざるを得ず、第一停車場の東北端より海中に突出せるものを第一波止場と稱し世の所謂大棧橋は即ち是なりこれ東淸鐵道會社專有の繫船場となせし者、其巾凡五十間長さ三百間六七千噸の船舶數隻を碇泊せしむるに足り棧橋上に數條の鐵道を敷設し起重機を備へ、貨物の運搬甚だ自在なり、又其東南に走れる埋立海岸約貳百間を隔てゝ第一波止場に並行して東北に向へるものを第二波止場と名け今尙工事中に屬す、この邊の水深十八呎乃至二十八呎ありと云ふ、更に此兩波止場の前方約四百間の海中に波止場に直角に走れる一大防波堤ありて其長さ九百有餘間あり其他海軍船渠附近に第三波止場、軍用地區の北海岸に二箇の波止場ありて並列す、東より數へて、第四波止場、第五波止場と稱す、又海軍防備隊構內には別に海軍

專用の棧橋あり、

以上數箇の棧橋の外海軍棧橋の北方に大小二個の船渠あり、大なるものは未だ竣工に至らずして放置せられ小なるものは長さ三百八十一呎巾四十五呎深さ廿一呎を有す排水には六時間を要し、其機械運轉の原動力は、近くの中央發電所より得といふ、

二、主要なる官衙、建築物、

兒玉通の北端なる民政署を始めとして關東州陸軍病院、野戰鐵道提理部、歩兵第六十三聯隊司令部、大連小學校、大連商品陳列館、海軍防備隊、第六臨時測候所、中央發電所、陸軍倉庫事務取扱所、關東州兵站殘務取扱所、警察署、野戰郵便局、正金銀行支店、大坂商船會社支店、大連公學堂、遼東新報社、歩兵第六十六聯隊營舍、本派本願寺出張所、農事試驗場、舊劇場等あり、而して大連小學校は民政署に隣りもと露國の教會堂たりしものにして占領後、內地人の子弟教育の爲めに設け大連公學堂は支那人の子弟教育に供するの目的を以て浪花町に設立せられしものなり、又舊劇場と稱するは西方郊外に屹立し其建築頗る宏壯にして露西亞時代に支那の豪商紀凰臺なるものが露人に寄贈せし所なりと傳ふ、今は歩兵第六十三聯隊の被服整理所に充つ、

三、公園

北公園、西公園、常磐公園(松原公園)の三公園あり、別に東公園と稱するは名のみにして未だ何等見るべきものなし、北公園は所謂露西亞町にありて其周圍僅に六町餘其規模小なれども繞らすに煉瓦塀を以てし、園內には多くの樹木花卉を植ゑ噴水を設け且其一部を劃して本派本願寺の設立にかゝる大連倶樂部なるものあり、讃書音樂其他の室內遊戲に、或は大弓に或はテニスに興を遣り技を戰はすを得べし、西公園は市の西南隅に位し天然の樹木、溪流を利用して其面積最も廣く園內の一部に檻を造りて猛虎を養ふか故に或は虎公園と稱せり、最も見るに足るべし、常磐公園は一に松原公園と稱し、極て狹小なる地域を劃す、全園蓋く松樹にして老幹枝を交へ松籟甚だ愛すべきも俗臭紛々清遊に値せず、

四、水道

大連市の缺點を擧げなば恐らく飲用水の不足は其一なるべし、目下市內に飲料水源なきを以て市の西方里餘の地を流るゝ墨蘭河に之を仰げり、該河畔の磧中に二個の井(直徑各廿一尺にて深さ一は二尺三寸一は五尺)を穿ち十五馬力を有する喞筒を据ゑ付て井中の水を吸ひ上げしめ、直徑約五寸の鐵管によりて之を大連兵站

病院第二分院附近の高地なる貯水池に壓送す而して貯水池よりは更に直徑三寸或は四寸の鐵管を以て全市に配水せり、そのために要する石炭は、一日二噸半にして送水量約千噸なりと云ふ、然れとも一年の降水量僅に六百粍内外に過ざざる寡雨の地たることと且樹なく草なき地方なるとを以て水源を得ること頗る難し、或は墨蘭河水源にして工を加へなば尚ほ有望なりと說くものあれども兎に角現在の有樣にては飲料水は寧ろ缺乏の狀態にありといふべく市中の諸處に井を穿ちて之が不足を補へるを見る、

大連の人口及生業

元來露國の經營に由りて寒村變じて一大市街となれる新開の地なるが故に在來の土民といふべきものなく全く移住民のみを以て成り我軍占領以來內地人の渡航頻繁なるに加へ支那人中にも滿漢人交々相加はり或は上海より、或は芝罘より或は遼陽奉天等の地方より、移住せしものもあれば或は寧波廣東等の南淸地方より渡航せしものなどもありて錯亂混合殆んど皆利によりて集散離合するが故に到底正確なる數字を以て人口を明示する事能はず、左に記するは民政署より配付せられたる關東州治概要に據りたるものなれども屆出のありし者のみを計算し

たる數にして現在住者の實數にあらずと云へり、況んや大連政區の人口なれば恐らく村落の人口をも含有すべく大連其ものゝ人口は知るに由なきなり

大連政區	戸數	人口													
	內地人	支那人	外國人	計	內地人			支那人			外國人		合計		
					男	女	計	男	女	計	男	女	男	女	計
一四六六	五六八	〇	六四三	三六八	二六〇八	一六六三	九八八	九八八	三三四〇	〇	〇	四〇三〇	二九四四	四九三四	

市民は云ふまでもなく皆商業に從事すれば工藝上何等の見るべきものなし、我商人は淸商に比すれば其數劣れども索より遼東半島中に於ては日本商戸の多きこと大連を以て最となす、

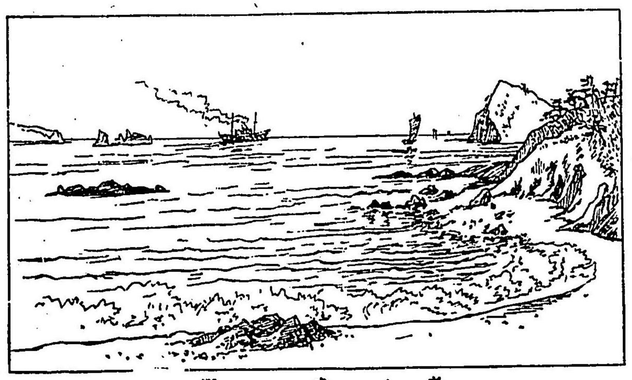
鐵嶺、奉天、遼陽、金州等に於ては料理店若しくは旅宿を業とするものゝ外我國人の商業に從事するもの甚だ稀なるに反しこゝには洋品店あり、雜貨店あり、金物商あり其他書肆、銀行、會社、運送店何々洋行何々支店と稱するもの監部通大山通に最も多く一度これ等の街衢に至る時は其便利さに於て毫も內地と異なることなし、然れども支那人の商戸また甚だ多く織物商陶器商雜貨商等頗る多くの物資を有して巧みに顧客をひけば未だ容易に蔑視すべからず而も此等の內には日本品又は日本に於て模造せる支那品を賣捌けるを見ること少なからず、されば大連に於て

さべ大取引は素より小賣に至るまで日本人は尙彼等と同等否寧ろ下位にありと云はざるべからず、

尙序に記載すべきは勞働者即ち苦力の多きことなり、市中到る所見ゆるは辮髮弊衣の苦力にして、或は車夫たり或は擔夫たり、其他工夫水汲み等あらゆる下等の勞働に從事して我勞働者を見ざるは初め大連の地を踏みて異樣に感ずる處なり、蓋し彼等は體力ありて且如何なる勞働をも辭することなく賃銀亦低廉なるが故に彼等を使役するは頗る便とする處なるべし、

交通路

陸路の交通の主要なるものは大連が依て以て立ち其生命を維持せる東清鐵道と西廣場より常磐橋を渡り伏見臺を過ぎて西南旅順口に通ずる道路あるのみ東清鐵道は露國が軍事上の目的のために敷設せしこと素よりなりと雖も、大連を自由港とし是をして全滿洲に出入する物資の門戸たらしめんとせしこと素より論なし大棧橋上に延長して貨物を受授し、第一第二の停車場ありて共に旅客貨物を取扱ふ、其他市の東西兩端より南方山丘を横ぎりて海岸に通ずる二條の立派なる道



老虎灘

路あれどもこは重に露國時代に彼國人が避暑地として選定せる老虎灘に至るが爲めに開ける新道に過ぎずして直接市の產業に關係あるものにあらず海路の交通には日本郵船會社の定期航路ありて神戸、門司、長崎、釜山、仁川、芝罘、旅順、太沽を連絡し、大坂商船會社亦定期航路を開きて大連、神戸、門司、旅順の間を連結せり、

大連の氣候

氣候の如何は短日の旅行によりて卜知せらるべきにあらずして、必や長日月の觀測統計を俟たざるべからず、因て今海軍防備隊構內の第六臨時測候所に就きて問ひ合せたるものを左に掲ぐ、然るに該測候所は一昨卅七年九月以來開始せられ觀測の日尙淺きを以て一ヶ年間の統計を得たるは昨三十八年のみなり、されど何れ

の地と雖其地特有の氣象ありて其特徴は必ず觀測の結果に多少現はれ來るが故に左の表によりて大連附近に於ける氣象の一斑を推知するは强ち難きにあらざるべし、

大連氣象一班

明治卅七年

北緯 38°56′　　東經 121°36′

月	氣温（攝氏） 平均	平均 最高	平均 最低	平均 較差	極 最高	極 日	極 最低	極 日	降水量（粍） 最多 量	最多 日	風 平均速度	風 方向
十一月	11.9	16.1	8.2	7.9	20.0	2	1.7	30	46.5	19	5.8	NW
十二月	5.3	9.6	1.1	8.5	16.6	8	−6.6	30	2.9	12	7.1	NW
	1.4	2.8	−5.4	8.2	12.2	6	−11.7	11	2.4	14	6.7	NW
明治三十八年												
一月	−1.6	2.9	−5.5	8.4	9.6	4	−16.1	30	8.4	26	4.8	NW
二月	−5.1	−1.6	−8.5	6.7	4.7	19	−14.9	9	1.8	23	6.6	NW
三月	2.2	6.4	−1.7	8.1	11.5	21	−8.0	1	20.7	30	5.2	NW
四月	7.8	11.8	4.7	7.1	18.0	26	0.8	2	23.4	30	0.8	NW
五月	15.0	19.6	11.3	8.3	25.5	28	6.1	8	45.9	13	7.4	SW
六月	20.2	25.0	16.9	8.1	29.9	28	12.8	1	37.3	10	5.2	SE
七月	23.0	26.3	20.6	5.7	31.5	31	16.7	10	164.4	22	5.1	SE
八月	24.3	28.1	21.0	7.0	33.2	7	18.9	19	89.4	31	4.2	SE
九月	20.2	23.7	16.7	7.0	28.9	5	9.5	30	95.9	1	5.4	NW
十月	13.6	17.8	4.7	8.1	23.3	7	1.5	27	24.6	12	5.7	NW
十一月	5.6	9.8	1.8	8.0	17.5	1	−4.1	4	12.2	12	7.2	NW
十二月	−0.1	3.4	−3.2	6.6	12.1	5	−11.1	20	23.5	6	7.1	NW

明治三十九年										
一月	−5.0	−8.5	0.3	8	-16.1	20	13.0	5.7	30	5.7
二月	−6.5	−10.3	7.7	25	-17.5	13	39.4	30.2	8	5.8
三月	2.6	−0.7	4.0	17	−6.8	6	5.7	3.8	4	7.3
四月	10.2	14.9	7.2	19	0.7	3	16.0	14.2	21	6.6
五月	15.3	20.0	9.0	—	—	—	38.0	—	—	5.3
六月	20.1	24.3	17.1	30	13.8	1	50.0	43.7	22	5.2
七月	23.9	27.3	21.2	15	18.9	2	172.9	62.4	7	4.1

右の表につきて見るに氣温の最も低きは二月にして昨三十八年には平均温度零下五度一、本年にありては零下六度を示せり、今之を東京の同月の平均温度三度六に比すれば十度一の較差ありて、我本州の北端背森以南の地に於ては絶えて見ざる低温なり、又最高なるは八月にして卅八年には平均温度廿四度を示し、東京の廿五度七に比較すれば低温なること一度四なりとす、

次に降水量に就きて見れば七月に最多にして昨卅八年にありては百六十四粍四本年にありては百七十二粍三なり、然るに七月以外の月にありては其半數にも達せず、ことに六月に於て五十粍以下ありしものが驟かに百五十粍が上に激增し、七月を過き八月以後に至れば再ひ其量を減ずるは著しき事實なりとす、而して三十八年にありては全年を通じて降水總量五百四十七粍五に過ぎずして從來我國の最寡雨の地として知られたる網走に於ける七百五十粍に比して尚百六十八粍の差

あるは特に注意すべき所なるべし、

風向に就ては一月より四月までは大抵北若くは北西の方向を取り、氣候の温暖となるに從ひ南西より南東に方向を轉じ、九月に至りて再び北西の風となり、西北方に控ふる大陸内地の氣壓の變化に左右せらるゝの傾向あるを見るを得べし、

尙本年二月第六臨時測候所の報告文は大連の氣象に就きて要點を知るに足るものなれば左に掲ぐ

明治卅八年中觀測シタル大連ノ氣象ハ大略前記(別冊あり)ノ如ク雨雪少ク乾燥ニシテ、天氣ノ良好ナルコト本邦中其比ヲ見ズ、夏季ハ本邦同緯度ノ地ニ比シ温暖ニ、冬季ハ寒冷ナリト雖、狹小ナル半島ナルガ爲メ晝夜寒温ノ差常ニ甚シカラズ、嚴寒ニ際シテハ凜烈皮膚ニ迫リ、液類概チ凍結シ灣内幾部分氷結シテ船舶荷物ノ陸揚ゲ等不便ヲ感ズルアリト雖、偶淺薄ナル氣壓北清地方ニ發現シ高部位ノ當地以南ニ來ルアランカ、頗ル温和ニシテ兒童の氷雪上ニ嬉々タルヲ見ル又稀ナラズ、蓋シ當地方乾燥寡雨ニシテ天氣ノ良好ナルハ利害共ニ研究ヲ要スベキ事項ナラン乎云々

次に本年冬期に於ける大連灣結氷の摸樣を聞くに本年一月十八日氷結を始め同

卅日大部溶解し、翌三十一日再び氷結し始め、二月廿一日に至りて漸く解け、同廿七日全く解氷するに至れりと云、不凍港と稱せられたる大連灣に此事あるは頗る奇異なりと雖、或人は此を説明して棧橋、防波堤などによりて潮流の運動を沮害せしゆゑなりと云へり。

旅順口

七月二十一日、數日前より降り續きし霖雨やみて遼東の蒼天鮮かに霽れわたりしが炎暑甚し、午前十時一行大連を辭して旅順口に向ふ、滿洲鐵道は客車數少なければ戰時軍馬を運びし貨車を供給せらる、一貨車十七人狹くして身を横ふるに足らず、加ふるに馬の遺臭頻りに來りて其苦しさ譬ふるに物なし、

大連を發し流車は西に向ひて走り、其速力未だ甚大せざる内大連の西なる支那市街小崗子を通過して海岸に出づ、暫くにして流車は殆ど北に向ひ、臭水屯附近より全く丘陵の間に入りて、所々に土塀を廻らせる支那特有の小家屋あるの外は一帶倭き玉蜀黍の畑のみ、稍東に向ひて進み、やがて南關嶺停車場に着す、附近耕地遠く開け玉蜀黍高粱一面に植ゑ付けらる、こは元露國時代四等停車場たりしものにし

て附近の村落は南三十里堡といふ、南關嶺と稱する村落は尙此東北に位す、鐵道は凡て單線なれば旅順より奉天方面に向ふ列車の着するを待ちて後發す、西に向つて走り暫時にして右に金州灣を見、左に甚だしく浸融せられたる圓形の禿山重疊し、近く鐵路附近の切り下げたる壁は土壤柔軟なれば水蝕作用甚だしく、是を受けたる地形の小模型を見るが如し、鐵道は南大山小半島の南方低地に入りて營城子停車場に着き、更に西南下して愈々內地に入り、長嶺子停車場を過ぎて後旅順港內に注ぐ龍河に浴ひて下る、旅順口附近に至りては松樹山二龍山等數多の砲壘の跡一時に左方に見え、龍河の幅頓に廣まれる所、白玉山西麓の旅順停車場に達す、時に午後三時、停車場の西龍河口に架せる日本橋を渡り、西港の北岸を西にゆくこと三十町許にして新市街なる舊海軍病院に至る、夏の日脚まだ高ければ、茲に輕裝して、西太陽溝、二百三高地、案子山等の諸砲臺を見、日暮旅順灣內の佳景を眺めつゝ宿舍に歸りしは正に午後六時、二百三高地にては陸軍士官の新戰場の說明ありたり。

翌七月廿二日、晴天をよろこび午前六時新市街なる宿舍を發して東に向ひ、停車場の南を經て白玉山の南麓を廻り、舊市街朝日町に達す、右は漫々たる港灣に老虎尾半島突出し來りて、灣內を兩分す、岸に近くギリヤークの沈沒せるを見たり、鎭守府

構內に入りて東港を見る、乾船渠中には敵艦アムール倘轉覆の儘橫はれり、殆ど東港の北及び東を經て港口の左岸なる黃金山砲臺に上る、港口港內は素より旅順背面の諸山悉く望見すべし、こゝにて要塞砲兵士官の實地指導あり、午前十時黃金山を辭して山を下り戰利品陳列場に至る、旅順要塞戰を紀念せんがために造れる所にして、當時露軍が使用せし軍器、軍服、糧食等の標本を集め、又種々精巧なる機械類をも藏す、近傍には鹿柴、散兵壕其他凡ての軍事的工事の模型を作り、吾人門外漢には好個の說明者たりき、入口に架せし分捕品にて組織せし小橋は其趣向甚だ愛すべく、場內にある、東鷄冠山北砲臺及び二龍山の現狀及び戰前の原狀とを示せる模型は實に珍とするに足る、此處にても亦士官の說明ありたり、

午後一時陳列所を出でゝ敎場溝(旅順舊市街の接續村)を過ぎ、東鷄冠山及び同北砲臺を右に見、進みて望臺に至る、望臺は實に鐵路以東の二百三高地とも云ふべき者にして、是に上れば鐵路以東の各砲臺堡壘は素より、遠く大孤山小孤山をも望見すべく、王家屯、東八里庄、西八里庄、龍眼、水師營等の村落亦眼下にあり、東鷄冠山北砲臺、盤龍山、二龍山、松樹山等の砲臺は要するに望臺の北麓にある裾をなせる丘陵上に築かれたるものゝみ、望臺の我手に歸せしは實に旅順開城の前日なりしといふ、是

其北面に東鷄冠山以下の諸砲臺ありて是を守備せしによる、聞く包圍の初期に當りて一度び是を占領し得しが、後續部隊なかりししと、其位置頗る敵地に深く入り居れば是を確實に保つ能はず、遂に之を放棄して後再び得る能はずして開城前二日に及びしなりと、今山嶺に海軍砲一門を載せあり、是は露軍の使用せし者なるが高距餘りに大なるがため、死角大に、附近の諸砲臺戰には効少なかりしといふ、こゝにても士官より此方面の戰狀を聞きて解隊し、宿舍に向ふ、時に一行中には或は東鷄冠山北砲臺に或は盤龍山、水師營等を跋渉し或は舊市街を逼歷せし健脚家もありき、

以下少しく旅順の過去と現在とを述べしめよ、回顧すれば正に十年の昔、日清戰役に當り、我は同胞幾多の身命を損して、遼東半島を攻略し、山東方面と呼應して、更に長驅北京に進まんとせしが、明治二十八年四月十七日下關に於て媾和本條約の成るに及び、我は遼東半島に於ける營口海城鳳凰城安平河口(鴨綠江岸)を連ねたる線以南の地及び臺灣澎湖島を得たり、これ戰勝者當然の權利にして清國の既に認めし所、而るに露國は此條約が其極東政策を妨ぐる事大ならんことを恐れ、ために主唱となり、獨佛兩國と共に日本の遼東占有は極東の平和を不安ならしむる者とな

し、來つて吾に其還附を忠言せり、當時我輿論頗る沸騰せしと雖も、我は大戰の後を受け、彼は世界の一等國なり、寛仁大度におはします我天皇陛下は三國の忠言を容れさせ給ひ、東洋の平和を尊重して同年十一月八日遼東還附の大詔を發せさせ給ひぬ、これ露國の憎むべき慣用手段にして其後一躍遼東半島を占領するの素地を作りしものなり、爾來十年の間臥薪嘗膽垢を含み辱を忍びて、しばし蟄屈蟄伏し以て時の熟するを待ちたり、而るに滿洲問題及び韓國問題に於て露國と遂に戰端を開くに當りてや、我軍は前後九ヶ月間の惡戰によりて、この半島を再び我有たらしめぬ、是實に日本帝國の小光榮といふべし、

日露開戰前旅順口は大連と共に露國の租借地となりしこと已に大連の條に於て述べたり、明治三十一年の旅順大連租借條約は明かに旅順を軍港たらしむる目的を示せる者にして、爾來露國極東經營の一中心となり、是によりて露國は黃海岸に年來の宿望たりし一不凍港を得しなり、露國は舊堡壘の趾に就て盛に改築修理を加へ、遂に大成して極東の金城鐵壁となし、靑泥窪の商港と共に鐵道最南の終點となす、明治三十三年露國は海底電線を芝罘に通じて直ちに歐洲と連絡せしめ極東の要地となしき

旅順口は金州半島の西南端に位し芝罘と相距ること七十四海里威海衛よりは八十九海里あり長白山脈の連嶂たる老鐵山脈は半島の中央に連亘し高さ四百六十一米なる老鐵山に於て其跡を沒し其餘波海中に點々として廟島列島をなし山東省登州半島と相俟つて渤海灣の關門を成す旅順口方面の地質は大孤山層にして硅岩砂岩石灰岩片麻岩等よりなれり中にも硅岩最も多くして全山悉く是を以て成れるものあり これらの山には至る所に坑路堀られしまゝに殘り居りしは地質を檢するに都合よく又激戰我軍の苦戰の樣も知らる旅順口の地勢を見るに港口の兩側には東に黃金山西に老虎尾半島ありて內部に窪地をなし淺き水を湛えて港をなす而して此窪地は東西に長しと雖も停車場の西を流るゝ龍河によりて背面を圍繞せる山壁を細長く破り水師營方面の低地と連絡せり而して龍河口の東即ち停車場の東には白玉山ありて其脈は東北に延びて望臺となり東に東南に走り鮮生角に至りて海に沒し以て旅順舊市街を有する平地を包む かく連亘せる百米前後の小山脈の外側は即ち松樹山三龍山盤龍山東鷄冠山白銀山等の砲臺あり し所なり鮮生角と黃金山との間は高地の連絡するものなく內側平地が緩慢なる傾斜をなして高まり來る其高度頗る小なりと雖も海岸は多くは絕壁をなし間

々幅狹き沙濱を有するのみ龍河以西は以東の如く平地を包む墻壁なしと雖も西北靈山(所謂三〇三高地として有名なるもの)より東は龍河に至り南は老鐵山に至る迄は丘陵的禿山所々に點在し其間の小谿谷には間々水の流るゝあり而して其山々の險要なるものには素より砲壘を築きて旅順口西方面の防備となせるものなり新市街は此內側西港に面する所元太陽溝と稱せし所にありて東方停車場との間約一里あり西港が西南に延びて其極まる所は平地となりて太陽溝方面と連り更に約南に廣がりて老鐵山の北城頭山の西に於て狹長なる低地をなし外洋黃海々岸と連なる この黃海岸は有名なる鳩灣なり老鐵山の東西港と外洋との境をなす地は亦割合に高く鷄冠山饅頭山等の砲臺を戴き東北に延びて港口を黃金山と相扼し其餘波狹く低く北々東に延びて老虎尾半島をなし以て西港を包む かく旅順口は四面重疊たる山峰を以て包まるゝが故に如何なる大風の時と雖も港內頗る靜穩なり港內は東西に大別せらる東港は黃金山の背面に位し軍港埠頭たる所にして艦船十餘隻を繫ぐを得べく其繫船地は長さ一千四百七十六尺幅九百八十四尺深さは滿潮の時三十六呎六吋干潮には三十五呎なりと船渠は東港の東北角にあり西港は即ち老虎尾半島の西にして東港に比すれば水面甚だ廣し と

雖ども海底稍々淺し、されど尙ほ優に十數艘の大船巨舶を碇泊せしめ得べし、然れども現時は毫も浚渫することなく、占領以來自然の儘に放棄し置きたることなれば、巡洋艦以上の巨艦は出入碇繫に困難を感ずるなりとぞ元來旅順口は渤海の咽喉を扼し、黃海の頭部を占め、露國の軍港として極東無上の好位置を占むるものなれども、其缺點は港內狹隘なるがため、一時に多數の艦船を出入し、若しくは繫ぎかたきにあり、されば露國はこの地を占領するや、海軍廳に屬する浚渫船は該港の西部に區域を定めて浚渫及び埋立を設計し、西港を遠く西南方に擴張して城頭山(優頭山の西南にあり)と老鐵山との間なる狹き低地を開鑿して西港より直ちに外洋に通せしめんとしたり、

旅順口舊市街は東港と白玉山との間にあり、陸海軍用地に接近して、區域甚だ狹隘なるが故に、將來更らに之を擴張するの餘地なし、露國は明治三十四年新市街を西港の北岸に設計し、歐人居住地と支那居住地とを區別し、支那人は不便なる一隅に移されたり、かくて新設計の市街は爾來三年に亘りて明治三十六年には既に壯麗の市區の形成し、背泥窪の新市街と相對し露國式市街の雙觀を成しぬ、日露戰爭前明治三十五年八月の調査によれば、旅順在住の日本人凡そ五百五十人、內男三百三

十人女二百五十五人、歐米人約三千人、支那人の舊市街に住するもの凡そ二萬五千人、新市街に住するもの亦五千人、合計三萬餘人他に韓國人亦二百三十人あり、日本人の該地に住せし者の職業は會社出張所、雜貨商店、金銀細工職、洗濯業、旅宿、理髮業、裁縫業、貸席、雜業、請負業計八十戶なりき、清國時代に於ける市街は城子東街、城西街、東新街、中新街、西新街、の五大部に分たれ露領となるや露語に改稱せられ最後に日本領となりては陸海軍の名譽を永く紀念せんため、舊市街には、磐手町、淺間町、高砂町、笠置町、秋津洲町、松島町、初瀨町、朝日町、乃木町、大島町、又新市街には橫須賀町、明治町、春日町、日進町、吉野町、大迫町等の軍艦町將軍町續々として出來、中央にある大公園は後樂園と稱せり、旅順政區(關東州を大連旅順金州の三政區に分かてるものゝ一)の戶口は余等大連上陸の際同民政署より與へられたる「關東州治概要」によれば實に左の如し、

國別	戶數	人口 男	人口 女	人口 計
日本	六七五	一、三三〇	九一八	二、二四九
支那	一二、七一九	四六、〇九二	三二、八二六	七八、九一八

外國	一七	二六	四	三〇
計	一三、四一一	四七、四四九	三三、七四八	八一、一九七

而して旅順市街の戸口は正確なる調査を聞くを得ざりしも、日本人二千人清國人三萬人前後なるべしといふ、明治三十八年六月以來軍政署は撤せられ關東州民政署に因りて行政せらる關東州を三分して大連、旅順、金州の三政區に別ち大連政區は本署區となし、大連は本署にして、金州旅順は其支署を設けらる

下級行政は市街地に公議會あり、村落には會に會長あり、村に村長あり、日本內地人子弟教育のためには旅順に尋常高等小學校を設け、支那人子弟教育のためには公學堂の設けあり、

旅順政區內の生業につきてのべんに農業は旅順の攻圍戰が長期に而も激烈なりしだけ管內の耕作地並びに農家の被害も夥しかりき中にも旅順近傍にて最も耕地の廣大なる水師營一帶の地方の如きは其被害最も甚だしく當時四方に難を避けし農民は耕作用器具は勿論種子に至るまで充分に是を始末する遑なかりしため器具の多くは破壞せられ或は紛失して平和の今日に至るも猶これが收拾甚だ

難し昨春の如き播種時期に切迫し俄かに狼狽して乙山東方面に人を派し必要の種子を買ひ器具を需むるなど農事に非常なる困難を來せしといふ、是に於てか我が民政支署にては今後管內の各會長及び村長等と勸誘奬勵して試作場を設け內外各地より種子苗木等を輸入して大に農事の改良發達を計らんとせり、管內農地の最も多きは營城子、山淵堡(土城子附近及び水師營附近等なり作物は主として高粱麥子、黍、米等の雜穀を始め白菜、葱、大根、菜、豆類等なり

牧畜事業は日清戰爭以後著しく發達せしが日露戰爭中軍需品運搬のため車夫馬丁は意外の利益を得たれば、是を以て田圃を購ひ耕作に從事し傍ら牛馬騾驢其他家畜を飼養するもの非常に多くなりしといふ

林業は露國時代に處々に於て試驗的に經營せし形跡あり、即ち其殖樹の配合は多くは山腹に雜木を植え七合目以上は松柏の二種を混植せり、現時は我國の經營としてみるにこれを三期に分ち、第一期事業として昨秋內地產の赤松黑松等二十萬本を植ゑ付け第二期事業としては公衆の衛生と水源の涵養とを目的として水源地涵養境界林をつくり、第三期事業として市の美觀と公衆衛生とのため舊市街全體に花木三千八百本を植付けたりといふ、客年來民政支署にて植付けし樹木の總

數は二十萬本以上に達し其植付面積は約五十町歩餘なりといふ商業としては特記すべきものなし露國時代即ち明治三十六年頃は日本雜貨店が二十二三軒もありて中に神戸の協信會長崎の吉田洋行大坂の渡邊洋行など小賣丈けにて一年の賣上高が二百萬圓內外にのぼり其他の商店も年々十一萬圓位の賣り上げはありしとのことなり戰後關東總督府は開かれ外國人は往來はげしくなり交通運輸の進歩すると共に商業は益々發展すべし、きくならく日本人は新開地ならばとて濡手で粟的に暴利を貪り信用を失し、華主を失するのみならず稍もすれば日本人相互の取引さへも薄らぐに至ることありといふ、其點に至りては流石支那人は拔目なく信用を重んじ同人間の取引には少しの掛直もなければ金錢上の收支非常に正確に支拂期日を失することは彼等の最も耻辱とする所なれば、隨つて一般の信用を博す、是等は我商人の大いに注目すべき點なるべし、

氣候は一月二月の空にもさまでの寒さは感せず煖爐を焚かねば凌がれぬ程にもあらず大連よりは慥かに華氏の四五度は暖く滿洲の避寒地として第一位を占むる所なり余等の一行こゝにありしは七月の末にして暑さは內地とかはるところもなかりしが深夜に至れば氣溫俄に低下して日朝に及びたりき、八、九兩月は炎暑

の盛りにして折々雷鳴と共に驟雨盆を覆すが如く氣も心もすがすがしく、十一月は小春日和の天氣續くこと多しといふ要するに一般に內地にて想像するよりも寒暑ともに凌ぎ易きが如し、但到る處崩壞せる土砂よりなり、而も植物に乏しければ烈風のために黃塵萬丈の不衛生地となること四五月の候間々是ありといふ。

旅順口は露國極東の根據地として金城鐵壁と謳はれ、世界稀有の大戰爭は約九ケ月間この舞臺の上に演ぜられたり、過ぎし日清戰爭の時は半日にして陷落し、ナポレオン三世のセダン城も一日にして降り、難攻不落の聞えあるメッツ城も七旬にして普軍の手に歸せしかば是等の先例に徵してか我が國人は遲くとも七八月頃にはなどゝ豫期せしは旅順の要塞の如何なるものなるかを知らずして餘りに樂天的に見しがためなり、旅順口陷落に至るまでの戰史を概說せんに第一軍が韓國を經て、露軍を追ひ三十七年五月一日九連城を陷れ尙敵を追擊せるに乘じて我第二軍は突如として遼東半島に現はれたり、露國の勢力の韓國にありし者は是によりて掃蕩せられたれども南滿洲に於ける露國の勢力は東清鐵道と相終始し遠く金州半島の南端に及べり、もし滿洲の野より全く是を斥けんとせば、今我第一軍が九連城より更に北進して遼陽に迫るに先ち、別に金州半島の南端より一歩一歩に是

を追ひて第一軍と遼陽附近に會合せざるべからず、されど記憶せよ、其南端旅順口は實に露國が不拔の天險と恃める所、其海陸の防備は日清戰爭當時の夫と比すべくもあらず、故に茲に連續せる哈爾賓旅順口間の一地點に於て是を遮斷し、一は以て第一軍と相應じて北進せしめ、一は以て南端の一小區域を破壞せしめんとするは實に止むを得ざる也、而して此の南端の一小區域は其防備の嚴なりし丈其天險の侵すべからざりし丈戰鬪は猛烈となり殘酷となり、遂に史上稀に見るの惡戰を演せしめぬ。

明治三十七年五月二十六日奥大將の率ゐる第三軍が南山の險要を陷れたるは實に旅順口背面に於ける惡戰の冒頭たりしなり、六月上旬乃木大將が攻圍軍司令官として奥大將に代り愈々旅順背面に迫らんとし、傍ら東鄕聯合艦隊司令長官が六月二十六日東方貌子窩より西普蘭店に至る直線以南の遼東海面一帶の直接封鎖を宣言すると共に旅順要塞は全く我陸海軍包圍の中に陷れり、攻圍軍は着々攻擊準備をなし軍を進めて其防禦第一第二の線を破りて七月末には旅順背面の直接防禦線に迫りて、其目的を達せんとせり八月初り敵は水師營より八里庄に至る間に盛に防禦工事を施し又大孤山小孤山(右翼軍方面)に據り大に我が攻擊準備作業を妨ぐ

我れは之れを擊攘するに決し八月七日薄暮より之れを攻め八日遂に山上の敵を追ひ大孤山を占領し翌九日小孤山をも取る、この際我海軍砲隊は旅順市街を攻擊して大功を奏し、七日には市内火災を起し九日には敵艦レトヰサンに大損害を與へ汽船一雙を擊沈せり當時海軍も亦敵を港内に蟄伏せしめて復出動する能はざらしめ陸軍は已に背面に迫り來りて旅順の命は已に定まれり、早晩彼等は出でゝ我軍門に降るか若くは要塞と其死を共にせざるべからず參謀總長山縣元帥は滿洲軍總司令官大山元帥に對し旅順要塞内非戰鬪員救助の聖旨を傳ふ更に進みて乃木大將は參謀山岡砲兵少佐を軍使とし聖旨幷に勸降書を敵の要塞參謀長に傳達せしむ敵は翌日軍使を以て聖旨に應じ難く又降伏の勸を拒絶する旨を傳ふ、是等の事素より人命を尊重せんとしての事、敵は之に應ずる能はざるは即我軍の精鋭の度を試みんとするものか、茲に至て總攻擊は始まりぬ、

八月十九日乃木將軍は鳳凰山東南の高地(水師營の東)に至りて全軍を指揮し總攻擊を開始しぬ、而してこは全く不成功に終りて第一回と稱せらるゝ非運にあへり、右翼隊は百七十四米高地(二百三高地の北方)の敵の左翼を脅威し三里橋西北高地及大平溝東南其他を占領し、中央隊は八里庄五家房北方の高地より盤龍山東砲臺

を强襲せしも得ず、左翼隊は東鷄冠山北砲臺に突擊せしも敵の猛射に遇ひ遂に目的を達せず廿二日中央隊の一小部隊は盤龍山砲臺に近づき其大部を占領し次で盤龍山西砲臺をも占領す、かくの如くにして此總攻擊は盤龍山東西砲臺を占領し得しのみ、かくの如き奇襲によりては到達旅順を陷る能はざるを知り第二回總攻擊は策を變じて正攻法を用ゐんとす、

第二回總攻擊

第二回には我軍は正攻法を用ひ各隊は歩工兵を併用し日夜電光形の坑道を開く諸方面の準備總べて成りしかば九月十九日を以て總攻擊を初む、二百三高地は旅順市街の西北にありて高さ衆を抜き山頂に立たば旅順口は一眸の中に在り、若し我之を占領せんか、他の諸要塞を制し得べく、又市街港内の攻擊に多大の便を得べし、されば旅順の運命を制する一にこの高地にありといふべし、故に敵が是を死守せんとするは勿論、其守備甚だ嚴、

第二回總攻擊は主として此高地を占領して攻戰上多大の便を得んとせりされば攻圍軍は右翼隊をして二百三高地及び海鼠山並びに水師營南方の保壘に中央隊をしてクロパトキン砲臺に向はしめ、左翼隊をして是れが牽制運動に任せしめたり右翼隊の最右翼は、この二百三高地に向ひ十九日より二十二日に至る間是を攻擊せしも遂に拔く能はず、一時攻擊を中止するの止むを得ざるに至れり、中央隊は十九日クロパトキン砲臺に向ひ、砲壘の胸墻掩蓋を殆んど破壞し、遂にこれを占領す、茲に於て大衆二百三高地に向ひ三面合擊をなし、其奪取を期せしが、敵は盛に增援隊を出し、頑强に抵抗し、西南角に於ては爆藥を投じ、石を飛ばし爭鬪激烈を極めしが遂に目的を達する能はずして二十二日攻擊は中止せられぬ、時に左翼隊は唯牽制運動を以て其任とせしかば死傷極めて少し、右翼隊は二千四百餘人中央隊は千餘人の死傷者を出せり、されどこれが爲めに海鼠山を得て二百三高地に對し、スラッセル砲臺を占領して松樹山砲臺に對し琵琶山を得て二龍山に對するを得且つ旅順の水源を閉塞し得たる功は小なりといふべからず、

我軍は攻擊を中止するや直ちに各砲臺に向つて坑道作業に從事せり、其最も主なる者は三にして、東鷄冠山北砲臺、二龍山砲臺及二百三高地に向ふ者即ち是なり、十月廿六日松樹山二龍山東鷄冠山の三砲臺を砲擊し尙諸砲臺に向つて時々破壞を試むると共に作業に從事し、益々其歩を進め十一月廿六日以後第三回總攻擊となり、全線一齊に突擊を開始せり、目的は松樹山二龍山東鷄冠山を奪取して望臺一帶

の高地を攻略するに在り即ち右翼隊の左翼をして松樹山を中央隊をして二龍山、左翼隊をして東鶏冠山を奪取せしめんとし、二十六日の天明と共に攻城砲野戰砲は各方面より發射せられ突擊躍進日沒に至るもその堅固なると敵の抵抗頑强なるとにより遂に目的を達すること能はず、翌二十七日復未明より更に數回の攻擊を企てしも唯僅かに一小部分の堡壘を奪取せしに止まるのみ、是に於て軍司令官は一時正面の攻擊を中止し、更に右翼隊に令を傳へて二百三高地を攻略すべしと命ず右翼隊は部署を定めて二百三高地及赤阪山を攻擊せんとし、我重輕砲は一齊に二百三高地に砲火を集中せしかば爲めに同高地は全く砲煙のために蔽はるゝれど敵の防備極めて堅くして午後三時尚未だ其半を破ること能はず、軍司令官は此日午後六時を期し二百三高地を奪取せんことを希望せしかば乃ち部署を定め西南、中央、西北の三坑道より漸進せしも、午後六時未だ目的を達する能はず、七時丼分第一回の突擊隊は敵の機關砲に搖射せられ且つ大陽溝鳴潮嘴及老鐵山よりの猛火の爲め殆ど全滅し舊陣地に歸りしもの僅かに十人、次に九時三十分第二回突擊を行ひ敵の塹壕に達するを得たれども而も前に同じき非運に陷る、

二十八日黎明軍司令官は新鋭の兵士を增加せしかば午前八時再ひ總攻擊を始む、

數回の突擊の後遂に西南嶺(二百三高地は峰頭二となり、西南嶺は東北嶺に比し稍低し)に達し更に鞍部に向ひて前進せしが、死屍累々として歩行頗る難止むなくこれを踏んで例の爆彈と石とを投じ勇戰格鬪す、爲めに隊は殆ど全滅に歸せり赤坂山に向ひし部隊も數回の突擊何れも効なく徒らに死傷を增すのみ二十九日西南角には齋藤少將を東北角に吉田少將を配し三十日午前十時より更に突擊を實行せしが赤坂山の側射に遇ひて進む能はずして退く我兵斃るゝもの多し、東北角に向ひし村上大佐は殘餘の兵約百人を指揮し突進せしが午後九時竟に峒頂に達す右翼隊即ち西南角に向ひし者も前進し南北相呼應し一大混戰を生じ彼我の損傷殆んど算すべからずして占領に至らず、翌日、一旦是を占領せしが敵の逆襲に遇ひ將卒相次で斃れ未だ此の占領を確實にする能はず從て赤坂山未だ陷らず村上隊はきはめて苦戰に陷り殘りしは特務曹長一人と兵僅かに四十人のみ翌二日東北角は再びこれを敵手に委するの止むなきに至りしが西南角は辛うじて是を保つを得たり二百三高地は初め右縱隊の攻擊範圍に屬せしが其價値愈大なるを以て十二月三日より中央隊の一部を以て是に加へ東北方より援助せしむ十二月五日激戰の後西南角全部を奪取せしが敵は依然東北角に據りて退かず、されど大部分

は已に我手中にあり激戰三十分にして全く東北角を占領し茲に二百三高地全部を得たりとつて赤坂山の敵は戰はずして退く我軍は直ちに是に觀測所を設け砲兵陣地に電話を以て射的物の位置と砲擊の効果とを報じ以て埋伏せる旅順艦隊を屠らしむ命中彈數合計二百四十八發戰鬪艦五隻巡洋艦二隻其他砲艦運送船擧げて沈沒又は破壞せらる。

二百三高地に全力を注ぎし間は左翼軍及中央軍は唯其牽制をなすのみなりしが今や全く是を得るに及び將に破壞作用を試みんとせし東鷄冠山北砲臺は敵自ら胸壁に爆發を行ひぬ敵は是によりて我を妨げんとせしが其爆發大に過ぎて全く是を破壞し去るに及び(今も此破壞の痕は見らる)我は突擊に移り十二月十八日午後七時頃蛟島中將は全豫備隊を戰列に加はらしめ穹窖内に前進し最後の大突擊を行ひ午後十一時五十分全く同砲臺を占領す此後續々小砲臺は占領せられ廿八日午前十時二龍山砲臺正面胸墻の大爆發と共に突擊し是を占領し卅一日午前十時より松樹山砲臺の胸墻爆發と共に突擊を實施し十一時砲臺の全部を占領す一月一日中央及左翼隊は午前九時より望臺に向ひ攻擊し全くこれを占領せり難攻不落の旅順要塞も我軍の爲め其圍廓悉く破られ防ぐに道なきに至る守將ステッセル最早戰ふ能はざるを知り一月一日午後九時書を乃木將軍に送つて曰く

交戰地城全般の形勢を考察するに今後に於ける旅順口の抵抗は不要なり依つて無益に人命を損せざるため予は開城に付き談判せんことを望む……下略(明治三十八年一月二日官報號外による)

と茲に於て慘憺たる旅順要塞戰は前後九ヶ月にして全く終りを告げ一月二日午後九時四十五分開城談判全權委員間に開城規約の本調印を終れり。

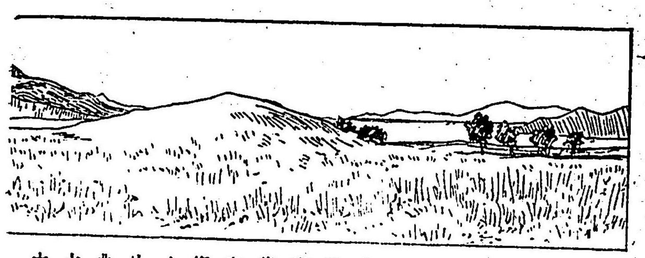
時の占領品として最も著しきは艦船なり沈沒せるもの完全なるもの擧げて數ふべからず余等港務部の小蒸氣に乘りて港の内外を巡視せし時一將校は曰く「今旅順港内の軍艦氣船其他種々の船舶は皆露國の所有たりし者のみ」と特に小蒸汽の如きは引き上げの順序によりて番號を附せしが余等見たる者に八十六號なるものあり内地の軍港にはかゝる多數の小蒸氣を有するものなしと。

七月二十三日午前七時二十分旅順停車場を發す白玉山下を廻り水源地方面より南流する龍河に沿ひて北進す此河は市街附近に於て見たる時は其幅數十間にして滿潮の時は十數尺の水を湛え干潮に至れば殆ど徒涉し得べく其潮汐滿干の差

實に甚しきを示したりき、今之に沿ふて溯るに、河幅俄に減じ其の上流は僅に數間の細流をなし途に小溝となり之を道路に兼用すること此地方の他の河川と異ることなし、此川の低地は左に大小案子山椅子山、右に松樹山二龍山の諸砲臺を控へて恰も兩者の中間にある鞍部をなし、我勇敢なる白襷隊の突進奮闘せしは實に此地にして敵は五十の鐵條網と無數の拒馬地雷を備へて之を死守したりと云ふ、顧みれば二百三高地は其頭を赤坂山上に現はして吾行を送るが如く、又昨日登りし望臺の峰頭には露軍が殘せし二門の海軍砲が獨り空しく北方の天に嘯くあるを望み漸く進めば線路の左方に水師營の部落密集せるありて彼の乃木ステッセル兩將軍の會見せし家は吾國旗を立てゝ之を標するを見る、其南方、鐵路に沿ひて蜿蜒たる丘陵はこれぞ我中央軍を苦めたるステッセル砲臺の跡なり、昨日迄は自が名冠して猛威を振ひし堅壘今はた如何に而も城下の誓を爲すべく此臺下を過ぎて水師營に向ひし、敵將の衷心、思へば哀れの極みかな、

以上諸砲臺一つも樹木を見ず、唯此間にある靠大の平地と丘陵には多く玉蜀黍高粱を植うるを見るのみ、是れより汽車は丘陵起伏の間を進み所々硅岩石灰岩等の切開路を通して長岑子に至る、硅岩層は此附近に於て其皺曲甚だしく反層をなせ

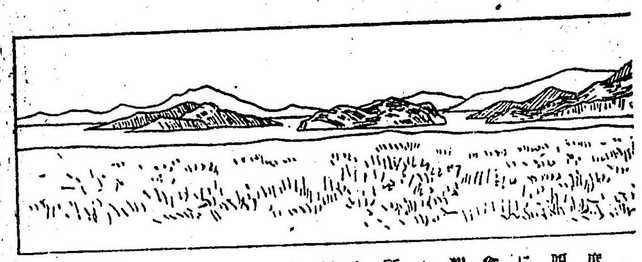
る所あるを認む、厚く地表を蔽へる黄色の土壌は(粘板岩泥板岩等の風化霽爛せら、れたるものか著るしく水蝕作用を受けて數尺或は十數尺の石筍狀の土塊を爲し、或は小丘の狀を呈し或は段丘の如く、又此の上を細かき水流が宛も蚯蚓が過ぎし如くに痕つけたるなど奇觀少からず、如此有樣は北得利寺附近に至るまで所々に見うけられたり、長岑子の次驛双臺溝に至りて稍開けたる平地となり西北に南大山半島の西角を見る、遠淺なるインゲンチ灣稍深く入りて中に美はしき富士形をなせるアストン島を望む、營城子を過ぐれば後牧城驛を左方に見る、南大山半島の東側に位し驛の東方に丘陵より成れる小突角ありて半島との間に金州灣の一部を包み後牧城驛の碇泊地を爲し五六のジャンク、船掛りせるを見る、此附近一帶の低地皆沖積層の平原にして遠く渤海の淺海に連れり、東方の小突角の如き元これ沿岸の小島なりしを沖積層の發達するにつれて對岸の地と聯絡し今は半島の形を爲せるなるべし、唯南大山半島は一塊の山嶽より成り山脚直に海に終りてまた一平地を存せざるが如し、又金州灣沿岸にして下河子より東北東の海岸を望むに壁崖直に海に沒す、海圖に依るに其沿海の深さ直に三尋に及び他沿岸の二分一乃至四分一尋の遠淺なるとは大に其趣を異にせり、思ふに三十里堡西北西の四四八



普蘭店停車場より北七十

呎高地が北に延びて金州灣に臨みて俄に斷絶せるもの、ならんか双臺溝より下河子に至るの地多くは平衍にして沖積層平原にあらざれば則ち古き支那層の地が著るしく侵蝕作用を受けて緩慢なる丘陵をなし漸くに海に沒せるものより成れり。

鐵道は夏家河子附近より東南に廻り海岸を離れて內地に入る、丘陵性の地形は旅順附近と異らざるも川には多少の水ありて河畔の地若くは村落には樹木繁茂せり、水蝕によりて表面滑かなる灰白色の石灰岩は附近の平地に其頭を露はし、又線路の兩側に露はるゝ黃赤色の土壤も甚しく水蝕を受けて深く刻まれたる狀態に長岑子附近に於て見たると異なるとなく時に深さ十四五尺、廣さ五六尺の溝渠を爲すものあり、此狹隘を過ぐれば又平地となり、石灰岩の好露出ありて其層理或は明かに或は明らかならず又所々之を截り出したりと思しき跡なとあ



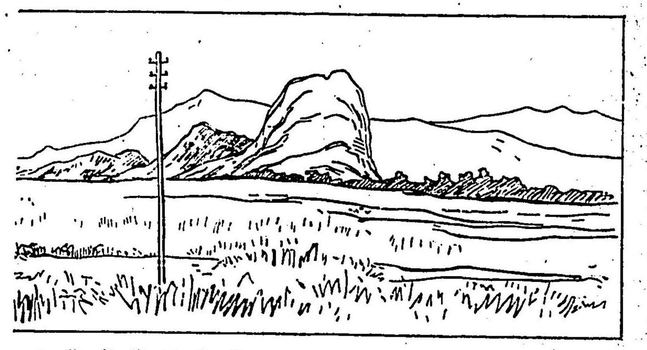
度四に會灣々頭を望む

りやがて南關嶺停車場に至り、更に進んで大房身驛に至る、時に午前十時四十分茲より柳樹屯に至る支線あれど今は使用せず、大房身は金州半島中氣候最溫和にして且遼陽地方に最乏しき清水も此地には容易に得らるゝされば都督府にては此地を轉地療養所にあてんとする計畫ありといふ、此附近は大連灣の一部なるハドソン灣と金州灣と相逼り來る所にして地峽狹く其幅僅に一里弱に過ぎず停車場は稍低き處にあるを以て西北の丘陵に妨げられ金州灣は展望するを得ざりしも、東南はハドソン灣深く入りて沿岸には樹林點綴し紀家屯附近は蒼々たる樹林の內に人家密集せるを認む、又東北には大和尙山巍然として峙立し、その紺碧の色なせるは松楢等の樹林の繁茂せるによる猶進むに從ひ、左方に淸國都邑の特徵たる城壁の橫はるを見る、是れ即ち金州城にして城は同名の停車場を距る西北十餘町の所にあり、著名の戰場南

山は停車場の西南に近く横はれる禿山にして高さ僅かに二十米著しき高低なく緩慢なる山背は蜿蜒として平野の間に横はれり、金州を經て地形漸く變じて又山地となり石灰岩の露出殊に多きも其間偶ま平地あれば則ち多く玉蜀黍を植うるを見る、山間の谿谷には流水を認め又所々に松林のあるなど風光自から旅順附近と異なれり、此處にて遙に東坡子峯附近より分脈し來れる南滿洲山脈の支脈を横り二十里臺驛に出づ、驛より北東東に當り片麻岩より成れる山岳の突兀として穩波の如き支那層丘陵の上に峰頭を顯し恰かも烏帽子の尖頭を望むが如きありて其前方丘陵の麓に沿ひて珍らしくも枝葉繁茂せる森林の連續せるを見る、やがて鹽廠河を渡りて三十里堡驛につく此の河、水ありて美し、スリバン灣に注ぐ、汽車は此の如き地形の間を過ぎて會灣(ポルトアダムス)の南岸に沿ひ午後一時四十分、其盡頭にある普蘭店驛に達す、

會灣は一種の陷沒地帶たるが如し、灣の沿岸或は灣内島嶼の側面等、所々斷崖直下陷沒の痕を示せるものあり、此邊凡て能く開墾せられたるも、會灣南岸の一部及び其盡頭には若き第四紀の平地發達して未だ雜草の蔓延するに委したる地すらあり、平地は尙積きて瓦房店に至る露國時代に於ける二等停車場なりしかば其規模

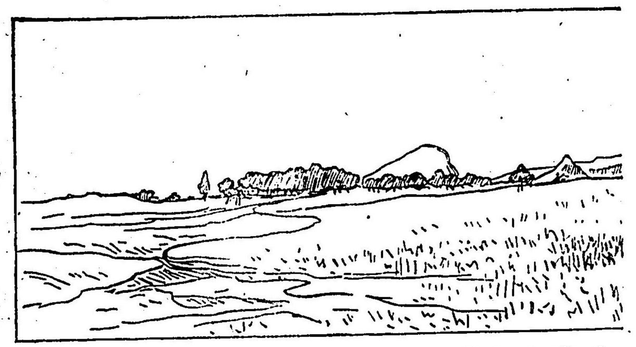
も亦宏大なり、是より先は山漸く逼り來り山上又灌木倭樹の生長せるあり、得利寺に近づくに從ひ山勢頓に急峻、鐵路其麓を截りて北進す、龍王廟の新戰場を右に望み水量多き復州河を渡りて午後四時三十七分得利寺驛に着す、驛は山間の低地復州河河成平野に横はり、戰死露兵の墓そこここに見ゆ、得利寺山は驛の南方にありて兀然たる禿山をなし所謂佛刹得利寺はその西麓にありと云ふ、龍潭山は更に大に更に嶮にして北に拜び、又北方には復州河に沿へる連山の上に城子山その禿頭を顯はせるあり、河の沿岸及び四近の山腹には所々森林點在せるあり其山側にあるものは多く柞樹にして主として柏を植う三尺許の灌木にして遠く望めば紺碧の色一種の美觀を呈す、森林の間には又豚群の番犬に逐はれて徘徊するもの少なからず、是より漸く汽車、河に沿ひて進み再び之を横ぎりて遂に河と分れて北進し山峽丘陵の間を過ぎ關子峯を經やがて又花崗岩の峽間を通ず、此附近一帶の山間村落は石を以て垣とし柴を以て門となす、一村僅かに數棟の長家よりなるあり、されど此の一長屋は更に數戸或は十數戸に分たれて一族を以て一長屋或は一村落を形成すと云ふ、更に進んで萬家峯に至る倭松點在せり、李官村の砂洲には牧草繁茂し羊の放養されたるを見る、樹木も亦茂れり、河に沿ひて段丘あり、



熊岳城停車場より

斯くて日は漸く西に傾き、熊岳河を隔てゝ遙に熊岳城を望む、平野漸く廣きも猶東方は丘陵を爲して山地に續けるあり、河岸には高粱を植ゑ又所々大豆を栽培す、概して作物の發育南方即ち半島地方に比し甚盛なれば地味漸く豐沃となり來れるを認められつ、河を渡る頃夕陽平野のかなたに沈みて燃ゆるが如き殘照水に映じて一の美觀を呈せり、午後八時前十分熊岳城に着く、

日は沈みて月は出でず、熊岳城以北は最早何等の觀察をも爲す能はず、二十四日午前五時四十分蘇家屯につく、廣漠たる遼河の平野とて見渡す限り高粱の波遠く連なり其の間時に大豆を植うるを見るのみ而かもその高粱は金州半島



蘇家屯を北東に望む

にあるものに比して長せる事約一倍半より二倍に及ぶ、一夜にして此急變を見る、蓋地味の肥瘠に因るか、蘇家屯を過ぎて約三十分、分岐點驛あり、もと撫順線の分岐點たりしかど現在に於ては此驛を使用せず、蘇家屯より別に列車を出す、やがて渾河の鐵橋を渡り遙に奉天の喇嘛塔を望み遂に奉天驛に着す、時に午前六時三十五分なり、

奉天

七月二十四日、雨天、奉天停車場に降りて直ちに宿舍に入り、小憩の後北陵を見、解隊して或は直ちに宿舍に、或は奉天城内を經て宿舍に歸り、二十五日は分れて二隊となり一は城内、宮殿に、一は撫順炭坑に向ふ、以下見聞せし所を概括し

て記さん、

奉天城は奉天停車場の東一里にあり、北緯四十一度五十分、東經百二十三度三十五分に當り、海拔約百米、遼河々成平原上にあり過去に於ては豐富なる歴史を有し現在に於ては南滿洲の要地と稱せらる、遼河は實に南滿洲の生命なり、古來此流域は漢人種のために殖民せられ、關外中最も人口稠密の地をなせり、遼河は其源を盛京省北境に發し、北に向いて吉林省に出て、懐德縣附近より西南して內蒙古との境をなし、小塔子に至りて西より來る西喇穆倫(河名)、老哈穆倫(河名)の合して來る西遼河を合し、河勢頓に大となりて以下遼河の平原をなす、鐵嶺の西馬蜂溝附近に於ては平原の幅未だ甚だ大ならずと雖、稍下りて奉天附近に至りては東より奉天の南を流れて遼河の支流をなせる渾河の平野と融合して其幅甚だ大、約十九里となる、以下平野の間を曲流して、遂に遼東灣に及ぶ、灣の沿岸に於て遼河の平野と見らるべきもの其幅約二十五里なりといふ、渾河は源を興京附近に發し、殆んど西流す、北は(右岸)吉林府の西南より奉天方面に連續せる庫勒山脈あり、南(左岸)には長白山脈の支脈半島部に至るものあり、從つて其河成平野は甚だしく窮迫せらるといへども撫順以西漸く開け、奉天附近にては其幅增大して遼河平野と結合すること既記

の如し、而して奉天は實に此兩河の中間にありて遼河大平野の首部に位す、されば吾人滿洲鐵道によつて北進すれば右は常に中山性の山列見ゆるも、奉天に至れば山列の北端は渾河平原のために斷絶し、河を距てて天柱山(福陵のある所)、隆業山(昭陵即ち北陵のある所)の小丘陵となりて遂に庫勒山脈に連なる

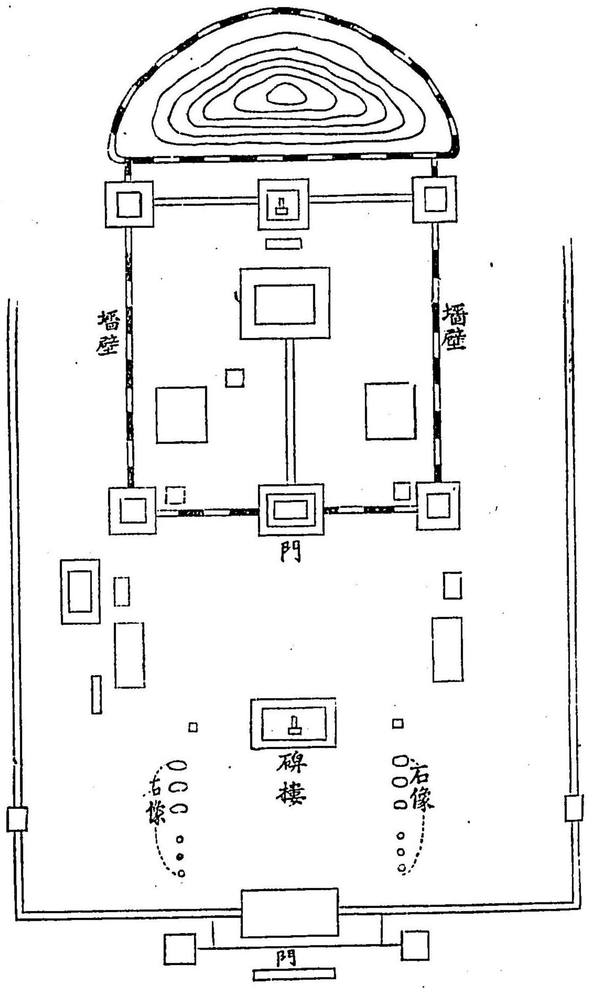
奉天が清朝の有となりしは太祖奴兒哈赤の天明六年(明の天啓三年、西暦一六二三年)にして滿洲人はムクデン Mukden と稱す、當時は明の名によりて瀋陽と稱せり、盛京の稱は太宗の即位五年(西暦一六三一)以來にして、奉天の稱は世祖の即位十四年(一六五七)以後なり、其他承德、昭陽とも稱す、又陪京の名は世祖が燕京に即位して後興へられたる所にして、同意味にて又留京とも稱す、

一行は午前八時北陵に向ひて宿舍を出づ、奉天城外の平地無數の小塚の點々たるあり、地學雜誌第二百八號に有賀博士が「奉天市外は墓か沼かでありまして」と言へる者、即ち清人の墳墓なり、石碑等全くなし、北陵は奉天市街の北、小北門より約一里にあり、四周漠々たる平野にして、一物の眼を遮ぎる者なき所に小丘陵ありて、老松枝を交へて鬱蒼たり、三陵とは永陵(福陵東陵)、昭陵(北陵)にして後二者は奉天附近にあり、永陵は興京の西北一里半の所にありて現時一小村落永陵村

をなす、興祖、景祖、顯祖三代の靈を祀り、其山を啓運山といふ、東陵は奉天の東にありて太祖高皇帝即ち奴兒哈赤を祀り、北陵は北にありて太宗文皇帝を祀る、世祖以來天子は三陵へ一代必ず一回の巡幸を例とせしが宣宗道光帝より此事は廢せられ、各陵大に荒廢せしのみならず、北京より興京までの道路の如きも自然の頽廢に委せりといふ、

陵前は並木の直道數丁あり、是を進めば、白堊の門、黃甍の屋樹間に陰見す、やがて石造の牌樓を入れば幾くもなくして正門に達す、門扉堅く鎖さる、是通常參拜者の通過するを許さざる所なり、右側の小門より內廊に入るを得たり、中央の道は石と磚とを敷き、兩側には大理石造の獸像を列ぬ、庭上中央に一宇あり、中に大碑石を建て滿漢兩文にて記せる頌德の辭を刻す、更に進んで一門を入れば乃ち內庭に達す、全く磚を以て敷きつめられ、方形にして高く牆壁を圍らし、四隅に牆樓を設くる事普通の都市に於けるが如し、而して內庭內の一堂には亦滿漢兩文にて太宗文皇帝之陵の七字を刻せる碑文あり、此奥に饅頭形の小山あり、是れ其柩を納むる所なりといふ、

今其略圖を示せば左の如し、

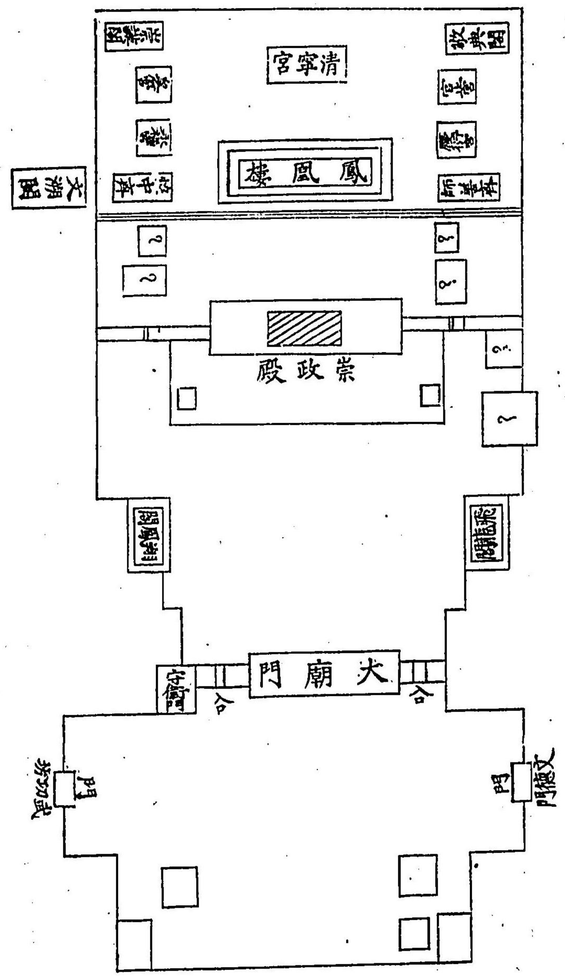


福陵は奉天城外東北二里の所にありて親しく其の地を踏まざりしが爲に能く詳細を知るに由なしといへども其規模概ね昭陵に同じといふ、地勢前に渾河を控へ全山松樹蒼々として實に幽邃を極め山の東端に太祖の廟あり、而して廟邊に一大碑を建て刻するに福陵神功靈德碑文の文字を以てす、康熙二十七年十二月五日聖祖帝の建立する所なりといふ、

七月二十五日、朝雨後晴、奉天市街及宮城を見る、

奉天城の規模は素より北京に及ばずといへども結構の壯麗なること清帝の留都たるに恥ぢず、今其の城廓樓門の構造を見るに外廓は土墻にして殆んど圓形をなし高さ七尺五寸周圍約五里十三町東西南北各二門あり、名けて大西邊門小西邊門大東邊門小東邊門大北邊門小北邊門大南邊門小南邊門といふ、內廓は正方形にして一邊の長さ約十一町、煉瓦石を以て疊み其高さ三丈五尺、巾一丈八尺あり內廓は外廓の各門より通ずる道路ありて亦各邊二門を有す、小東邊門に連絡するは小東門と稱し、以下大東門、大南門、小南門等あること外廓に同じ、

而して東南角外廓內に小河あり、河邊沼澤をなす、又城內には七十二の池あり之を泡子と稱す、且大北門街と小東門街と相會する點に鼓樓小北門街と小西門街との



相會する點に鐘樓あり、

宮殿は北京宮殿の規模を縮小したるものにて內廓の中央にあり、庭園の設は全くなしといへども輪奐宏壯にして其の建築恰も吾が大極殿を見るの觀あり、清寧宮鳳凰樓崇政殿大清門等の各建築頗る宏壯なりと雖も今や頗る廢頹して屋上草を戴けり、されど當年の輪奐燦然たりし樣は各殿內に於て見らるべし、金泥の扁額銀鏹の柱梁及び崇政殿內玉座の如き一として目を驚かさゞるなし、更に翔鳳閣內珍藏の寶物に至りては其の數實に夥しく之を藏むる所數棟ありといふ、然れども通常縱覽を許す所のものは其の內の極めて小部分に過ぎず、吾人の見たるものゝ重なるものは應鐘金印、金冊、玉刀、歷代帝王圖等の數品に過ぎず、又淸國帝室の圖書を藏する七閣中の一たる文溯閣は四庫全書を藏むる所にして宮殿の外にあり、文溯閣は頗る宏壯なる建築にして中には書架を列ね書架の中に書函を安す、書架は幅四尺位にして高さ約五六尺位なり而して之を橫に四段或は六段に分つ書函は長さ一尺二寸幅八寸位にして高さは大抵四寸前後とす、書架の一段には書函を二個又は三個づゝ重ねて四行に排列す書函每に五六冊の書を二枚の薄き板にて兩面より挾み絹の平紐にてくゝれり、或は一函にて數部の書を藏し或は數函にて一部

の書を藏す、每架に其の番號を書し每函また其の番號及び書名を刻す、其數實に三萬六千冊と稱す、全部正楷の寫本にして每冊長さ約一尺幅七寸位八行の朱罫に二十一字詰に書せり、表紙は絹を用ひその裏には

詳校官庶吉士臣某
主事銜臣某覆勘

といふが如く必ず校正者の名を書したり每冊の初に欽定四庫全書と書し次に其の書の特名を記したり、

更に市街の概況を見るに城內の最も繁盛なるを四平街と稱し小東門より小西門に至る中央に位す、之より東西の街路は店舗軒を並べ大華門街西華門街は四平街に平行して其の南方にあり、而して南北に走れる大小南北門街は是と井字形をなし之より小路枝の如くに岐る、恰も碁盤の目の如し、人家櫛比し人口稠密なり、其の內廓のみにても人口二十萬と稱せらる、家屋の構造は多くは煉瓦造にして大賈富商少からず、其の大取引をなすものに至つては優に荷馬車五六十輛を庭內に曳き入るゝを得るものありといふ、

建築の宏壯なるものは宮殿附近に奉天總督府あり、黑塗の柵門を構へ親衞の兵を

置く、其他別に總督府、舊府尹衙門、道臺衙門、五部衙門、(工、禮、兵、刑、戶)交涉局、承德縣衙門、清國電信局、金銀庫等皆城內にあり、

奉天は盛京省の首府なれば、吾人は此地に於て盛京省全體の政治組織を略說せん、

滿洲は初め土着の旗人のみなりしを以て、清朝は是を統治するに軍政を以てせり、されど盛京省は所謂滿洲人の最初の根據地にあらず、古來遼東と稱せられて漢人の勢力範圍たり、清朝の初期には遼東と今の吉林、黑龍江兩省とを東三省と併稱し、是に齊しく軍政を施行せり、されど滿洲の侵略前既に漢人ありたれば、清朝が支那全土を統一して後滿洲を閉鎖し同族のために是れを保有せんとせし時も盛京省のみは例外とし、一定の條件の下に其移住を許したりき、

茲に於て支那本部に於て生存上の淘汰を受け、衣食に困める漢人は競うて開放されたる南滿洲に入り、忽ちに遼河の谷に充滿し、延きて吉林、黑龍江兩省の人煙稀れなる金鑛、人參の豐富なる地に至れり、特に鴉片戰爭及び長髮賊の蜂起によりて北京政府の紀綱大に弛緩せる時に乘じ、其移住は益々頻繁となれり、

かゝる歷史を有するを以て盛京省は單に軍政のみを以て是を統治する能はず遂に旗人に對しては軍政、漢人に對しては民政を以て臨むに至れり、即ち支那本部

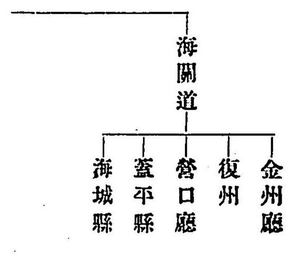
と同じく總督を置きて民政に長たらしめ、將軍を以て軍政の長たらしめ、一人をして此二官を兼ねしめ、省內各地方は皆二種の行政機關を有せり、

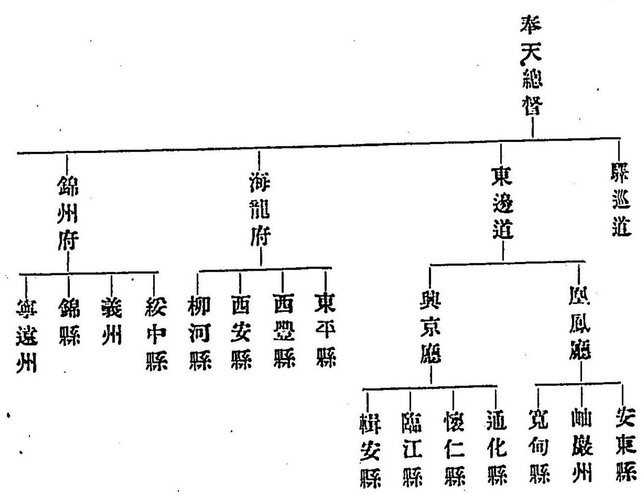
軍政機關としては將軍(現任趙爾巽)の下に副都統、協領、城守尉、防守尉、路記等の武官ありて、旗民一般に關する行政事務を掌り、かねて地方防備の責に任せしむ、副都統は現時金州、奉天、錦州(遼西にあり)、興京にあり、管內各地にある協領、城守尉以下の武官を統率す、但し金州副都統は其地租借地となるに及びて奉天に移り、復州、蓋平、岫巖、熊岳城の城守尉を管せり、副都統以下必ず滿人より登用せらる、而して地方旗署は事務の繁閑により大抵兵科、戶科、工科の三科を置き各科に總辦を置き事務を分擔す、

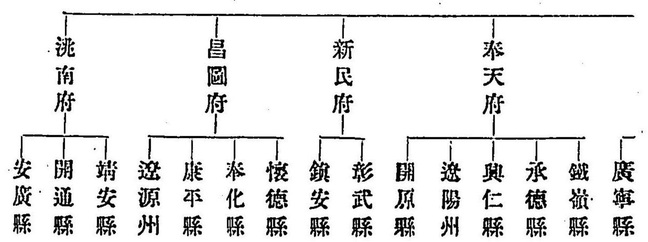
民政機關、總督の下に巡撫あること支那本部各省と同樣なりしが、事實は奉天府尹を以て兼任せしめたり、されど明治三十八年上諭に基き府尹を廢してより兼職たりし巡撫も自然廢官となりて今日に及べり、行政區劃としては省內六府、(府は州と縣とに分たる)四廳(亦州と縣とに分たる)六州、二十六縣あり、府に知府(從四品)、廳に同知(正五品或は從五品)、州に知州(從五品)、縣に知縣(正六品或は從六品)ありて、各地方署は更らに吏、戶、禮、兵、工の分課を設け、各事務を分擔せしむ、是を五科或は五房といふ、地方の情勢によ

りて工科を缺き、又倉科を加ふるあり、

道臺としては海關道、驛巡道、東邊道の三あり、海關道は營口に駐在し、專ら海關稅務を監督し、かねて金州廳、復州、營口廳、蓋平縣、海城縣を管轄す、驛巡道は奉天府に駐在し、遼河の運輸と郵驛の事を管掌す、古來各要地に六十清里（日本の十里）を距てゝ驛站を設け、公文書の傳遞をなせしが、現今に至つては其制僅かに北京奉天間に存するのみ、東邊道は鳳凰城に駐在し、專ら木稅徵收に任じ、海關道と同じく鳳凰、安東、岫巖、寬甸、興京、通化、懷仁、臨江、輯安の各州廳縣を管理せり、今盛京省民政の系統を表示すれば左の如し、







支那本部にては巡撫の下に道臺あり各府、廳、州、縣を分管すと雖も、盛京省にては是等の事なく海關、東邊二道の外は海龍府以下總督に直轄す、又巡撫なきこと既述の如し、而して是等の行政機關は皆近年の新設なれば其組織は未だ完成に至らず、間々知府、知縣などの任命に至らざる者さへあり、

奉天に就て注意すべきは將軍の下に戶、禮、兵、刑、工の五部あることなり、是奉天は清朝の初め國都たりし地なるを以て、北京に遷都後も太宗が設置したる百官を其儘有せしめたれば、今や北京政府の小模型たるの觀をなせり、戶部、禮部、工部衙門は大東門街に、刑部、兵部の衙門は大西門街にあり、

又、十二道街東頭に交涉局なる者あり、露國の東清鐵道進捗して清露間の交涉事件漸く繁多ならんとする時故吉林將軍廷茂の發議により其管理の下に中俄交涉總局なる者を設置したるを其起源とす、其後露國との交涉頻繁なる地方には漸次其の設置を見るに至り、殊に鐵道沿線の主要地には所々是を見るに至れり、余等宮殿拜觀のため奉天市街に至りし時も同地領事館員の好意により交涉局に交涉し、ために拜觀の許可を得るを得たりき同局には主要なる外國語の通譯官ありと云ふ、

下級行政機關としては旗民には屯達又は守堡なるものあり、漢民には鄉約又は村長と稱する者あり、其に官民の間にありて其事情を疏通せしめ、或は官府の命令を傳達し、或は徴税事務を補助すること我國の市町村の公吏の如し、屯達には俸給の如きものあれども鄉約には之なく、所管の鄉村に地方税的の賦課をなし、此を其收入とす、

かく述べ來らば滿洲少なくとも盛京省の行政組織は頗る完備せるが如きも實は甚だ然らず、一地方に幷立せる旗民兩官は常に其勢力の增大を圖り、拮抗相下らず、旗人は其數に於ては大に劣れりと雖も兎に角其格式上漢民の上にあるが故に常に是を凌がんとする風ありといふ、加之、旗人と旗官、漢人と民官との間さへも其連絡甚だ堅固ならず、彼我の間常に怨嗟を以て充たされ、反間訴訟到る處に起り、裁判の如きも全く一定の法規を有せず公私親疎によりて判決を與へ賄賂公行し間々暴歛强奪を逞しくす、されば上記の如く形式上整頓せる官制も、其實際に至りては運用の實の揚がらざること素よりなりとす、

次に奉天の商業上の位置を見るに此地は運輸交通の衝に當れる一大樞要の地にして商業は南滿洲第一の消費地たると同時に又盛京省に對する貨物集散市場たるを失はず鐵道は北哈爾賓より來りて市城の西一里に停車場を有し、遙かに西南走して四の終點となる、營口、柳樹屯(現今使用し居らず)大連、旅順是なり、北京條約により長春以南我有となりたれど目下開通せるは昌圖までのみ、こは近々全部開通を見るならん、此外我軍の架設せし輕便鐵道は東南安東縣に至り、韓國京義鐵道と連絡すべし、又新民屯に至るものもあり、關外鐵道(山海關より來るもの)に連絡すべし、其他道路としては奉天を中央として十字形に四出す、水運には渾河用ゐるに足るも水概して淺く夏季水多き時にのみ利用せらる但し冬季道路面及河水氷結すれば陸上直ちに營口に至るべし、滿州にて最も便なるは即ち此冬期とす、奉天は南滿洲の中央市場といふべし、鐵嶺より遼河によりて營口に至る物貨の外は出入皆此地を經由して營口又は大連に至る輸出の重なるは大豆、豆油、豆糟、雜穀、獸皮、豚毛等にして輸入は綿布、綿糸、石油、鐵器、陶磁器、海產物、卷煙草等なり、市內凡ての商業的機關具備し、豪商、巨賈軒を並ぶ而して各商家の廣告看板は實に此地に特有のものにして高さ數丈、赤色に塗れる大柱の兩側に唐草風に刻せる肢を出し頗る見事なり、(寫眞參照)

既に述べしが如く、奉天附近は遼河冲積層の廣漠たる平野にして地味膏腴、最も高

粱玉蜀黍豆類の耕作に適す、肥料は牛馬糞の少許を用ゐるのみなれど連年其收穫豐なりと云ふ耕作地の廣きは驚く計りにて畦の長さ四五丁位のものさへあり、一區劃の耕地三町乃至五六町に亘るもの敢て珍からず、其耕作法は甚だ粗雜なれども雜草極めて少く農具は僅かに鋤、唐鍬、大鎌位に止る、牛馬耕の時には夫れに相應する鋤ありと云ふ

(撫順炭坑) 奉天につきては廿四五兩日見聞せる所を略記せり吾人は之より滿洲の一大富源たる撫順炭坑につきて述ぶる所あらんとす、廿五日炭坑に向ひし一隊は午前八時四十分奉天發の列車に搭せり、夜來雨は激しかりしも此時微雨となり間々雲間より漏れ來る日光を見るを得たり、渾河を渡り蘇家屯停車場にて撫順支線に入る、坦々たる高粱畑の間を走ること暫くにして安摩線と交叉して進み深井子、李石寨の二小停車場を過ぎ程なく千金寨停車場に着せり、深井子、李石寨の間よりは北の方渾河を隔てゝ絶えず東陵の黑林及び黃甍見えたり、

撫順炭坑の所在地たる所謂渾河の河成平原の將に盡きて東方山地に移らんとする所に位し渾河の南岸に於て最も緩傾斜をなせる丘陵地に位し北方渾河を隔てゝ遙かに撫順城の市街と相對す、後に高地を負ひ前に約二千米突の平野あり、以て

渾河に沿ひ點々たる小部落の散在せる處、故に對岸撫順城の名を取り撫順炭坑と稱す、抑も撫順附近に於て露人の採炭に從事せし由來を尋ぬるに明治三十四年清國人某借區の許可を得て採掘に從事したりしも資本缺乏の爲め其事業振はず、三十六年に至り露人リウフ氏露國御用商人清人紀鳳臺なる者の手に歸し專ら東區を經營するに至れり、其經營としては大豎坑を鑿ち、運炭の坑路を開通し各種の採炭器械を設備し、且つ東清鐵道蘇家屯驛より直に輕便鐵道を敷設して以て炭坑口に至る等頗る大規模の計畫たりき、又西區は明治二十九年以來營口露清銀行の手によりて經營せられ清國人呉告白なるもの專ら採炭に從事せり、其採掘は之を請負とし器械を用ひず專ら舊來の習慣を襲ひ、皆土人を以て採掘せしめ銀行之を買收し居たりと云ふ以上土人の言なれば其眞否之を明かにするを得ず、之を要するに露人猶譎陽に名を支那人に藉り陰に支那大官を籠絡し、實は自ら之を經營し、遂に其實權を握るに至れり、本鐵道は明治三十八年一月の頃開通せりと云ふ、然れども日露戰爭前に於ては露國は寧ろ煙臺炭坑を盛に採掘し設備も彼は比較的整頓し、以て供給を彼に仰けり、後煙臺が我軍の占領する所となるや露國は其機械を凡て撫順炭坑に運搬し、爾來明治三十八年三月我軍の占領するに至る迄撫順は盛に

露國の手に採掘せられたり、

坑區は東西に長く、西は小瓢屯、古城子に起り東は老虎臺に至る、されど其炭脈は更に廣大にして李石寨附近に起り千金寨、楊柏堡等を經て章堂、石門寨に至り、更に東して永陵及英額城附近に連亙し、其延長東西二十餘里に達す、然れども南北は甚だ狹くして幅二三十丁を有するに過ぎず、

而して所謂撫順炭坑の中央には渾河の一支流南より來るありて之を東西兩區に分ち、西區にては千金寨、東區にては楊柏堡老虎臺最も名あり殊に千金寨最も整頓し且規模も亦宏大なり余等一行の見しも亦此炭坑なりき、

千金寨(撫順の正南約一里十町)楊柏堡(千金寨の正東十三四町)老虎臺(楊柏堡の正東十三四町)に於て坑數新舊大小約四十箇所あり、露人經營時代に於ける每日の出炭量最も多きは千金寨の六十萬斤、楊柏堡五十萬斤、老虎臺の四十萬斤にして明治三十七年五月より同年十一月に至る八ヶ月間の採炭總量は約四億萬斤に上りたりと云ふ、今試に我軍占領後明治三十八年九月十一日より三十九年六月三十日に至る約十ヶ月間の石炭受拂總計を擧げんに左表の如し、

	受高	拂高	現在高
千金寨	一六一、三五六、九六七斤	一五五、九一一、二六五斤	五、七四五、七〇二斤
老虎臺	一三八、六四五、〇〇〇	一二九、七三〇、六一七	八、九一四、三八三
楊柏堡	一五、〇六八、〇〇〇	六一、九四三、九	一四、四四八、五六一
老虎臺戰利	三、三四八、六九五	三五八、五二四	二、九九〇、一七一
合計	三一八、四一八、六六二	二八六、三一九、八四五	三二、〇九八、八一七

占領以來我國にては之が調査に着手せしが其稍成りしは古城子より東方約二里の間にして、その以東尙數里間は含炭層のある事を知れり、其調査によれば此邊一帶の含炭層は第三紀層に屬し他の支那炭層が多く古生層なるとは大に其趣を異にせりと云ふ、元來該炭は有煙炭なれど灰分少く、燃燒力强く、炭質善良なるより、古生層石炭紀のものなりと思惟せられしが其炭層中に含まるゝ

Osmunda Sp.	せんまいの類
Thuya Sp. (cf. borealis Hr.)	びはの類
Sequoia cf. distichn Hr.	まんまつの木
Sequoia cf. Langsdorfi Br.	同上
Parrotia cf. prittina Ett.	はんうんぼくの類

等の植物化石によりて明に第三紀層に屬し而かも其中新產なる事確實となれり其基盤をなすものは片麻岩にして第三紀層の岩石は多く粘板岩にして青綠又は紅色の砂岩を交へ又玄武岩の岩床を有せり、

含炭層は走向東西にして北に傾くこと三四十度なり、炭層の厚さは素より一定ならねど、炭層及所謂夾みを合して老虎臺は百二十九尺、千金寨は百三十五尺一寸五分あり、其內、千金寨の調査最も精密にして其夾みは最厚二尺一寸六分、薄きは僅かに四五分にして、合計十五尺餘に過ぎず、

されば純炭層の厚さ實に百二十餘尺に及び現今知られたる範圍に於ては此に及ぶものなしと云ふ、試みに東洋の石炭國たる我國の炭層の厚さを擧げて比較に便せんに我國最厚の炭層は北海道夕張炭山にして二十三尺、三池は十二尺、彼の有名なる天草炭は僅かに三尺、其他九州炭は多く五尺乃至八尺の間にあり、以て撫順炭層が如何に其規模の雄大なるかを想見するに足る、試に撫順炭坑の炭量を推算するに四億噸の多きに上り若し永陵英額城に至る全炭量を合算する時は其十倍以上に及ぶべく其五分一を採集するも猶七八億噸の多額を得べきなり、

炭層已に斯の如く厚ければ夫が採掘法も亦自ら異ならざるを得ず、元來世に行はる、採炭法は大別して二種となす、其坑道の炭層の傾斜に沿うて進むもの之を引ロシと云ひ其走向に沿うて進むものを片盤と云ふ、然るに撫順は此二者の何れにも拘泥するの必要なし、又從來の方法の如く炭層を凡て採掘することは却て不經濟となるにより炭層の一部をして上部の重量を支ふる柱壁とし又天井として採掘す、現今盤の數千金寨には七つあり、千金寨炭坑現在の炭坑は丘陵狀高地の裾にありて坑口凡て十二、坑內の排水は蒸汽喞筒を用ふ、然れども其水量至て少く爲に採鑛事業を助くる事大なりと云ふ、重なる坑口には鐵道の支線を延長し直に採掘せる石炭を搭載することを得、坑中より石炭を出すには竪坑(深さ百五十八尺)より引き上ぐ我等の一行は二人に一個宛のカンテラを持ち案內者に導かれて第六號坑を入り或は下り或は上り或は左折し或は右折しつゝ進む、穿行するところ悉くこれ石炭なれば燈光によりて一種の光澤を放ちさながら黑曜石の隧道を往くがごし午后五時二十分千金寨停車場を發し九時半頃暗をついて奉天の宿舍に歸る、

今や南滿洲鐵道株式會社組織せられ同會社經營事業の一部として採炭事業も經營せられんとす、今後鐵道の改修成り、採炭の設備整ひ蘇家屯以南の鐵道複線となり、噴の如く柳樹屯港を石炭輸出港として廣く東洋市場に販賣するの時に至らば

其利益や實に測られざるものあらん。

千金寨に於て純日本式の粗造家屋新に大に建設せられ殆ど日本村を現出せしが如き觀をなし而して邦人の坑夫若しくはその監督者乃至雜貨商として此に住するもの當時五六百人ありき、附近の支那村落に處々「旅人宿」又は「下宿屋」と記せる看板を掲げし支那家屋よく目につきたり蓋し滿洲中吾人の實踏せるところは如何に邦人の多く住める地なりともその殖民的形式はつねに支那の家屋に支那人的に住みし感なくんばあらず、

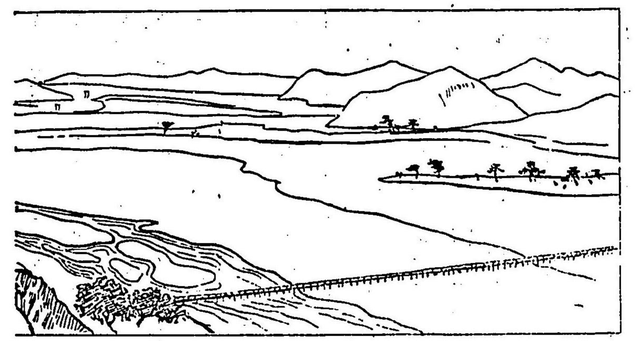
七月二十六日　朝雨後晴

奉天より鐵嶺に至り及鐵嶺を見る、

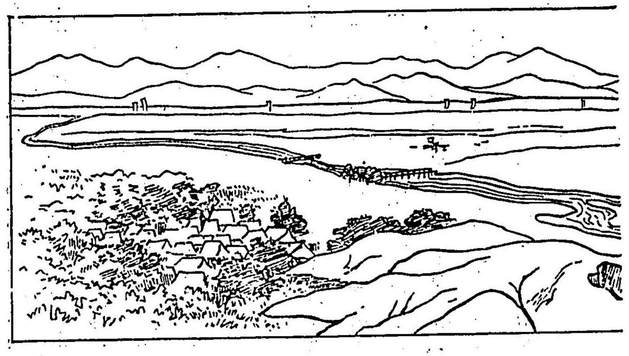
午前六時四十分停車場に集合し、七時十二分一聲の流笛と共に奉天を出發す、奉天以北は又其の以南の如く、一望際涯なき大平野にして、流車は此坦々たる平野の中を走る、鐵路の兩側、目に入るものは穰々たる高粱と、茂生せる菽豆とのみ眼界を遮る山なく、平野を彩る森なく、川あるも水なく、眺望の單調なること地形の單調に伴ふ、此單調の地形、變化なき眺望の中を走ること約貳時間半にして、流車は新臺子驛に

着く、新臺子を發してよりは鐵路の附近地形の平坦なる事高粱菽豆の繁茂する事は依然たれども、兩側遙かに小山脈の連るを見る、而して此一連の小山脈は、北方鐵嶺附近に至るに從ひ鐵路に近づき來り、平野の漸次に狹まるを示せり、亂石山驛停車せず)を過ぎて幾もなく遼河の帆影を茫漠たる西北の平原上に認む、(午前九時五十分)これより流車北するに從ひ帆影愈加はり、その極まるところは地平線はるか横雲たなびくところに消え失す、偉觀々々、午前十時二十五分、鐵嶺停車場に着し、導かれて三四町許隔たれる鐵嶺商品陳列館構内の宿舍に入り休息す、午後一時四十分宿舍を出で、陸軍將校に導かれ、鐵嶺市街の一部を通りて、市街東方の高地龍首山に上り、鐵嶺市街並に四方の形勢を眺望し、且つ參拾七八年戰役に於て露軍が施せる防禦工事を見、我軍が之に對して取りし方略の概略及び當時の戰況の大體を聞く、終りて山を下り市街を觀察して歸れり、

鐵嶺は奉天の北鐵路四十三哩の處にあり、東は丘陵を負ひ、北は柴河に臨み西は遙に遼河に對し、南方一帶平原に連る、即ち吾人が前日來觀察し來れる遼河平原の北部漸く山地に移らんとするところに位す、遼河の平原は、北に至るに從ひて其幅漸く狹く、鐵嶺附近に至りては奉天附近に於けるが如き、四望茫漠として一物の目を



遮るものなき、大平野の光景は既に見るを得ず即鐵嶺の東南には近く龍首山及び之れに連る一帶の丘陵南北に伸び更に其東部には幾多の丘陵連亙し、又遙に數里を隔てたる西北遼河の彼岸には、大臺山其他の連山の一帶に發ゆるあり、而して大臺山及其連山は遠くして、委しく之を知るを得ざりしが、吾等一行の上りし龍首山及びその附近を見るに旅順大連に於て見し幾多の丘陵山岳と大に其形を異にせり旅順大連に於ける山は大抵古き硅岩或は石灰岩等よりなり岩質堅硬なればにや岩骨稜々としてあらはるゝもの多きを見たるに反し龍首山附近の丘陵は浸蝕風化を受けし事頗る甚しく新鮮なる岩質は殆見るべからず山形皆圓味を帶び多く圭角の存するものを見ず只何れの山も樹木



の繁茂せるものなき事は旅順大連附近に於て見ると異る事なかりき。

此等龍首山及其連丘と、大臺山及び其連脈との間に横はる平野は遼河並に其支流柴河の沈積作用によりて堆積せられし第四紀層より成る、遼河は南滿洲第一の大河にして、古より著はれ、遼東遼西の名これより出づ、水源二あり、一は東方吉林の山中なる長白山脈の支脈、吉林哈達山脈中に發し、西北に流れ赫爾蘇附近に至りて漸く大となり、西北に流れて奉化縣に入り、一度折れて西に流れ更に大屈曲をなし、西南流し小塔子附近に至りて西遼河と會す、其流域は滿洲に於ける最豐饒なる地にして物資頗豐かなり、一は即西遼河にして、源を内蒙古克西克騰部に發し、西喇木倫と稱して東北に流れ、喀喇木倫を合

せ、猶東北流して沙原中をすぎ、蒙古高原を下りて滿洲に入り、茲に東南流して小塔子附近に東遼河と會す、小塔子以下猶東南に流れ、通江口を經て鐵嶺の西約一里なる馬蜂溝に至りて西南に屈曲し所謂遼河平原を過ぎ、渾河太子河等の流を合せ營口の南方に至りて海に入る、其支流柴河は、鐵嶺の東松山の西に源を發し、諸水を會し、西流して鐵嶺の北をすぎ、馬蜂溝の北方にて遼河に入る、水量の少きと、流の急なる爲め、舟運の便なし、鐵嶺は實に此柴河の南岸數町にあり、

鐵嶺は奉天の如く、城壁を以て圍まれ、中に非面形に區劃せられたる市街あり、東西南北の四門を以て城外と通ず、各門外には之につゞきて東關、西關、南關、北關の市街あり、其城廓は周圍約二十四町あり、

西門を出で西南停車場に至る間は、露西亞町と稱し、露西亞の經營しつゝありし時代には、煉瓦造の層閣、高樓、道の兩側に並立し、又それより南折すれば、停車場附近にも宏大なる建築あり、頗るな壯觀なりし由なれども、三十七八年戰役の際其大部は燒失し、吾人の訪ひしときは殆ど昔時の壯觀を止めざりき、

市の人口は支那人約二萬、日本人二百三十名(三十八年末調)にして、是等の大部は商業に從事せり、

元來鐵嶺は滿洲南北の咽喉に當り、且つ遼河の水運は此地を以て其北端とし、東部蒙古及北滿洲より來る貨物は多く此地を經由したるを以て、百貨輻輳の地なりしが、十數年前遼河の水運は更に北方通江口迄通ずるに至りし爲め、幾分其繁榮を殺がるゝに至れり、されど猶ほ貨物の集散頻繁にして、商業頗盛なり、殊に大豆の集散に於ては、滿洲の地においては、他に及ぶもの無く奉天、通江口といへども之が下位にあり、從て市内は豪商軒を接し商業頗る殷賑なり、支那商人の多くは豆問屋及び雜貨商にして、巨萬の資本を投じ、之に從事し居るもの少なからずと云ふ、

鐵嶺附近は豐沃なる廣野にして、穀物殊に大豆の產出頗る多し、是等の穀物は皆、鐵嶺に集り來るを以て、取引の機關として、期糧局あり、市場を開き、價格の標準を定め、三、六、九の三月を以て定期取引を行ふと云ふ、此地に集りて他に輸出せらるゝ穀物は、最近四ヶ年間を通覽するに大豆一ヶ年四十萬石、高粱同六七萬石なり、以て其盛なるを見るべし、

鐵嶺にかく大豆の集散盛なるが之に伴うて豆油豆餅製造業も亦甚盛にして、市内大なる製造場あり、其規模は營口のそれに次ぐと云ふ、其實況を見ざりしを以て細密の記載をなす能はざるを遺憾とす、此製油所にて製せし豆油及び豆餅は、又主と

して水運によりて、營口方面に輸出せらる、豆餅は附近の農夫により肥料として使用せらるゝものも少なからずと云ふ、此外釀酒指物細工等盛なり、

以上は、支那人の手によりて行はるゝ商工業の大體なるが、本邦人は此間にありて如何に活動しつゝあるかは、吾人の最も知らんと欲する所なりき、而して其實況の幾分を見るに及んで、吾人は大に落膽し大に失望せり、鐵嶺の我勢力の下に入りてより、日猶淺ければ、移住者の少なく、事業のあがらざるは、已むを得ざるならん、されど彼等の多くは、皆一握千金の利を得んとするか、或は目前の小利にのみ汲々として、一も大資本を投じて、着實に商業に從ふものなく、從て商業に於ては、到底淸國人の敵にあらざるが如く感せらるゝは、吾人の頗る寒心に堪へざるところなり、今左に邦人の從事する重なる職業を擧げて參考とせん、

雜貨店	五	雜貨旅館兼業	四
雜貨飲食店兼業	四	飲食店業	三
菓子製造業	三	料理旅館兼業	二
和洋料理店	二	旅館業	二
寫眞業	二		

即ち彼等の多くは、小なる雜貨店、或は曖昧なる飲食店に由りて利を貪りつゝあるなり、殊に兼業の多きは明かに、彼等の事業の微々たる事を明示すと云ふべし、

鐵嶺には我軍政署に附屬する商品陳列館あり、市街の西南、停車場の近くにあり、專我內地製の商品を陳列し販賣す、陳列品は之を數部に分つ、即農產及副製品、食料及飲料、山林及水產、香水石鹼類、工藝品、織物及絲物、化學工藝品、衛生品、教育品等なり、設備未だ完全と云ふを得ず、品數未だ整へりと云ふを得ざれ、其尙ほ日本商品を支那人の間に紹介し、其販路を擴張する點に於て、多大の功あるは疑ながる可し、近來漸く支那人の間に信用を博し、需要日々に增加し、日用品の如きは、需要に應ずることに能はざるが如き盛況を呈するに至れりと云ふ、

鐵嶺に於ける交通は、陸路及水路の兩者によりて行はる、道路の有名なるは奉天街道なり、南方奉天より來り、市街を通りて北方開原に通ず、坦々たる大道なれども、雨季は泥濘車軸を沒するを以て、歩行運搬共に容易ならず、此外尙小路二三條、市より出でゝ開原或は新民屯に至る、運搬用として荷馬車を用ゐ乘用としてパチなき箱馬車を用ふること、奉天附近と異なる所なし、

鐵道は即もとの東淸鐵道の一部所謂今の南滿洲鐵道にして南方奉天より來りて、

北開原昌圖に通ず、停車場は市の西南數町の處にあり、露國時代の三等停車場にして、機關車倉庫、給水場等を設け、停車場の附近約一里四方の地を取りて、新市街建設を計畫したりと云ふ、露國が經營せし大部は今は燒失して存せざれども尙ほ大停車場たる面目は、依然として存し規模中々宏大或ものは之を大坂梅田の停車場に比したりき、此停車場の外、其南方に當りて尙一停車場のあるを見たり、之關東都督府陸軍倉庫鐵嶺支庫に屬する陸軍專用の停車場にして、軍需品の積卸を爲す所なり、其周圍に大なる倉庫數棟、軒を並べて建てられ、鐵嶺市街に一壯觀を添ふ、

此外輕便鐵道あり、一は馬蜂溝より鐵嶺軍用停車場に至る線にして、一は鐵嶺城園線也、何れも鐵嶺軍政署及び陸軍支庫に屬し、複線にして貨物の運搬、殊に軍需品の運搬に用ひらる、

水運は即ち遼河に依る、遼河々畔には馬蜂溝あり、鐵嶺の附屬港なり、鐵嶺の貨物は多く此處より水運によりて運搬せらる、其現況は明日馬蜂溝を訪ひて親しく觀察したる後記す事とせん、

鐵嶺には戰爭後我國にて軍政を布けり、而して遠からず奉天領事館鐵嶺分館開館せられて、軍政は撤去せらるべしと云ふ、淸國官吏としては、知縣此處に駐在し、奉天

將軍の下に屬して、此地方の行政、裁判所の事務に當る、

此地には目下我陸軍第十四師團司令部あり、其第五十五聯隊は鐵嶺に、第五十六聯隊は昌圖に、第五十三聯隊は安東縣に、第五十四聯隊は奉天に駐屯し、各近傍の鐵道守備に任ず、近來馬賊の出沒盛なるを以て、鐵嶺駐屯の第五十六聯隊は多く地方に分遣せられ、冬營の準備を整へて、之が掃蕩に當る筈なりと、我陸軍にては停車場の北に廣大なる地を相し、兵營新築を企て、吾人の訪ひしときは、盛に建築に從ひつゝありき、

鐵嶺の教育機關として新教育を施すものに、兩等小學堂あり、淸人の經營になるものにして、教員は皆支那人を用ひ、日本の制度に倣ひて組織し、專ら淸人の子弟を教育す、學校の內部は小學堂と師範學堂とに分れ、小學堂の教科は我が小學校と等しく、師範學堂の教科は我が師範學校と異る所なし、小學堂生徒百六名、師範學堂生徒五十名あり、寄宿舍を設けて生徒を寄宿せしめ、教員も亦宿舍內に起臥し熱心育英に從事せり、校長は畢人にして齡當に五十、吾人の訪ひしときは暑中休暇中なりしを以て、生徒は一人も居らざりしが、夏期講習を開きて地方村落の教員を傳習しつつありき、教科書は皆な我國にて出版せられ、上海商務印書館にて飜譯發行せしも

のを用ふ此外には學校として見るべきものなく、只寺小屋の存するあるのみ、

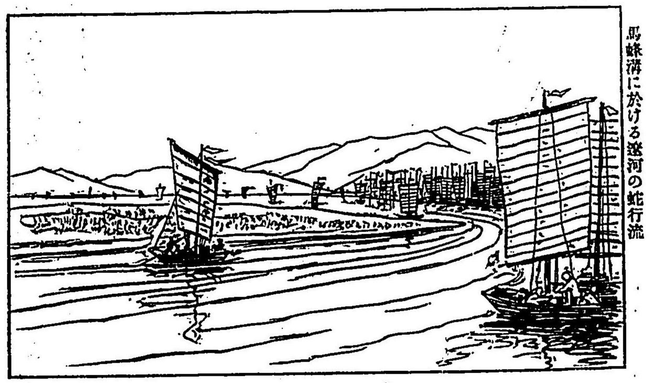
鐵嶺は滿洲に於ける我勢力圏中北部の要地にして此市の經營失敗する事あらんか、我國力を北滿洲に及ぼす能はざるべきは勿論、却て再び露國の爲めに壓迫せられ、南滿洲の經營を妨げらるゝ恐あり、軍事上頗る重要の地たり、且つ東部蒙古及び北滿洲方面より來る貨物其他附近平野より出づる物産の集散地として商業上に於ても頗る重要なる位置を占む、故に我國に於ては鋭意之が經營に從ひつゝある が如し、已に述べし如く、或は商品陳列館を置きて商權を握らんとし、或は輕便鐵道を設けて交通の便を謀り、或は溝渠を穿ちて市街を清潔にし、或は宏大なる兵營を造りて軍備を嚴にする等、一日の訪問者たる吾人の目にも、幾分當局の苦心を察するを得たり、

七月二十七日　晴

馬蜂溝、夜、遼陽に向ふ、

午前七時宿舍を出で、道を西に取りて、鐵嶺の附屬港たる、遼河畔の馬蜂溝に向ひ、午前八時到着す、

鐵嶺より馬蜂溝に至る道は、其の西門より出づ距離約二十六町その間、極めて平坦



馬蜂溝に於ける遼河の蛇行流

なる大道にして道幅約四間許、市街より約半里許の間は路上長三尺巾二尺位の大石を一面に敷きつめ、支那道路の特徴たる泥濘車軸を沒する奇觀は、茲には見るを得ざりき、是れ露國經營時代に、馬蜂溝より鐵嶺に向て貨物を運搬するに便せんが爲めにかく道路を修築せしものゝ半成れるなりと云ふ、これを過ぎて後約半里馬蜂溝に至るの間は依然たる支那道路にして歩行困難なりき、

馬蜂溝は東南に流れたる遼河が西南に流れんとする屈曲點にある一小村落にして、河幅約百米位もあるべく、深さは目下雨季增水中なれば二米七八十ありと云ふ、遼河は茲に屈曲せるが故に、恰も海の灣入せる所多くは自然の良港をなすが如く、馬蜂溝も亦自然に碇泊場の形勢を